

日系研修に係るグッドプラクティス 及びニーズ調査報告書

平成25年4月
(2013年)

独立行政法人国際協力機構
横浜国際センター

横浜セ
J R
13-1

日系研修に係るグッドプラクティス 及びニーズ調査報告書

平成25年4月
(2013年)

独立行政法人国際協力機構
横浜国際センター

序 文

独立行政法人国際協力機構（JICA）は、前身の国際協力事業団より長年にわたって中南米地域への日本人の海外移住の援助を実施してきたが、これまでに JICA のかかわる移住者として計約 7 万 3,000 人が中南米地域に移住した。歴史的には、日本政府による日本人の海外移住は、1868 年のハワイ移住に始まり、現在、中南米地域の日系人人口は 150 万人を超えるものと推定される。

2003 年の JICA の独立行政法人化に伴い、日系研修事業は、日系社会ボランティア派遣事業とともに、「日系人を通じた技術協力事業」に基づく目的達成業務から、「国民参加型事業」に位置づけが見直された。日系研修事業は、前身の移住者技術研修事業の実績を含め、2011 年度までに計 15 カ国から計 4,697 名の日系人の受入れを行ってきている。日系研修事業は、医学、福祉、継承日本教育、農業、電気・通信等、幅広い分野で日系研修員を受入れ、日系人の能力向上を図ることをもって、移住先国の国づくりに貢献してきている。

帰国日系研修員は各分野において活躍しているが、日系研修員の帰国後の動向及び研修の効果は必ずしもまとまった形で整理されていない。また、日系研修事業は国民参加型事業として位置づけられたことから、日本国内の地方自治体及び企業、大学、研究機関、非政府組織（NGO）等の機関からの提案に基づき実施されているが、日本国内の機関は、日系社会の現在の動向や研修ニーズに係る情報を十分に入手できていない状況にあった。

係る背景から、日系研修事業の成果を発信するとともに事業の戦略性を高めるため、帰国日系研修員の動向を調査し、また日系社会の現在の動向及び研修ニーズに係る調査を実施する必要が生じた。

本報告書は、過去の日系研修事業の実績を分析するとともに、ブラジル連邦共和国及びパラグアイ共和国において帰国日系研修員に対するインタビュー調査等を実施し、日系研修に係るグッドプラクティス及びニーズを取りまとめたものであり、関係者に広く活用されることを願うものである。

ここに、本調査にご協力を頂いた外務省、在ブラジル日本大使館、在パラグアイ日本大使館、ブラジル及びパラグアイの日系団体、外部有識者など内外関係機関の方々に深く感謝申し上げるとともに、引き続き一層のご支援をお願いする次第である。

平成 25 年 4 月

独立行政法人国際協力機構
横浜国際センター所長 北中 真人

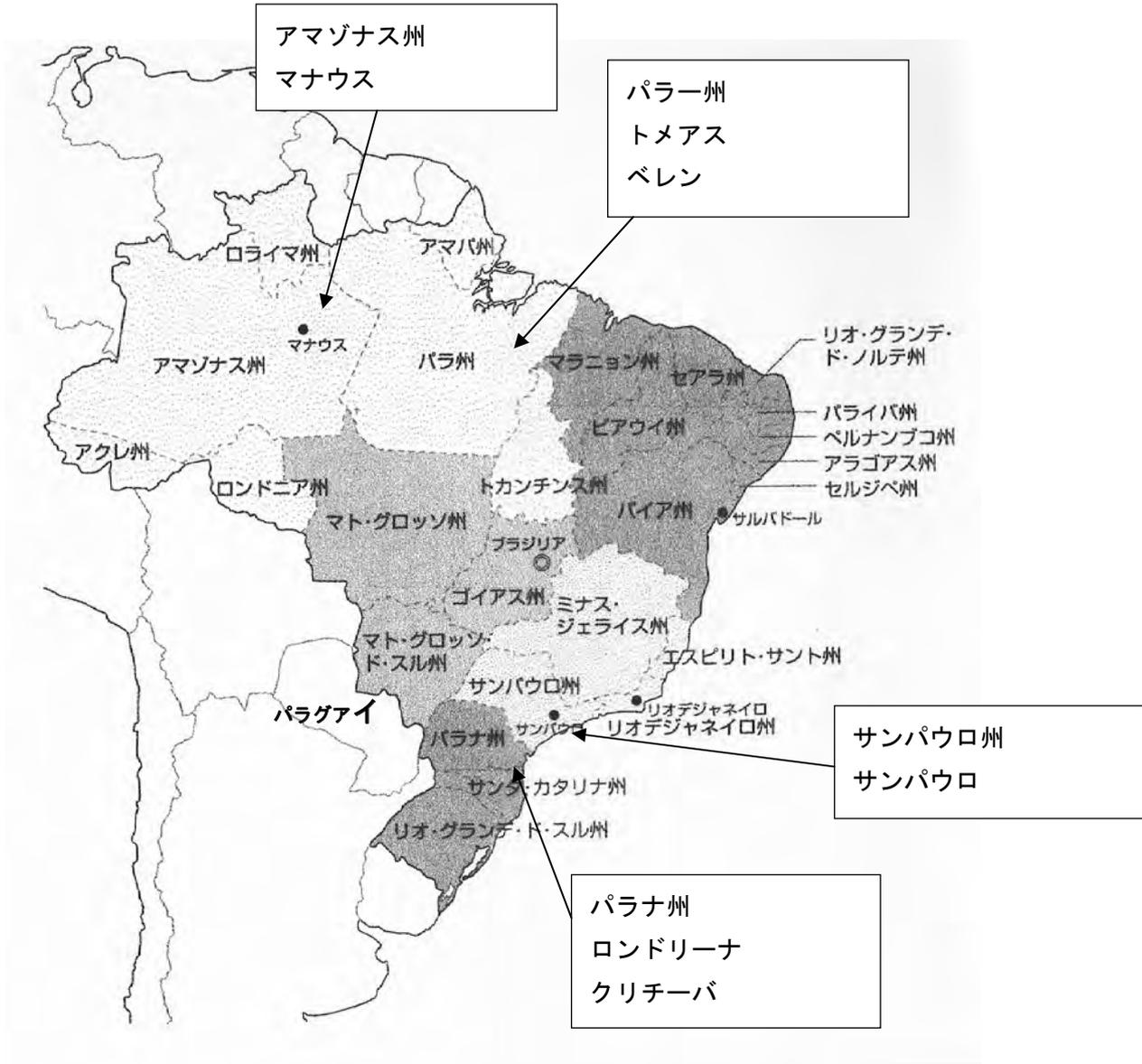
目 次

序 文
目 次
地 図
写 真

第1章 調査の概要	1
1-1 調査の目的	1
1-2 調査の方法	1
1-3 調査団の構成	2
1-4 現地調査日程	3
1-5 主要面談者	4
1-6 調査結果の概要	7
第2章 近年の日系研修事業の動向	8
2-1 日系研修員の実績に係る分析	8
2-2 日系研修の提案実績に係る分析	13
第3章 ブラジルにおける日系研修ニーズ	15
3-1 ブラジルにおける日系人の社会経済状況	15
3-2 ブラジルにおける日系研修ニーズ	16
第4章 パラグアイにおける日系研修ニーズ	18
4-1 パラグアイにおける日系人の社会経済状況	18
4-2 パラグアイにおける日系研修ニーズ	21
第5章 日系研修に係るグッドプラクティス	24
5-1 ブラジルにおける帰国日系研修員	24
5-2 パラグアイにおける帰国日系研修員	50
付属資料	
1. 県別充足率等の経年推移	73
2. 質問票様式（和文のみ）	79
3. アンケート（個人用）集計結果 <ブラジル>	87
4. アンケート（個人用）集計結果 <パラグアイ>	90

地 図

ブラジル連邦共和国



写真

ブラジル ①



パラナ州立大学生物研究所
Berenice Tomoko Tatibana 帰国研修員



パラナ州クリチーバ
Elizete Miyazaki Ono 帰国研修員



パラナ州クリチーバ
Rejina Hiromi Nakamoto 帰国研修員



パラ州トメアス総合農業協同組合理事長
Francisco Wataru Sakaguci 帰国研修員



パラー日系商工会議所
Julieta Noriko Nagaishi 帰国研修員、
山本 陽三 副会頭



パラ州ベレン 汎アマゾニア日伯協会
Julieta Noriko Nagaishi 帰国研修員、Sandra Uesugi
帰国研修員、Marcia Yumi Miyagawa 帰国研修員、Yuji
Magalhaes Ikuta 帰国研修員（前列左から）

ブラジル ②



パラ州アマゾニア日伯援護協会 厚生ホーム
ニギニギ体操
Akiko Nara Shimokozono Takano 帰国研修員、
本多 孝治 SV



アマゾナス州マナウス 西部アマゾン日伯協会
日本語教室 Ayako Kohata 帰国研修員



アマゾナス州マナウス 開業クリニック
Renata Mayumi Onogi 帰国研修員

パラグアイ ①



イグアス診療所デイケアサービス
仙野 良子 帰国研修員



イグアス聖霊幼稚園 井上 夏子 帰国研修員



イグアス農協 堤 剛史 帰国研修員



ピラポ農協 篠藤 真弓 帰国研修員

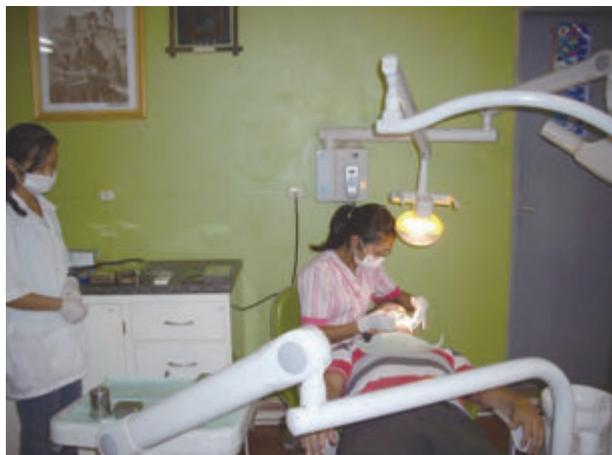


ラパス日本語学校 渡辺 美和 帰国研修員



ラパス診療所デイケアサービス
石川 三枝子 帰国研修員

パラグアイ ②



フラム歯科クリニック
星 あゆみ 帰国研修員



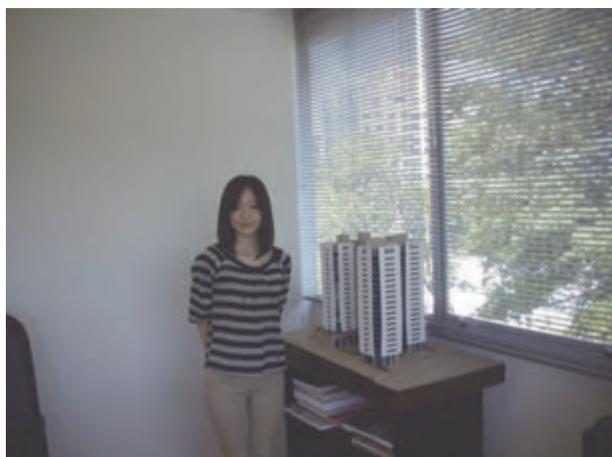
エンカルナシオン日本語学校
山本 由紀子 帰国研修員



アスンシオン日本語学校
堤田 鳴美 帰国研修員



アスンシオンビジュアルバ歯科ラボ
池田 広美 帰国研修員



アスンシオン GA&W 建築事務所
山中 恵 帰国研修員



アスンシオン厚生省救急センター等勤務
八木 ヘンリー 帰国研修員

第1章 調査の概要

1-1 調査の目的

独立行政法人国際協力機構（以下、「JICA」と記す）は、前身の国際協力事業団より長年にわたって中南米地域への日本人の海外移住の援助を実施してきたが、これまでに JICA のかかわる移住者として計約 7 万 3,000 人が中南米地域に移住した。歴史的には、日本政府による日本人の海外移住は、1868 年のハワイ移住に始まり、現在、中南米地域の日系人人口は 150 万人を超えるものと推定される。

2003 年の JICA の独立行政法人化に伴い、日系研修事業は、日系社会ボランティア派遣事業とともに、「日系人を通じた技術協力事業」に基づく目的達成業務から、「国民参加型事業」に位置づけが見直された。日系研修事業は、前身の移住者技術研修事業の実績を含め、2011 年度までに計 15 カ国から計 4,697 名の日系人の受入れを行ってきた。日系研修事業は、医学、福祉、継承日本教育、農業、電気・通信等、幅広い分野で日系研修員を受入れ、日系人の能力向上を図ることをもって、移住先国の国づくりに貢献してきている。

帰国日系研修員は、各分野において活躍しているが、日系研修員の帰国後の動向及び研修の効果は必ずしもまとまった形で整理されていない。また、系研修事業は国民参加型事業として位置づけられたことから、日本国内の地方自治体及び企業、大学、研究機関、非政府組織（NGO）等の機関からの提案に基づき日実施されているが、日本国内の機関は、必ずしも日系社会の現在の動向や研修ニーズに係る情報を入手できていない。

係る背景から、日系研修事業の成果を発信するとともに事業の戦略性を高めるため、帰国日系研修員の動向を調査し、また日系社会の現在の動向及び研修ニーズに係る調査を実施する必要が生じた。

本調査は、日系研修事業に係るグッドプラクティスの情報収集及び取りまとめを行い、日系研修事業の成果を対外的に発信することに資するとともに、日系人の研修ニーズを情報収集・分析し、研修ニーズに合致した日系研修に係る提案提出を促進することに資することを目的とする。

日系人の研修ニーズに係る情報収集及び分析は、近年の日系研修に係る提案の動向、わが国政府の方針、日系人の社会経済状況等を踏まえて行う。また、本調査における現地調査は、日系研修事業の対象国（アルゼンチン、ボリビア、ブラジル、チリ、コロンビア、キューバ、ドミニカ共和国、メキシコ、パラグアイ、ペルー、ウルグアイ、ベネズエラ:以下、「事業対象国」と記す）のうち、ブラジル連邦共和国（以下、「ブラジル」と記す）及びパラグアイ共和国（以下、「パラグアイ」と記す）を主な対象とする。

1-2 調査の方法

本調査期間は、2013 年 1 月中旬から 3 月中旬であり、1 月中旬から 2 月中旬にかけて国内調査、2 月中旬から 3 月上旬にかけて現地調査を実施した。国内調査は、近年の日系研修事業実績に係る各種データの分析、ブラジル及びパラグアイの日系社会に係る情報収集等を行った。ブラジル及びパラグアイの日系社会に係る情報収集は、日本国内で入手可能な文献に限られることから、外部有識者等に対するヒアリングを中心に実施した（ヒアリングを行った外部有識者は、1-4

主要面談者リストを参照)。

現地調査においてはブラジル及びパラグアイの帰国日系研修員計約 60 名に対し、研修参加後に研修で得られた知見の活用結果等についてインタビュー調査を実施した。日系研修に係るグッドプラクティスは、日系研修で得られた知見を活用して社会的に活躍している帰国日系研修員とし、JICA 事務所からの推薦により選定した。また、日本商工会議所、農業協同組合、都道府県人会連合会、医師会等の各種日系団体に対し、日系研修に係る評価及びニーズについてインタビュー調査を実施した。それらのインタビュー調査は、事前に送付した質問票の内容に沿って行った（質問票の様式は、付属資料を参照）。

ブラジル及びパラグアイの日系人を対象に質問票を配布し、日系研修の認知度及び研修ニーズ等に係るアンケート調査を実施した。質問票はコンサルタントが作成した和文をブラジル及びパラグアイの JICA 事務所にてポルトガル語及びスペイン語にそれぞれ翻訳した。また、質問票の回答についてもブラジル及びパラグアイの JICA 事務所にてそれぞれ和訳を行った。ブラジルについては 2008 年から 2012 年の帰国日系研修員に電子メールにて送付し、回収締切日までに翻訳の完了した 126 部の集計を行った。また、パラグアイについてはパラグアイ日本人会連合会を通じて各日本人会に電子メールにて送付し、各日本人会が各地の日系人に配布し、提出締切日までに和訳の完了した 119 部の集計を行った。

1-3 調査団の構成

1-3-1 ブラジル

担当分野	氏名	所属	現地滞在期間
総括	内田 誠	JICA 横浜国際センター市民参加協力課	2月25日～3月2日
協力企画	越智 薫	JICA 横浜国際センター市民参加協力課	2月26日～2月27日
研修ニーズ分析	角田 茂夫	(株)グローバル開発経営コンサルタンツ	2月18日～2月28日
ブラジル調査	玉井 政彦	(株)グローバル開発経営コンサルタンツ	2月18日～3月4日

1-3-2 パラグアイ

担当分野	氏名	所属	現地滞在期間
総括	越智 薫	JICA 横浜国際センター市民参加協力課	2月27日～3月4日
パラグアイ調査	田畑 成章	(株)グローバル開発経営コンサルタンツ	2月18日～3月4日

1-4 現地調査日程

1-4-1 ブラジル

現地調査は2013年2月17日から3月6日までの期間で実施された。

調査日程の概要は、以下のとおりである。

		角田団員(日系研修に係るニーズ分析)			玉井団員(ブラジル調査)			内田団員(総括)			越智団員(協力企画)		
月日	曜日	時間	行動	宿泊	時間	行動	宿泊	時間	行動	宿泊	時間	行動	宿泊
2月17日	日	15:30	成田発 DL296	機内	15:30	成田発 DL296	機内						
2月18日	月	7:15	サンパウロ着 DL105	サンパウロ	7:15	サンパウロ着 DL105	サンパウロ						
		11:00	JICAサンパウロ打合せ		11:00	JICAサンパウロ打合せ							
		14:00	在サンパウロ総領事館(表敬)		14:00	在サンパウロ総領事館(表敬)							
		15:30	帰国研修員ヒアリング(2名)		15:30	帰国研修員ヒアリング(2名)							
2月19日	火	9:00	ブラジル日本文化福祉協会	サンパウロ	9:00	ブラジル日本文化福祉協会	サンパウロ						
		10:00	ブラジル日本都道府県人会連合会		10:00	ブラジル日本都道府県人会連合会							
		10:40	サンパウロ人文科学研究所		10:40	サンパウロ人文科学研究所							
		11:20	サンパウロ日伯保護協会		11:20	サンパウロ日伯保護協会							
		14:00	帰国研修員ヒアリング(4名)		14:00	帰国研修員ヒアリング(4名)							
2月20日	水	9:00	ブラジル日本商工会議所		9:00	ブラジル日本商工会議所							
		14:00	帰国研修員ヒアリング(2名)		14:00	帰国研修員ヒアリング(2名)							
		18:23	サンパウロ発 JJ3767		18:23	サンパウロ発 JJ3767							
		19:25	ロンドリーナ着	ロンドリーナ	19:25	ロンドリーナ着	ロンドリーナ						
2月21日	木	9:30	バナー日伯文化連合会		9:30	バナー日伯文化連合会							
		10:30	帰国研修員ヒアリング(2名)		10:30	帰国研修員ヒアリング(2名)							
		18:25	ロンドリーナ発 JJ3332		18:25	ロンドリーナ発 JJ3332							
		19:14	クリチーバ着	クリチーバ	19:14	クリチーバ着	クリチーバ						
2月22日	金	9:00	在クリチーバ総領事館(表敬)		9:00	在クリチーバ総領事館(表敬)	クリチーバ						
		10:00	バナー日伯商工会議所		10:00	バナー日伯商工会議所							
		11:00	クリチーバ日伯文化保護協会		11:00	クリチーバ日伯文化保護協会							
		14:00	帰国研修員ヒアリング(2名)		14:00	帰国研修員ヒアリング(2名)							
		18:45	クリチーバ発 JJ3016		18:45	クリチーバ発 JJ3016							
		19:49	サンパウロ着	サンパウロ	19:49	サンパウロ着	サンパウロ						
2月23日	土		調査内容取りまとめ 帰国研修員会食等(各自負担)	サンパウロ		調査内容取りまとめ 17:15 クリチーバ発 JJ3886 22:40 バレーン着 JJ3448	バレーン						
2月24日	日		調査内容取りまとめ 帰国研修員会食等(各自負担)	サンパウロ		バレーン発(陸路4時間程度) トマス着 調査内容取りまとめ 帰国研修員会食等(各自負担)	トマス	15:30	成田発 DL296	機内			
2月25日	月	10:00	ブラガンサ日本語学校(Ms.Akiko Uenishi)	サンパウロ	8:30	トマス総合農業協同組合		7:25	ブラリア着 DL221			成田発 11:55	
		11:00	YAKULT和牛(Ms.Evelyn Metidieri)		10:00	トマス文化農業振興協会		9:30	JICAブラジル 打合せ				
		14:00	鍼灸診療所(Ms.Teresinha Sassai)		11:00	帰国研修員ヒアリング(3名)		11:00	在ブラジル大使館(表敬)				
		15:30	「ピラルク」養殖所(Mr.Tatsuro Konoike)		14:00	トマス発(陸路4時間程度)		14:00	ブラジル日本語普及会				
					18:00	バレーン着	バレーン	16:00	帰国研修員ヒアリング(3名)				
								20:05	ブラリア発 JJ3448				
								21:40	バレーン着	バレーン			機内
2月26日	火	10:00	サンパウロ保護協会(あけぼのホーム) (Ms.Satie Kenmoku)	サンパウロ	9:00	アマゾン日伯保護協会	バレーン	9:00	アマゾン日伯保護協会	バレーン		サンパウロ着 04:55	サンパウロ
		14:00	AC CAMARGO(がん専門病院) (Mr.Hirofumi Iyeyasu)		10:00	バナー日系商工会議所		10:00	バナー日系商工会議所				ブラジル日本人移民史料館訪問 ブラジル日本文化福祉協会打合せ
		10:00	サンパウロ大学病院(Ms. Terezinha Hiroko Hashimoto)(高齢者福祉)	サンパウロ	11:00	汎アマゾン日伯協会		11:00	汎アマゾン日伯協会				
		14:00	帰国研修員ヒアリング(3名) JICAサンパウロへの報告書作成		14:00	帰国研修員ヒアリング(3名)		14:00	帰国研修員ヒアリング(3名)				
2月27日	水	10:00	サンパウロへの報告	サンパウロ	9:30	在バレーン総領事館(表敬)		9:30	在バレーン総領事館(表敬)			サンパウロ発 09:20	
		14:00	帰国研修員ヒアリング(3名)		12:35	バレーン発 JJ3890		12:35	バレーン発 JJ3890				
					13:40	マナウス着	マナウス	13:40	マナウス着	マナウス		アスンシオン着 11:20	アスンシオン
					16:30	アマゾナス商工会議所		16:30	アマゾナス商工会議所				
					17:30	帰国研修員ヒアリング(2名)		17:30	帰国研修員ヒアリング(2名)				
2月28日	木		JICAサンパウロへの報告		9:30	在マナウス総領事館(表敬)		9:30	在マナウス総領事館(表敬)				
		22:35	サンパウロ発 DL104	機内	10:30	西部アマゾン日伯協会		10:30	西部アマゾン日伯協会				
					16:42	マナウス発 JJ3749		16:42	マナウス発 JJ3749				
					21:30	サンパウロ着	サンパウロ	21:30	サンパウロ着	サンパウロ			
3月1日	金		日付変更線通過	機内	9:00	サンパウロ新聞	サンパウロ	9:00	サンパウロ新聞	サンパウロ			
					10:00	ニッケイ新聞		10:00	ニッケイ新聞				
					11:00	ブラジル日本語センター		11:00	ブラジル日本語センター				
					14:00	帰国研修員ヒアリング(2名)		14:00	帰国研修員ヒアリング(2名)				
					15:00	ブラジル研究者協会(SBPN)		15:00	ブラジル研究者協会(SBPN)				
					16:00	サンパウロ帰国研修員同窓会 (ABJICA)		16:00	サンパウロ帰国研修員同窓会 (ABJICA)				
3月2日	土	16:20	成田着 DL295			調査事項取りまとめ 帰国研修員会食等(各自負担)	サンパウロ		調査事項取りまとめ 帰国研修員会食等(各自負担)				
3月3日	日					JICAサンパウロへの報告書作成	サンパウロ		日付変更線通過	機内			
3月4日	月					JICAサンパウロへの報告 午後: 予備	機内						
					22:35	サンパウロ発 DL104		16:15	成田着 DL275				
3月5日	火					日付変更線通過	機内						
3月6日	水					16:20	成田着 DL295						

1-4-2 パラグアイ

現地調査は2013年2月17日から3月6日までの期間で実施された。

調査日程の概要は、以下のとおりである。

月/日	曜	時間	田畑(パラグアイ調査)	場所	宿泊	越智(総括)	場所	宿泊
2月17日	日	11:55 20:45	VS901 成田→15:30 ロンドン JJ8085 ロンドン→04:55(+1) サンパウロ		機中			機中
1	2月18日	月	9:20 15:00 16:00	JJ8365 サンパウロ→11:20 アスンシオン JICA事務所 パラグアイ日本人会連合会	アスンシオン	アスンシオン		
2	2月19日	火	午前 14:00 15:30	移動→イグアス イグアス日本人会 研修員(井上 夏子-幼児教育)	イグアス	イグアス		
3	2月20日	水	9:00 11:00 午後	イグアス農協 イグアス日本語学校 研修員	イグアス	イグアス		
4	2月21日	木	7:00 10:30 14:00	移動:→ピラボ 研修員 ピラボ日本人会、研修員	ピラボ	ピラボ		
5	2月22日	金	午前 午後	ピラボ農協、ピラボ日本語学校 移動:→エンカルナシオン、連合会会長	ピラボ エンカルナシオン	エンカルナシオン		
6	2月23日	土	午前 午後	研修員 資料整理	エンカルナシオン	エンカルナシオン		
7	2月24日	日		資料整理		エンカルナシオン		
8	2月25日	月	8:00 9:30 午後	ラパス日本人会 ラパス農協、研修員(北川-日系農協中堅実務者研修) ラパス日本語学校、研修員	ラパス	エンカルナシオン		機中
9	2月26日	火	午前 午後	移動:エンカルナシオン→アスンシオン 医師会、商工会議所	アスンシオン	アスンシオン	AM ブラジル文化福祉協会面談 PM ブラジル日本移民史料館訪問	サンパウロ サンパウロ
10	2月27日	水	13:30	研修員	アスンシオン	アスンシオン	9:20→11:20 JJ8365サンパウロ→アスンシオン	アスンシオン アスンシオン
11	2月28日	木	8:30 10:00 午後	アスンシオン日本人会 アスンシオン日本語学校 研修員、OB会	アスンシオン	アスンシオン	アスンシオン日本人会 アスンシオン日本語学校 研修員、OB会	アスンシオン アスンシオン
12	3月1日	金	8:30 午後	日系農協中央会 現地調査報告:大使館報告、JICA事務所	アスンシオン	アスンシオン	日系農協中央会 現地調査報告:大使館報告、JICA事務所	アスンシオン アスンシオン
13	3月2日	土	午前	研修員	アスンシオン	アスンシオン	研修員 19:05→21:10JJ8364 サンパウロ→アスンシオン 23:40→13:55(+1) サンパウロ→ロンドン	アスンシオン 機中
14	3月3日	日		資料整理	アスンシオン	アスンシオン	19:00 NH202ロンドン発 15:55 成田着	機中
15	3月4日	月	午前 19:05 23:40	資料整理(パラグアイ休日) →21:10JJ8364 サンパウロ→アスンシオン →13:55(+1) サンパウロ→ロンドン	アスンシオン	機中		
	3月5日	火		19:00 NH202ロンドン発		機中		
	3月6日	水		15:55 成田着				
				質問票回収・分析				

1-5 主要面談者(敬称略)

1-5-1 日本国内

(1) ブラジル調査

面談者氏名	現職
堀坂 浩太郎	上智大学名誉教授
芳賀 克彦	JICA 国内事業部次長(国内連携担当)
イシ・アンジェロ (Angelo Ishi)	武蔵大学教授
筒井 茂樹	日伯農業開発(CAMPO) 諮問委員
吉田 憲	日本貿易振興機構(ジェトロ) 海外調査部 主査

(2) パラグアイ調査

豊歳 直之	パラグアイ共和国大使館 特命全権大使
田島 久歳	成城国際大学 国際人文学部 教授

1-5-2 ブラジル

団体名	面談者（役職・氏名）	
在サンパウロ日本国総領事館	領事部長	成田 強
在クリチーバ日本国総領事館	副領事	川本 奈奈
在ベレン日本国総領事館	総領事 領事	沼田 行雄 阪野 真司
在マナウス日本国総領事館	副領事	相沢 寛明
サンパウロ人文科学研究所	理事	大原 毅 星 大地
ブラジル日本文化福祉協会	会長 事務局長	木多 喜八郎 中島 エドアルド剛
ブラジル日本都道府県人連合会	会長 副会長 副会長	園田 昭憲 本橋 幹久 山田 康生
サンパウロ日伯援護協会	会長 事務局長 事務局次長	菊池 義春 足立 操 秋山 幸男
ブラジル日本商工会議所	事務局長 総務補佐	平田 藤義 日下野 成次
パラナ日伯文化連合会	会長 顧問	折笠 力己知 平澤 正人
パラナ日伯文化連合会 日本語教育センター	JICA 日系社会ボランティア	金ヶ江 洋子
パラナ日伯商工会議所	会頭	大城 義明
クリチーバ日伯文化援護協会 日本語学校（日本語講座）	校長 2 世文化部 副会長	小本ラウラ光子 Osaki Rosa
トメアス総合農業協同組合	理事長	Francisco Wataru Sakaguchi
トメアス文化協会	会長	Alberto Ke-iti Oppata
アマゾンニア日伯援護協会	事務局長	太田 薫
汎アマゾンニア日伯協会	事務局長	堤 剛太
パラナ日系商工会議所	副会頭	山本 陽三
北伯日本語普及センター		山瀬 檜麻
アマゾナス日系商工会議所	元会頭 事務局長	Yamagishi Teruaki Handa Ritsuko
西部アマゾン日伯協会	会長	錦戸 健
ブラジル日本語センター	事務局長 事務局次長 教務主任	丹羽 義和 池本 千草 鶴田 広子
アマゾンニア日伯援護協会・ 厚生ホーム	厚生ホーム長 リハビリセンター責任者	Akiko Shimokozono Takano Marcia Yumi Miyagawa

1-5-3 パラグアイ

団体名	面談者（役職・氏名）
パラグアイ日本人会連合会	会長 小田 俊春 事務局長 合田 義雄 地域開発部長 飯田 稔
イグアス日本人会	会長 福井 一朗 教育担当 井上 幸雄
ピラポ日本人会	会長 水本 涼一
ラパス日本人会	事務局長 藤井 博
アスンシオン日本人会	会長 前原 弘道 事務局長 石川 幸伸
イグアス日本語学校	校長 佃 弥生
ピラポ日本語学校	校長 久保 喜代登
ラパス日本語学校	校長 後藤 睦子 教頭 伊藤 由美子
アスンシオン日本語学校	校長 関 ニルダ尚子
日系農業協同組合中央会	参事 安田 ペドロ
イグアス農業協同組合	副総支配人 堤 剛史
ピラポ農業協同組合	組合長理事 高橋 幸夫
ラパス農業協働組合	参事（総支配人） 小西 弘之
在パラグアイ日本商工会議所	副会頭 田中 裕一
パラグアイ日系医師会	書記担当理事 松村 喜一郎

1-6 調査結果の概要

(1) 日系研修事業の動向

本調査では、日系研修参加者の特徴を把握するため、近年の日系研修に係るデータをさまざまな観点で分析した。まず、近年の日系研修参加者の7割をブラジル及びパラグアイの参加者が占め、また日系研修参加者は7割強が大学卒以上の学歴を有し、大半が現職を有していることである。今後、日系研修の研修期間を検討するにおいては、それらの特徴を勘案し、研修コースの設計を行うべきである。

日系研修事業は、参加人数が6名以上の集団コースと参加人数が4名以下の個別コースに区分されるが、個別コースの6割から7割が応募者がいないなどの理由により不成立となっている。数年にわたって不成立となる研修は、提案団体が提案を見送るケースもあり、個別研修の提案件数がここ数年減少している。今後、日系研修事業の提案募集においては、集団研修と個別研修の人数比率や研修コース数比率を再度検討するとともに、個別研修の不成立を防止する方策を検討する必要がある。

(2) 帰国日系研修員に係る調査結果

今次調査を通じ、ブラジル及びパラグアイの帰国日系研修員が移住先の国において研修で得られた知識・経験を活用し、現地日系社会及び移住先の国づくりに貢献していることが確認された。帰国日系研修員の活躍する分野は、教育、保健医療、農業・農村開発、民間セクター開発、社会保障、情報通信技術、都市開発・地域開発等、多岐にわたる。帰国日系研修員は、教員や医師の他、市長、商工会議所事務局長、社会福祉施設の長、農業協同組合副総支配人等、団体の要職にある者も多く、各所属先を率先してさまざまな取り組みを行っている。帰国日系研修員が研修参加後に日系社会ボランティアの支援を得て取り組みを進め、成果を上げている事例も確認された。パラグアイの堤研修員の事例は、日系研修事業と日系社会ボランティア事業の相乗効果の発現している事例といえよう。

(3) 日系研修のニーズ

日系研修事業の成果が個々の帰国日系研修員に係る調査により確認された一方、ブラジル及びパラグアイにおける日系人の研修ニーズが確認された。高齢者福祉及び人材育成分野に加え、農業・農村開発分野では、農産物加工技術研修、技術習得集中研修、機能別エキスパート研修が求められている。技術習得集中研修は、農業の川下部門への事業展開のため、搾油、製麺、飼料・畜肉、肉鶏の屠畜やこれらの流通などへの事業進出を支えるものである。また、機能別エキスパート研修は、農協経営の高度化をうけ、経理、販売、マーケティング、購買、生産、営農指導等のエキスパートを育成するものである。

日本企業の海外展開が進み、中南米地域との経済関係がますます深まるなか、日本企業との連携に関係した研修も求められている。例えば日本企業の有する先進技術や、中小企業の優れた製品・技術を学ぶ、日系ネットワークを活用したビジネスを構築する、商工会議所等の経済団体で加入企業・団体のサポートを学ぶ研修等が考えられる。今次調査において確認された研修ニーズを十分に参考にして日系研修事業の提案募集を進めていくべきである。

第2章 近年の日系研修事業の動向

2-1 日系研修員の実績に係る分析

2-1-1 国別年次別の日系研修員数

日系研修員者は2004年から2012年の9年間の累計で1,121名であるが、このうちブラジルが681名、パラグアイが124名で、両国で全体の約72%を占める。さらに、ボリビア（93名）、アルゼンチン（82名）、ペルー（62名）を加えると5カ国で、全体の約93%となる（図・表2-1参照）。

図・表2-1でウルグアイ他4カ国はコロンビア、ベネズエラ、チリ、キューバの計5カ国を含むが、これら5カ国の日系研修員数は2004年から2012年の9年間の累計で20名である。

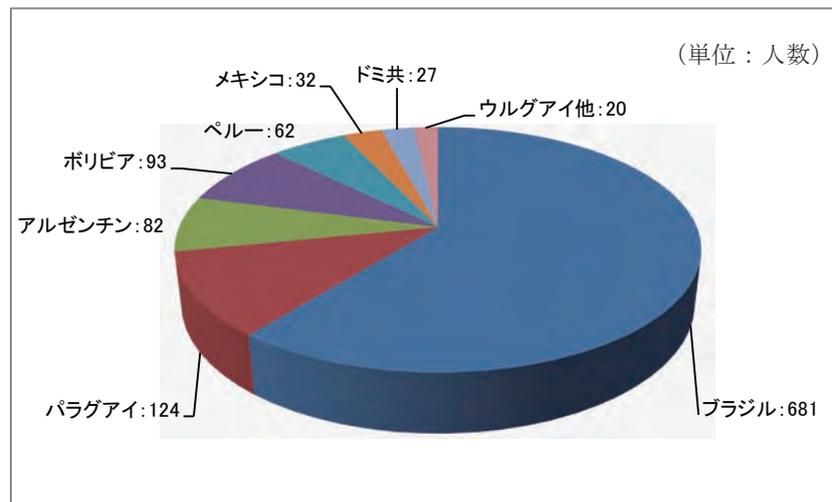


図2-1 国別年次別日系研修員数

表2-1 国別年次別日系研修員数

(単位: 人数)

国名	ブラジル	パラグアイ	ボリビア	アルゼンチン	ペルー	メキシコ	ドミニカ共和国	ウルグアイ他4国	総計(人数)
総数	681	124	93	82	62	32	27	20	1121
構成比(%)	60.7	11.1	8.3	7.3	5.5	2.8	2.4	1.9	100.0

(注) ウルグアイ他4国は、ウルグアイ、コロンビア、ベネズエラ、チリ、キューバを指す。

ブラジルの日系研修員数は2004年以降徐々に増加して2008年にピークとなり、2009年以降は低下傾向にある（図2-2参照）。2012年は日系研修員数が65名となり、2004年から2012年の9年間で過去最低の人数であった。なお、2008年はブラジルから来日した短期労働者数が31万人に達したピークの年でもあった。

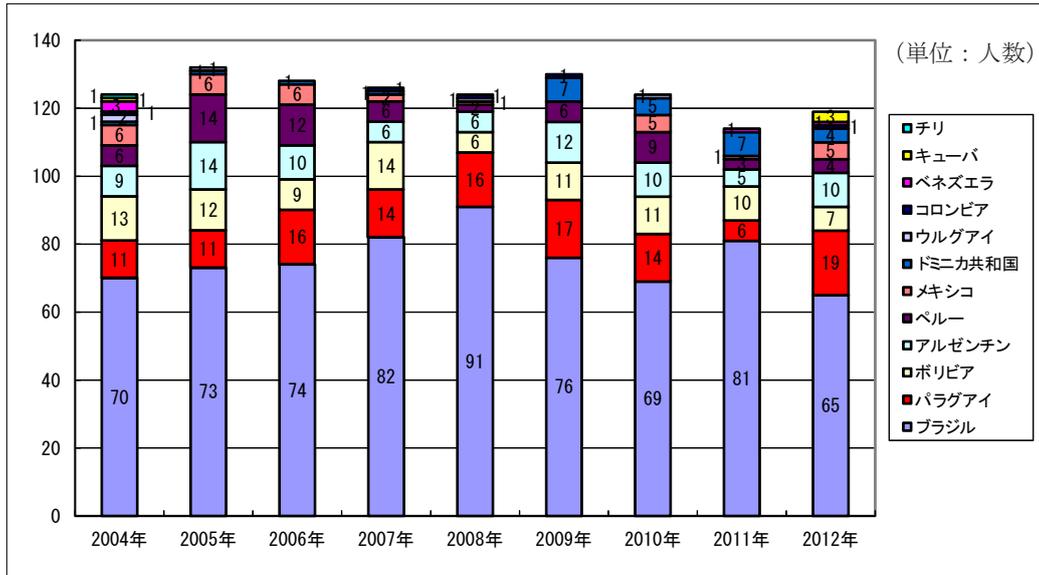


図 2-2 日系研修員数の国別経年推移

2-1-2 分野別の日系研修員数

分野別の日系研修員数の実績は、教育分野、保健医療分野、農業・農村開発分野、民間セクター開発分野が全体の 88% を占める（図 2-3 参照）。他方で、経年では教育分野及び保健医療分野が近年減少し、農業開発・農村開発分野及び民間セクター開発分野が増加傾向にある（図 2-4 参照）。

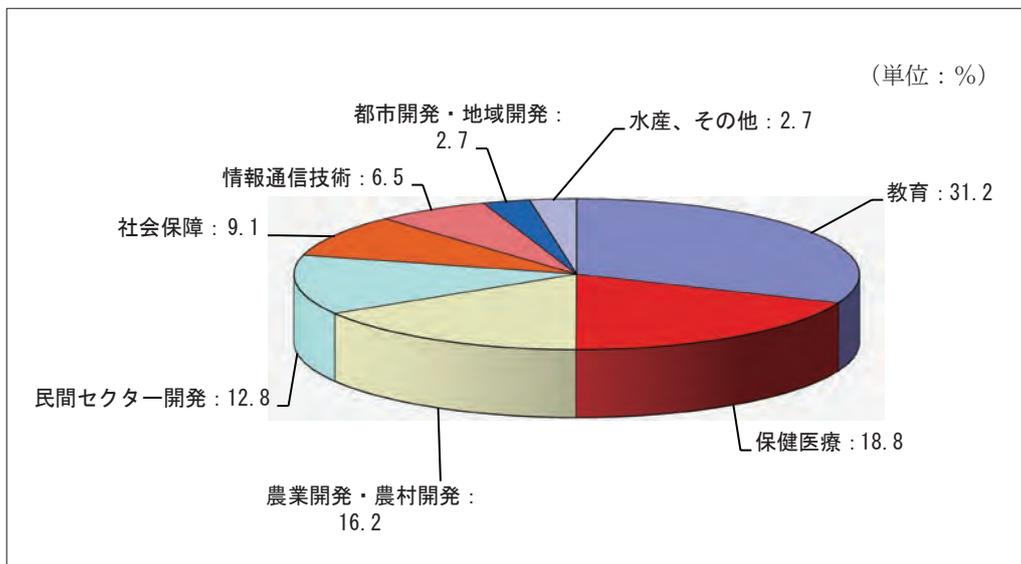


図 2-3 通年の日系研修分野の割合

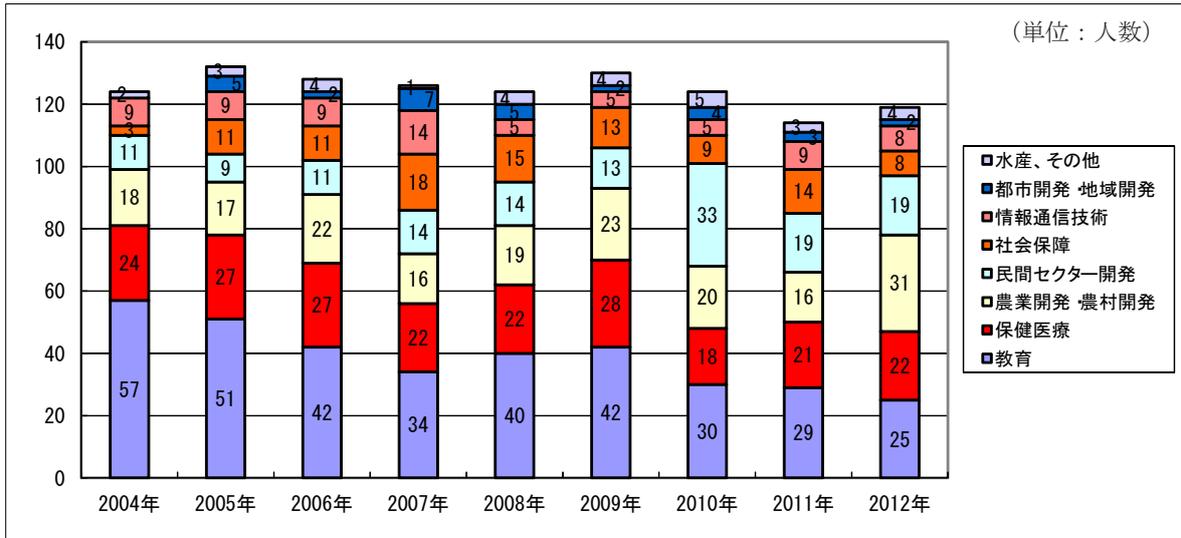


図 2-4 日系研修員数の分野別経年推移

2-1-3 サブスキーム別の日系研修員数

日系研修コースは、1コースあたりの研修員数及び研修期間により、集団コース、個別短期コース、個別長期コースに分類される。集団コースは、1コースあたりの研修員数が6名以上で研修期間が3カ月以内のものである。個別短期コースは1コースあたりの研修員数が4名以下で研修期間が3カ月以内のもの、個別長期コースは1コースあたりの研修員数が4名以下で研修期間が3カ月を越えるものである。

集団コースの日系研修員が全体の45%を占めるのに対し、個別短期及び個別長期コースの日系研修員が計55%を占める(図2-5参照)。また、経年では個別短期コースの日系研修員数に毎年変化があるが、個別長期コース及び集団コースではあまり大きな変化がない(図2-6参照)。

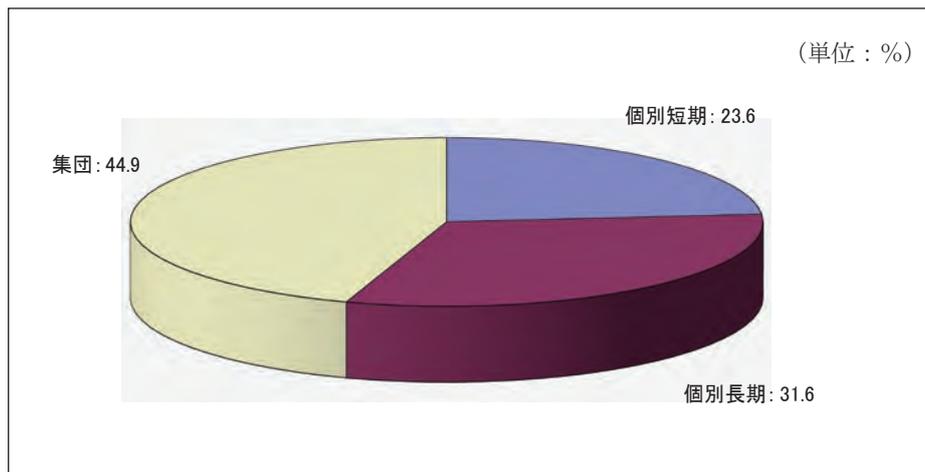


図 2-5 日系研修員数のサブスキーム別比率

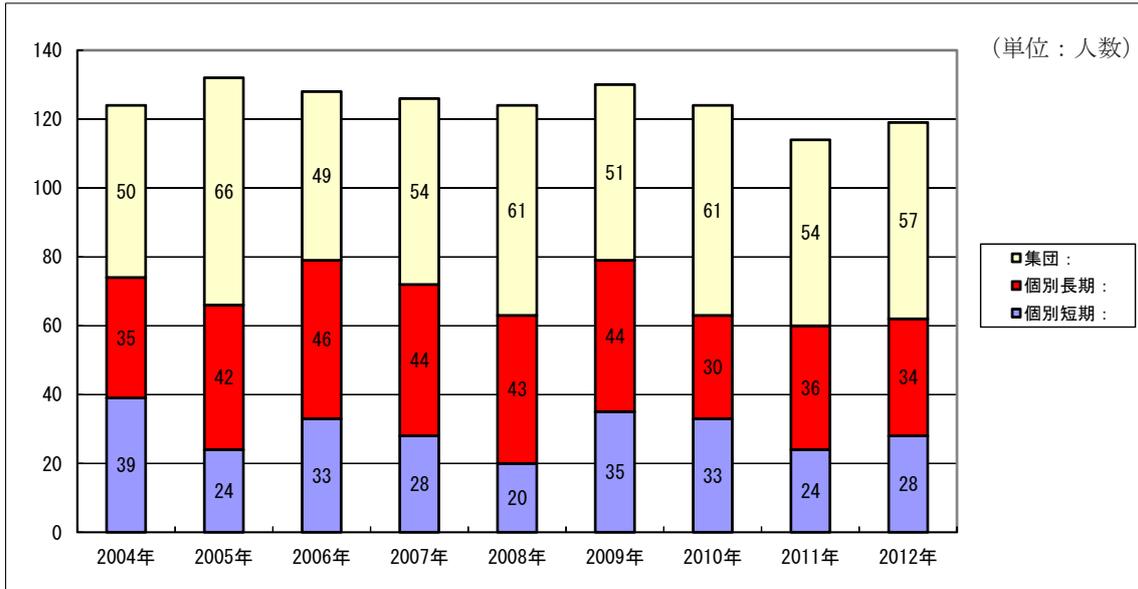


図 2-6 日系研修員数のサブスキーム別経年推移

2-1-4 日系研修員の学歴

日系研修員は、約 75%が大卒または短大卒であり、一般に高学歴者が多い（図 2-7 及び表 2-2 参照）。

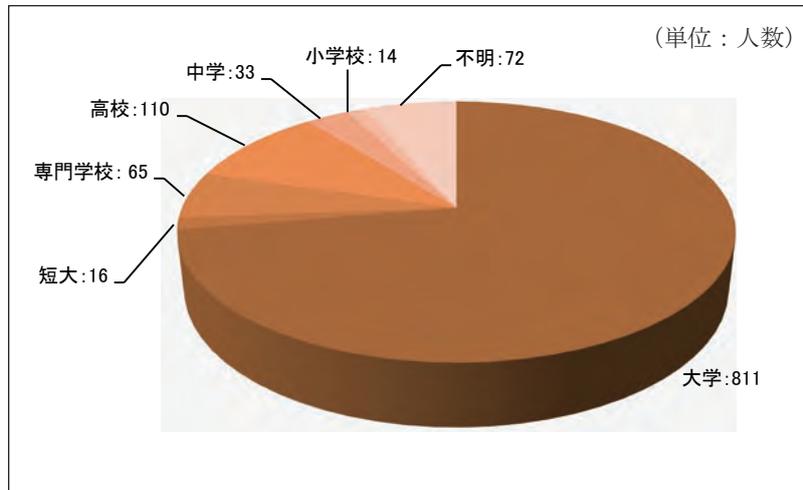


図 2-7 日系研修員の学歴

表 2-2 日系研修員の学歴 (単位：人数)

	大学	短大	専門学校	高校	中学	小学校	不明	総計
人数	811	16	65	110	33	14	72	1121
構成比 (%)	72.3	1.4	5.8	9.8	2.9	1.2	6.4	100.0

2-1-5 日系研修員の職位

日系研修員の研修前職位は、新卒・無職者層が13%と在職者が多く、在職者には医師や大学教授等の割合が比較的大きい。新卒・無職層の割合が低い要因としては、日系研修参加よりも就職を優先しているためと思われる（図2-8及び表2-3参照）。

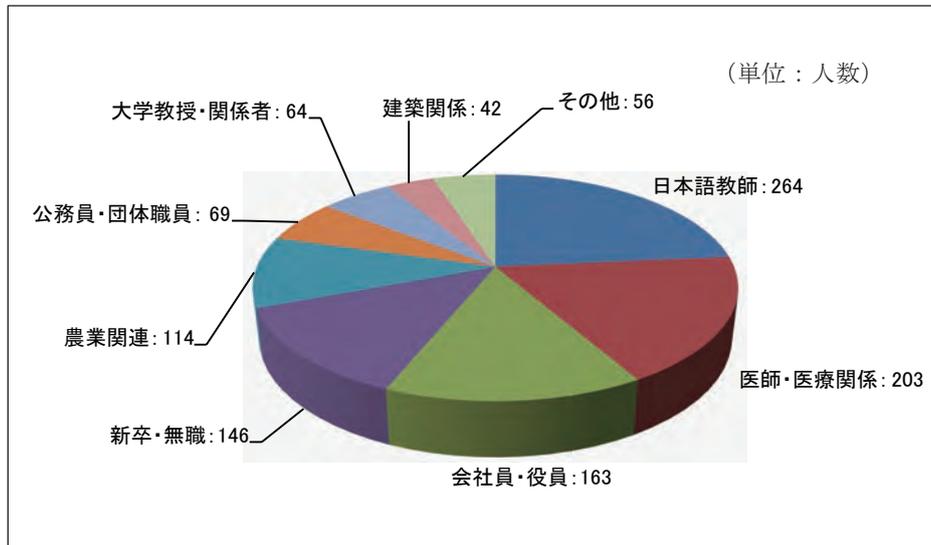


図2-8 日系研修員の職位

表2-3 日系研修員の職位

(単位: 人数)

職位	日本語教師	医師・医療関係	会社員・役員	新卒・無職	農業関連	公務員・団体職員	大学教授・関係者	建築関係	その他	総計
人数	264	203	163	146	114	649	694	42	56	1121
構成比 (%)	23.6	18.1	14.5	13.0	10.2	6.2	5.7	3.7	5.0	100.0

2-1-6 男女別の日系研修員

日系研修員数を男女別で比較すると、男性(29%)に対し、女性(71%)の比率が大きい。この要因として、男性が研修参加よりも職業を優先するとともに、就職後の長期休暇がとりにくいことによるものと思われる（図2-9参照）。

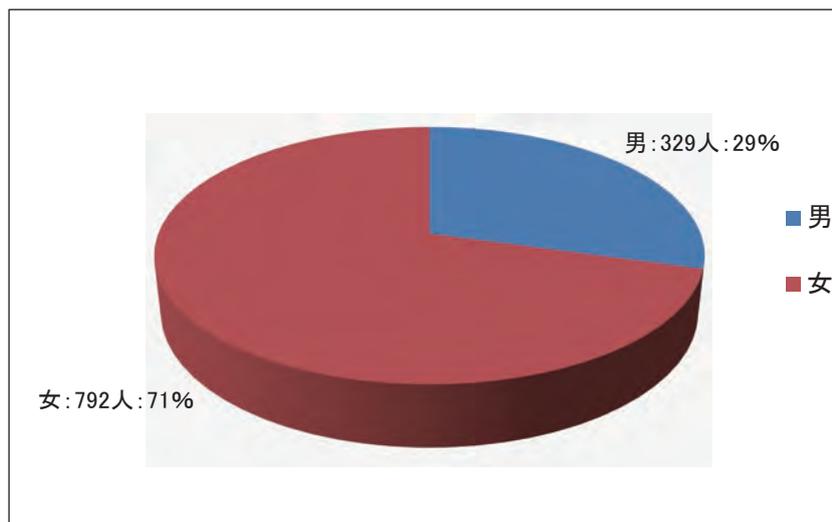


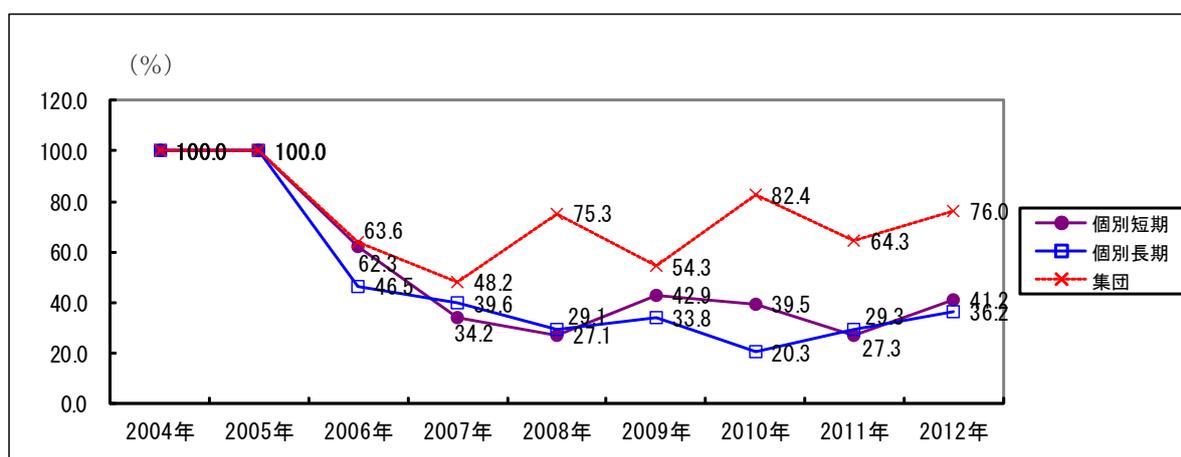
図 2 - 9 研修員の男女比

2 - 2 日系研修の提案実績に係る分析

2 - 2 - 1 サブスキーム別の日系研修充足率

日系研修事業は、国民参加型事業に位置づけられるので、日本国内の各種団体による研修提案に基づき研修員募集が行われる。毎年の日系研修員数を全研修コースの参加人数枠総数で除した数を充足率とし、日系研修事業の効率性に係る分析を行う。

集団コースの充足率は70%から80%程度と比較的高い一方で、個別短期及び個別長期コースは30%から40%程度で低迷している。なお、2004年及び2005年は日系人からの要望に基づき研修コースの提案取り付けを行っていたので、充足率が100%となっている。



	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	総計
個別短期	100.0	100.0	62.3	34.2	27.1	42.9	39.5	27.3	41.2	45.0
個別長期	100.0	100.0	46.5	39.6	29.1	33.8	20.3	29.3	36.2	37.9
集団	100.0	100.0	63.6	48.2	75.3	54.3	82.4	64.3	76.0	70.5

図 2 - 10 【サブスキーム別】充足率の経年推移

2-2-2 サブスキーム別の日系研修提案数

2004年から2012年の9年間の提案コース867件のうち、個別長期が全体の56%（490件）を占める。個別長期の提案コース数は2010年をピークとして著しく減少し、個別短期の提案コース数も同様に2010年以降減少している。この要因として、個別長期及び個別短期コースの充足率の低迷があるものと思われる。

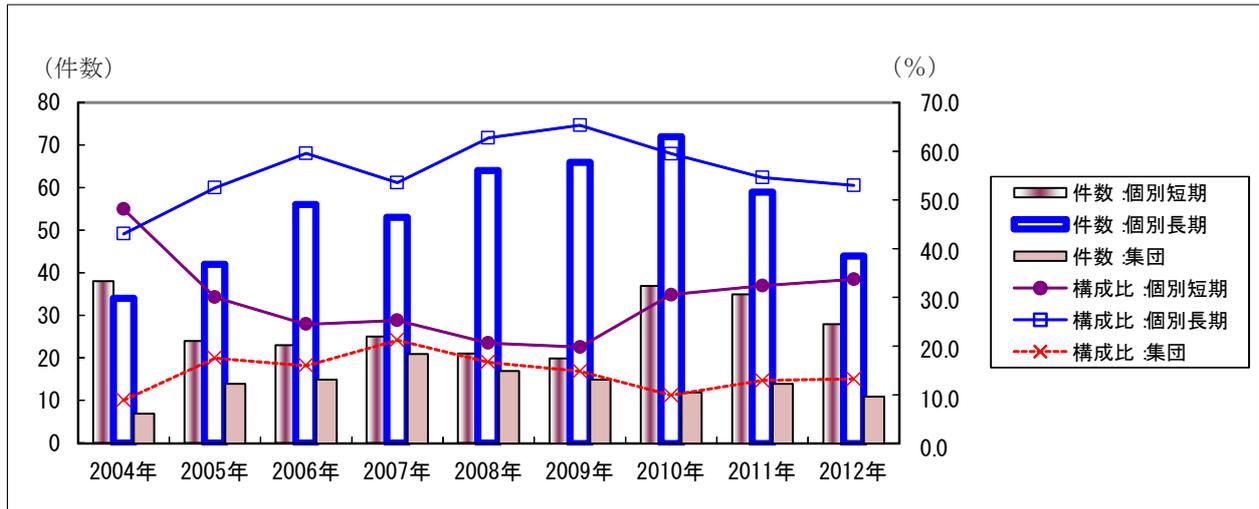


図2-11 【サブスキーム別】提案件数と構成率の経年推移

第3章 ブラジルにおける日系研修ニーズ

3-1 ブラジルにおける日系人の社会経済状況

3-1-1 人口動態

サンパウロ人文科学研究所が1987年から1988年に行った調査（以下、「1987年調査」と記す）によると、日系人人口は約120万人であり、同研究所は2013年現在の日系人人口を約160万人と推定している。ブラジルにおける日系人人口の主な特徴は、以下のとおりである。

(1) 世代交代とブラジル社会への同化

1987年当時、日系2世及び3世の占める割合が72%を超え、日系2世～4世の占める割合は85%を超えていた。日系1世は現在5万人を切っていると思われる。

また、1987年当時、日系2世の混血状況は6%、3世42%、4世はほぼ62%というように、世代交代が進むにつれて急速に混血が進んでいる。

(2) 地方部から都市部への人口移動

1987年当時、ブラジル南東部4州に日系人全体の約8割が居住し、特にサンパウロ市に32万6,000人、サンパウロ市を除く大サンパウロ圏に17万人が居住していた。まずサンパウロ州奥地のコーヒー園に農業従事者として戦前に移住した後、サンパウロ市及びサンパウロ近郊に移り住んだものと考えられる。

1987年当時、既に都市部に9割（110万4,000人）、農村部に1割（12万4,000人）の居住となっていたが、現在、都市部における日系人人口は1987年当時よりも多くなっていると推測される。

(3) 高齢化の進行

1987年当時の31歳から60歳の日系人人口は全体の約35%を占める約42万3,000人であったが、2013年現在、1987年当時に31歳から60歳であった日系人は60歳以上となっており、高齢化が進行していると推測される。

3-1-2 経済状況

ブラジルにおける日系人の経済に係る主な特徴は、以下のとおりである。

(1) 商業・サービス業の従事人口の増加

戦前の日系移住者はサンパウロ州奥地の農村部にて農業に従事したが、子弟の高学歴化に伴い、サンパウロ市等の都市部で商業・サービス業に従事する人口が増加した。例えば、パラナ州における日系人は、その多くが農業に現在も従事しているが、政治、経済、教育、医学、司法等の各分野でも活躍している。

(2) 農業の集約化・多角化

商業・サービス業に従事する人口が増加する一方で、農業は集約化が進み、日系農業者の多くは果樹・野菜・中小家畜等を中心とする集約的農業を営んでいる。大豆などを中心

に経営規模が数百 ha (ブラジルでは中規模) 以上の日系農家が畑作地帯に多い。農産物 (野菜・果物) の新作物、新品種導入と品質向上等、日系人の農業における貢献は非日系人から高く評価されている。

例えば、トメアス移住地においては、トメアス総合農業協同組合の指導により、取り扱い作物の多角化が進められ、アマゾン・フルーツの商業化を達成し、日系人入植者の功績としてブラジル国内で評価されている。トメアス移住地では、アグロ・フォレストリーと呼ばれる、農地に複数種の樹木や果樹を混植する農法を構築し、森林再生につながる「持続可能な農業」として注目されている。

3-1-3 生活文化状況

ブラジルにおける日系 1 世は日本語中心、日系 2 世は日本語・ポルトガル語併用、日系 3 世はポルトガル語中心であり、世代差が顕著である。世代交代を重ねるにつれて、若い世代は、自分は日系人ではなく、ブラジル人と意識する傾向が強い。

3-2 ブラジルにおける日系研修ニーズ

(1) 継承日系教育分野

日本語教育は日系人としてのアイデンティティ形成の重要な要素であるが、世代交代が進むにつれてポルトガル語が中心となることから、継承日系教育が引き続き重要とされる。日本語学校からの主なコメント及び要望は以下のとおりである。

- ・ 上記 3-1-3 記載の若い世代の日系人の意識変化に伴い、日本語としての国語教育から外国語としての日本語教育に指導法が変化している。
- ・ 同じクラスの学習者の年齢差、日本語能力の差が大きいので、それらに対する工夫が必要。
- ・ 勤務先である日本語学校や大学等が長期休暇中 (7 月、12 月～1 月) の日系研修は参加しやすい。
- ・ 合同研修会、青年研修会、養成講座等で指導的役割を担う講師を養成する日系研修コースは重要。

(2) 民間セクター開発分野

ブラジル日本商工会議所、ブラジル日本都道府県人会連合会、アマゾナス日系商工会議所から、ビジネス関連コースの日系研修に係る要望があった。各団体からの研修テーマに係る要望は以下のとおり。

- ① 日本の企業文化、② 日本的経営、③ 貿易、④ 金融と投資、⑤ マーケティングと営業活動、⑥ 企業のケース分析、⑦ 5S とカイゼン、⑧ ビジネス改善 (起業家育成と後継者育成)、⑨ 日本の強みであるゲーム、⑩ モバイルの応用ソフト

(3) 農業・農村開発分野

農業・農村開発分野においては、農業の更なる発展のための研修の要望があった。農業協同組合からの研修テーマに係る要望は以下のとおりである。また、研修期間は計 1 カ月間程度、

形態は見学・実習を主とし、実施時期は果実の工業化であれば果物の収穫時期、日本食品の生産であれば発酵時期とする等の要望があった。

①果実の工業化（ジュース等）、②日本食品の生産、③養鶏場実習、④食品分野（飲料、菓子、香料使用）と再利用エネルギー源（発電のために有機物の廃棄物利用）の研修

地方部では日系社会の高齢化が進み、若年層の日系団体参加率が低下していることから、次世代の地域リーダー育成に係る研修も重要である。

(4) 社会保障分野

サンパウロ日伯援護協会の介護施設に入居している高齢者の平均年齢は 85 歳。アマゾン
日伯援護協会の場合、その福祉施設厚生ホーム（障害者・高齢者用）に現在入居中の 12 名の平均年齢は 87 歳で 90 歳以上が 6 名となっている。高齢者の介護サービスは、ブラジル政府による支援に加え、日系関連団体が担っているが、高齢者介護に係る技術面の指導が一層求められている。

第4章 パラグアイにおける日系研修ニーズ

4-1 パラグアイにおける日系人の社会経済状況

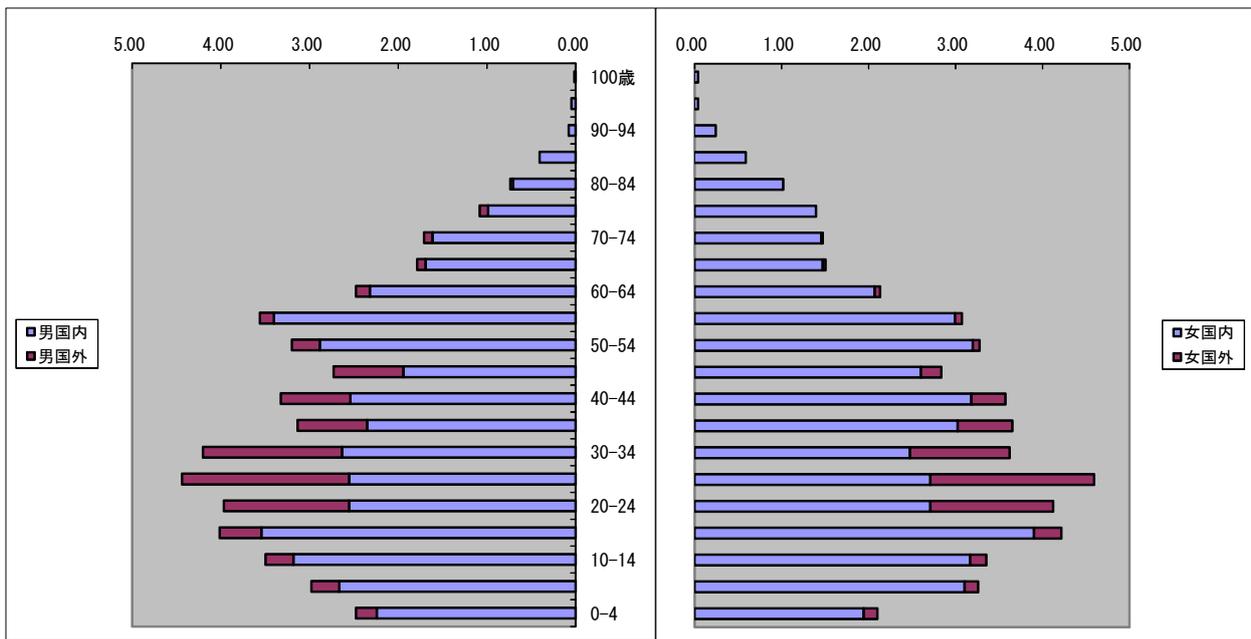
4-1-1 人口動態

パラグアイの日系人人口は7,000人とされている。その内訳はパラグアイ日本人会連合会が2006年4月1日現在で行った調査（以下、「2006年調査」と記す）以外に定量的に確認する手段はない。同調査を基本として有識者情報や入管統計を併せると人口動態の特徴は以下のとおりである。

(1) 少子高齢化の急速な進行

パラグアイにおける日系社会の年齢別人口構成は図4-1のとおりであり、高齢者数は確実に増加するとともに少子化が急速に進んでいる。少子化の背景として、20代から30代前半のパラグアイ日系人の国外在住が37%と多い現実があり、国外在住者の動向がパラグアイにおける日系社会の人口動態に大きく影響すると考えられる。

図4-1の示す2006年以降の新たな傾向として、近年、パラグアイにおける日系社会の新生児、新入園者が増加しており、日本語学校生徒数の増加がしばらく続く見込みである。2006年当時10代後半から20代であった女性が近年出産年齢を迎えるとともに、併せて同年層が出嫁ぎから帰国したことによるものと考えられる。



出所：「70年誌」グラフより。国外人口はグラフからの読み取りであり概数

図4-1 パラグアイ日系人年齢別男女別国内外人口比(%) (2006.4.1現在)

(2) 2世・3世への世代交代の進行

日本からパラグアイへの移住の歴史は比較的新しく、日系1世の比率が中南米の中で相対的に高いことが想定される。2006年調査では世帯主出身国の61%が日本であり、世帯主

に限定すると1世はまだ健在としながらも、この調査の10年後は2世、3世が大半を占め4世も増加するとしている（「70年誌」p.377）。

現在の世代人口構成は、有識者によると、1世20%以下、2世50%程度、3世以降30%以上であり、2世がメインで当面推移すると考えられる。他方で、現時点での世代構成に関する、日本人会連合会の推定は、1世35%、2世40%、3世20%、4世5%である（表4-1参照）。いずれも確かな調査に基づく数値ではないが、現地に近い連合会推定の方が事実により近い可能性が高い。

農商工ともに経営の中心者や日系関連団体役員・幹部職員は、1世から2世への世代交代が進みつつある。農業経営の中心者は2世（40代）までが約半数を占めている。世代交代を円滑に進めるための人材育成ニーズが存在する。

表4-1 パラグアイの各日系関連団体がとらえている日系人世代構成

	1世 (%)	2世 (%)	3世 (%)	4世以降 (%)	合計 (%)	対象日系人数
日本人会連合会	35	40	20	5	100	5,000人
イグアス日会	45	50	4	1	100	700人
ピラポ日会	40	40	20	0	100	1,295人
ラパス日会	30	45	20	5	100	658人
エステ日会 ^{*1}	43.4	56.6	0	0	100	53世帯
チャベス日会	14	30	55	1	100	123人
アスンシオン日会 ^{*1}	50	48	2	0	100	234世帯
生徒世代構成 (Asu)	0	80	20	0	100	122人
日系医師会会員	5	90	5	0	100	40人
日系商工会 ^{*2}	70	30	0	0	100	22人

出所：今回現地調査。各団体回答者の感触に基づく（2013年2月現在）^{*1}：世帯主、^{*2}：会員企業代表者

(3) 都市在住化の進行

日本からパラグアイへの移住は元々、農業移住として始まったが、移住地から都市部への人口移動が進行している。この背景として、農業後継者（主として長男）以外の子弟が都市部で高等教育を受けるために移住地を離れた後も都市部に定住するという構図があったこと、農業の継続を断念した家族が商業の機会を求めて都市部に進出したことがある。

戦前移住のラ・コルメナ移住者1世は既に数%となり、下世代の人たちの大部分がアスンシオン等都市在住者になっているといわれる。2006年の時点で、都市部在住者比率は50%強とされている（下注）が、現時点では更に進行していると考えられる。

（注）：2006年調査では日系人合計6,519人、移住地3,494人、都市部3,025人。これ以外に都市在住の日本人会非会員約500名を加え、都市部在住比率を50%強と推定している。

4-1-2 経済状況

パラグアイにおける日系人の経済活動及び経済状況の特色として、次の点が挙げられる。

(1) パラグアイ農業への高い貢献度

日系農業従事者は、パラグアイの農業従事者の1%未満であるが、大豆に関しては全国生産量の2.3%（2006年）、小麦7%（2007年）を生産。移住者によるトマト、大豆、小麦

及び卵の生産は、パラグアイの農業に大きな影響を与えたとされる。大豆は現在パラグアイの代表的輸出品目であるが、従来生産されていなかった大豆をこの位置に至らしめたのは、1959年輸出開始を始めた日系移住者である。また、パラグアイ輸出農産品8位の「ゴマ」は、日本がパラグアイから輸入する農産品の99%を占めるが、この生産・輸出は日系移住者により開始された。

他方で、基本的には各移住地とも農地拡大が望めないため、各農協とも農産物の加工・流通など川下展開による売上・付加価値・雇用増大を課題としている。

(2) 農業以外への職業の多様化

戦前戦後とも農業を目的として移住してきたが、2006年現在で農業人口は40%を割っていると推定されている（表4-3参照。ここでは43.7%であるが、都市部の非会員を加えた同連合会による推定）。職業構成の特色として公務員の比率が低いことが同連合会により指摘され（「70年誌」p.377）、また日系団体職員比率の高いことが読み取れる（表4-2参照）。なお、移住地においては日系自治体首長や議会議員の例もあるが（「70年誌」）、都市部における行政・政治への参入は現在でも弱いとされている。

表4-2 日系社会の職業（パラグアイ国内在住者）

職業	移住地	都市部	全体	比率 (%)
農業	691	124	815	43.7
商業	68	315	383	20.5
会社員	51	173	224	12.0
自営業	58	137	195	10.5
日系団体	117	13	130	7.0
公務員	7	30	37	2.0
医療・福祉	23	58	81	4.3
計	1,015	850	1,865	100.0

出所：パラグアイ日本人会連合会、2006.4.1現在

4-1-3 社会文化状況

社会生活面、文化面では、他の中南米日系社会と比べた相対的特色として、次の点が挙げられる。

(1) 日本語の水準の維持

パラグアイへの移住者は当初より日本語による子弟教育に熱心だったとされるという要因が指摘されている。日本語学校は10校あり、日系在住地の全域をカバーし、生徒数は850名程度である（非日系130名を含む）。これは（ブラジルとの）人数比で多い学校・生徒数である。

他方で、近年では、核家族化が進み2世同士の両親の会話においてスペイン語が混用されるようになり、日本語学習を強く勧める姿勢が必ずしも強くないことから、子どもの日本語能力の低下もみられる。

(2) 日本志向意識の強さ

日本語教育を重視してきたのと同様の背景から、移住地では日本語のみならず、日本の慣習、季節行事、日本的な人間関係などを保持しながらの生活が営まれている側面がある。その傍証として、日系パラグアイ人の日本在住者はあまり違和感をもたずに日本に溶け込めるケースが多いとの観察がある。他方で、パラグアイ生活文化への溶け込みが弱く、パラグアイ社会で地位を占めるために重要なパラグアイ人ネットワークの形成が脆弱との指摘がある。

(3) 都市部におけるパラグアイ社会への同化意識の強まり

移住地に残った農業後継者には上記のような日本志向が強が残るが、高等教育を受けるため都市に出た人達にはパラグアイ社会に溶け込まねばという意識が強くなり、意識のギャップが生じる傾向がある。それでも現地社会への溶け込み方は、ブラジルに比べると、まだ弱いとの指摘がある。

4-2 パラグアイにおける日系研修ニーズ

今次調査で把握したパラグアイにおける日系研修ニーズは、以下のとおりである。

(1) 日系研修事業の継続

日系研修事業そのものの継続を願う声が多く、特段のコメントがない限り従来のコースの継続が基本的には望まれていることが強調された。

- 1) 日本語学校で日本語教師研修の継続を望む声が多いのは当然として、多くの日本人会からは高齢者福祉研修の継続希望が強調された。
- 2) そのほか、下記(2)以下で取り上げてはいないが、幼児教育、医学研修(歯科を含む)、地域・婦人活動リーダー研修等々、従来どおりの継続が望まれているものは多いと考えられる。

(2) 日本語学校運営技術の向上

- 1) 学級運営：日本語教師研修のなかに、日本語教育技法に加え、学級運営に関するコマを加えることが有益である。日本語学校は日系子弟生活の一部を担っており、教師には学級運営の技量が必要である。しかしその訓練を受けたものは非常に少ない。手探りで行われている学級運営に日本で蓄積されたノウハウを移植する効果は大きい。
- 2) 学校経営：日本語学校は母親の有志達が子弟に国語を教えることからスタートした経緯をもつこともあり、ひとつの事業体を経営するという視点が乏しいまま今日に至っている。日語学校をとりまく環境が厳しくなるなか、校長やその候補者を対象とした学校経営に関する研修により、学校全体の運営、教育事業経営を学ぶ研修が必要な時期に来ている。
- 3) 文化教室/塾経営ノウハウ研修：アスンシオン日本語学校では経営難解消策のひとつとして開始した JAPAN BUNKA という非日系対象の教室に手応えを感じているとのことである。このような経営のノウハウ実習にも有効な可能性がある。

(3) 次世代リーダーの育成

いずれの日系関連団体も幹部の世代交代時期を迎え、従来以上にリーダー育成研修ニーズが高まっている。組織マネジメント力を高めるための研修、事業開発力を強化する研修が求められる。具体的に挙げられたものとして、次の2つがある。

1) 農協職員幹部研修

農協役員研修と農協中堅実務者研修のほかに、幹部職員を経営専門職として強化する。また、1カ月より長期の研修により、農協の多様な事業を実務経験により習得させる。

2) 技術習得集中研修

農業の川下部門への事業展開を課題とする各農協にはそれを技術面でリードする人材育成ニーズがある。搾油、製麺、飼料・畜肉、肉鶏の屠畜やこれらの流通などへの事業進出を支える研修が必要とされている。

また、同様のニーズとして以下のコメントがあった。

- ・農協以外の日系関連団体にとってもマネジメント研修は有益である。
- ・商工会議所などの経済団体で加入企業・団体へのサポートを学ぶ研修。現場実習を、研修後のパラグアイでの起業に何らかの支援意志がある企業で経験できれば更に良い。

(4) 食品加工技術の習得

上記(3)②に関連するが、中堅技術(候補)者も対象として、農産物加工技術という広いテーマを設け、そのなかで参加者のニーズに応じ、特定の技術に焦点を絞り、集中的な短期実習を通じて技術を習得させる。

(5) 機能別エキスパートの養成

農協経営の高度化が求められるなかで、経理、販売、マーケティング、購買、生産、営農指導等のエキスパート育成のニーズがある。これも、上記(4)同様、事業経営体のなかでの実務経験を通じて知識・技術を習得することが望まれている。同様のニーズとして次のものがある。

- ・営農指導ノウハウに関し、農家にとって新規土地購入を要しない小規模畜産(ニワトリ、ブタ、ウシ)への取り組み指導を行う。
- ・農協若手経理職員に対する日本語簿記研修

(6) 生活密着型技術の習得

自動車修理、調理、菓子作り、理美容等、地域社会で確実に需要がある生活密着型事業の自営を可能にする技術の習得。日本食に対する関心の広がりがあり、また、日本のきめ細かさが評価されるため、日系社会を越えた地域活性化を後押しする役割を日系研修が担うことが期待できる。

(7) 起業研修

1) 起業家精神とビジネスプランの作成能力の強化研修

起業、継続、成長、社会貢献に関する内容で1カ月程度の研修。

2) ベンチャー起業をめざす研修

若い人を対象にして新規事業をめざすもので、導入座学及び現場での実習。

(8) 非農業部門の企業研修

流通（例、コンビニチェーン）、コンサルティング業務、証券、保険、金融、一般企業などで、ビジネス（現場業務）を経験する研修を行い多角的な視点を養い日系企業の一層のレベルアップをねらう。このような枠組みのコースが用意されれば、どの企業のどういう部署で現場研修を受けたいかを調べ、受入れ先の了解を得るといったことは、商工会メンバーの協力で行うことが可能である。

(9) 村おこし体験研修

地域活性化の取り組みを体験。例えば「道の駅」をつくり農産物、加工食品販売を行う取り組みに触れられるような研修。

(10) 農家向け計数管理教育

若手の農業経営者向けのパソコンを使用した計数管理指導。大規模農業経営に必要な計数管理能力が未熟（パラグアイでの教育は大学を含め計数管理が極めて弱体）。

(11) 多様な1カ月短期研修

職場や家を空ける期間を短縮しかつ有益な研修を望む声が多い。具体例として挙げられたものは以下のとおり。

- 1) 専門分野先端医療の短期研修：例えば1カ月専門病院で新しい内視鏡を使う、ガンの先端治療を見学するなど。病院を空けるのが3カ月でも困難な中堅医師のフォローアップ。研修先については自分で探るか医師会でアドバイス可能。
- 2) 短期日本語教育現場研修：1カ月程度で日本語教育現場に触れられる研修。教師は主婦主体なので期間はあまりとれないが、現場に触れるのが効果的。

(12) その他の要望テーマ

- ・養殖（農村地域における生産の多角化）
- ・小規模面積での低コスト・効率的生産技術、可能性品目
- ・医療・精密機械メンテナンス技術研修
- ・ビル建築、地震に強い建物、都市化、ミニマル建築、材料の研究等
- ・電気、再生エネルギー
- ・歯科技工、シェードテーキング、ポーセレンによる色調の出し方。天然歯の形態、最先端の技工方法
- ・病気予防や社会保障（福祉含む）（予防医学の実施が課題）
- ・介護・福祉・生活習慣改善
- ・政治・経済に関するテーマ、リーダー、コンサルタント養成

第5章 日系研修に係るグッドプラクティス

5-1 ブラジルにおける帰国日系研修員

地 区	帰国研修員名	参加研修分野	職業 / 活動	番号
サンパウロ	Lucia Sachiko Nomiso	情報通信技術	コンピュータ情報システム技師	B01
	Alexandre Kawano	教育	大学準教授	B02
	Henry Arimura	民間セクター開発	広告代理店取締役	B03
	Edwin Hasegawa	民間セクター開発	配車サービス業役員	B04
	Marcelo Chuei Matsudo	農業・農村開発	研究者	B05
サンパウロ	Sarah Nakaoka	民間セクター開発	企業事務	B06
	Natalia Hoshino	自然環境保全	企業事務	B07
	Rosa Yuka Sato Chubaci	社会福祉	准教授	B08
ロンドリーナ	Berenice Tomoko Tatibana	農業・農村開発	研究者	B09
	Vitor Tsuji	農業・農村開発	パティシエ	B10
クリチーバ	Elizete Miyazaki Ono	社会福祉	理学療法士	B11
	Rejina Hiromi Nakamoto	保健医療	内視鏡専門医	B12
トメアス	Ivone Toshiko Ikeda Inada	農業・農村開発	主婦	B13
	Emerson Hironori Tsunoda	農業・農村開発	農業協同組合職員	B14
	Francisco Wataru Sakaguci	農業・農村開発	農業協同組合理事長	B15
	Alberto Ke-iti Oppata	農業・農村開発	農園経営者	B16
ベレン	堤 剛太	農業・農村開発	日伯協会事務局長	B17
	Marcia Yumi Miyagawa	社会福祉	理学療法士	B18
	Akiko Nara Shimokozono Takano	社会福祉	厚生ホーム長	B19
	Julieta Noriko Nagaishi	農業・農村開発	日系商工会議所事務局長	B20
	Sandra Uesugi	農業・農村開発	市長	B21
	Yuji Magalhaes Ikuta	保健医療	教授	B22
マナウス	Ayako Kohata	日本語教育	日本語教師	B23
	Renata Mayumi Onogi	保健医療	クリニック経営	B24
	Rie Shishido Ishizawa	日本語教育	日本語教師	B25

(サンパウロ)

番号：B01

氏名	Lucia Sachiko Nomiso (女・29歳)	職業	Ci&T 社コンピュータ情報システム技師
参加コース	コンピュータシステム開発及び Web サイト構築技術	2010年4月	10カ月

<要旨>研修後、会社が必要とする技術を習得したことが高く評価され同社に復職。米国、カナダ、スペイン語圏諸国の顧客のホームページ (website) をチームの一員として作成し、それが社内的に評価された。アルゼンチンの子会社でプロセス方法につき1人で指導した(2週間：対象者10人)ことが彼女の実力を更に高め、彼女の指導したプロセスを使って子会社が website を作成中である。

<現在の仕事>

10カ月間の日系研修の直前に退職していた Ci&T 社に、日系研修で会社が必要とする技術を習得したことが評価され幸いにも再就職。同社の主要顧客には世界的に有名な製薬会社ファイザー社、Johnson & Johnson、また Yahoo、コカ・コーラ、ホンダ、パナソニック等がある。

<研修参加の動機>

UNESP の大学生の頃、帰国日系研修員とのメール通信で日系研修に関心が高まった。帰国研修員が日本語と一緒に英語も勉強するように薦めてくれたことから日本語と英語の勉強を3年間行い、大学院修了後、日系研修に応募して研修に参加できた。努力と信念の人である。

<研修体験>

研修では業務上よく使用されるコンピュータプログラムに専念した。日本人がどのようにもの考えるかが分かり、また祖父の祖国である日本の文化がよく分かるようになったことが技術の習得と同じように大切な経験になった。その体験が人と人との交流において相手を受け入れることにつながり、外国人クライアントが多い現在の職場に役立っている。

<研修成果>

帰国後、Ci&T 社に復職。北米、スペイン語圏諸国の顧客のホームページ (website) をチームの一員として作成。チーム活動が社内で高く評価され期待されている。アルゼンチンの子会社でプロセス方法につき指導したが、子会社がそのプロセスを使って website を作成中で、自身の指導がアルゼンチンの仕事に活かされた。仕事以外でも研修体験を役立てている。日本で日本語に触れたことで、帰国後、自信をもって Ci&T 社で日系人、非日系人(圧倒的に非日系人が多い)に日本語を教えた(全20人程)。レベルが異なる生徒たちに教材を作るのが負担になったのと仕事が忙しいこともあり、結局は、日本語の指導をやめざるを得なかったが、「次世代にも日本語を伝えていきたい」と思っている。また、土曜日に子どもたちを対象にコンピュータ技術を教えていたが、余暇時間がなくなるため、結局これもやめたが、地域貢献しようという気持ちはもち続けている。

<今後のキャリアプラン等>

今後は、博士号を取得して母校 (UNESP) で IT の指導をする大学教官になり、大勢の学生を教育し社会に貢献することが夢であり、また、ボランティア活動も積極的に続ける。

(サンパウロ)

番号：B02

氏名	Alexandre Kawano (男・47歳)	職業	USP (サンパウロ州立大学) 准教授
参加コース	工学：逆問題に関する研究	2006年7月	1カ月

＜要旨＞日系研修から USP (サンパウロ州立大学) に戻ると、同大工学部内で日本の研修成果が評価され、「構造物の信頼性」講座を担当できるようになり、学者としての地位を確立できたこと、日系研修が PETROBRAS (ブラジル石油公社) の深海油田石油掘削用構造物 (プラットフォーム) の強度を上げるために役立ち、励みになった。同じく、PETROBRAS の石油の汲み上げ用パイプ (Riser) の疲労 (波、潮による振動疲労) 防止技術に研修成果を生かせることで、ブラジル石油掘削技術の発展に大いに役立っている。まさに、本人の研修成果がブラジルの経済発展の一翼を担っている。

＜現在の仕事＞

USP の准教授として、機械工学としての「逆問題」(現象から原因を突き止める) の研究に終始従事し、また大学で応用数学を教えている。

＜研修参加の動機＞

1989 年より USP で教鞭をとっていたが、文部科学省の国費留学生となり横浜国立大学工学部博士課程で学び (1991 年～95 年)、のち横浜国立大学で 1 年間教え、その後 USP に戻った。その後は、JICA 日系研修で「構造物」の研修 (2001 年 8 月) と「逆問題」の研修 (2006 年) に参加した (いずれも横浜国立大学)。研修参加の動機は、世界の中でも日本が技術的に進んでいたからと、既に横浜国立大学での研修経験があったためである。

＜研修成果＞

日系研修から USP に戻ると、同大工学部内で日本の研修成果が評価され、「構造物の信頼性」講座を担当した。このころ教育者としてあるいは研究者としての充実感を知ったが、日系研修は、それ以外にも PETROBRAS (ブラジル石油公社) の深海油田石油掘削用構造物 (プラットフォーム) の強度を上げるために大いに役立った。同じく、PETROBRAS の石油の汲み上げ用パイプ (Riser) の疲労 (波、潮による振動疲労) 防止技術に研修成果を生かせることで、世界に誇るブラジル石油掘削技術の発展に研修経験が役立った。

また、日系研修では日本文化への理解を深め日本人との付き合い方も理解したが、これからの経験はその後の研究で役立っている。

＜新しい試み＞

現在、USP では USP 附属病院と共同で、医療分野での新方式を開発中 (人体の表面を計測することで内部状況を判断できる：従来型の X 線を使わない安価な方式で、今後 1 年で実用化のめどがつけられる。これが実現すると世界でもエポックメイキングな技術であることから、自分が開発チームの一員として日系研修で習得した知識・経験を存分に生かしているといえる。

(サンパウロ)

番号：B03

氏名	Henry Arimura (男・43歳)	職業	広告代理店アジアグループ取締役
参加コース	経営スキル向上セミナー	2010年5月	1カ月

<要旨>日系研修で学んだビジネス・プラン(モデル)を活用して、自分の新しい会社(e-commerce)を2013年6月に設立する予定で、新事業に挑戦できる喜びを感じている。

<現在の仕事>

広告代理会社(Debrito Propaganda)の仕事(テレビ・コマーシャル、インターネット上の広告)をしており、最大のクライアントはブラジル連邦政府である。アジアグループを率いているが、顧客としては久光製薬、シチズン、富士通、日立等の大手日系進出企業が並ぶ。他にブラジル一般の顧客(日系・非日系企業)も担当している。

<研修参加の動機>

以前から日系企業のブラジル進出を支援する仕事に関心が強く、日本のビジネス方式を知るために日本の地で勉強することを希望していた。日本語はサンパウロの松柏学園で4歳頃から学習し始めて約15年続け、1992年には九州大学(経済学部)に県費留学生として派遣され、その機会に日本語が上達した。九州大学での留学から帰国後、ACEBECS(帰国研修生の同窓会)が、日本での研修受験希望者(50人ほど)に留学に関する情報(県費留学、国費留学、JICA日系研修)を提供していたが、そのときに、JICA事務所でJICA研修案内から自分にピッタリのコース(経営スキル向上)を見つけたので応募した。

<研修内容と成果>

経営スキル向上コースで学んだことで今なお重要であると思自身が実践していることは、「ビジネスは数字」という教えである。ブラジルに帰国してからは、プレゼンテーションでは、極力数字を使って説明するようにしている。研修前には着想が重要と思っていたが、研修後には数字をどのように使うかが最も重要と思うようになったことに本人も驚いている。

日系研修のコース参加者はブラジルから4人、ラテン・アメリカ地域から5人の計9人であった。クラスでスペイン語を話す機会がもてたことからスペイン語能力が向上し、帰国後、コロンビアとアルゼンチンに久光製薬のために支店を開くことができたが、これも研修効果である。また、研修仲間との共同生活が人的交流ネットワークを広げる利点を認識した。もともと会計士の資格をもっていたのでビジネス感覚は人一倍強いが、日系研修でビジネス関連の技法、戦略の策定を学習したことで、ビジネス・コンサルティング活動もできるようになった。日本での滞在期間中に「住むことで日本人の日常生活を知ることができ、本当の日本人の姿を知ることができた」、「ブラジルに来る日本人駐在員等とどのように接するべきかを体験できた」。

<今後のキャリアプラン等>

日系研修でビジネス・プランニングを勉強したので、友人とe-commerceを一緒に開始しようと考えている。もちろん、日系研修で学習したビジネス・プラン(モデル)を使って計画である。今年(2013年)の6月には、現在勤務している広告代理店を辞めて、新しい事業にチャレンジする。

(サンパウロ)

番号：B04

氏名	Edwin Hasegawa (男・31歳)	職業	企業経営者向け配車サービス業役員
参加コース	経営スキル向上	2010年5月	2カ月

<要旨>日系研修で学んだ接客の「おもてなし精神(心)」を、「おもてなし精神(心)」の希薄なブラジル・ビジネス界に積極的に普及させている。2012年末に新規に設立された Transfer Inn の営業役員として陣頭指揮をしている。小規模ながらも(従業員20人)、豊田通商グループ、ダイキン、住友商事、丸紅など約30社の日系進出企業と取引している。現在勤務している会社の配車サービスのみならず、将来は関心の強い観光事業の社長として事業展開していきたいと考える。

<転職後、日系進出企業を対象顧客とする会社の役員に>

日系研修から帰国後、サクラ・トゥリズムモ(旅行業)で旅行関連のマネジメントを担当し、次いでアウテンチ(人材派遣会社)に転職したが、アウテンチがアバンシー(人材派遣会社)に買収されたのを契機に退職し(2012年12月)、設立間もない新会社(Transfer Inn)に営業役員として移り、業務拡大の努力をしている最中である。これからますます増えるとみられる「日系進出企業」にターゲットを絞り、受注活動を推進している。既に豊田通商グループ、ダイキン、住友商事、丸紅など30社の日本からの進出企業と取引がある。

<文協で勤務中に日系研修を知る>

日系研修参加前、ブラジル日本文化福祉協会(文協)事務局で働いていたが、文協で中島事務局長から日系研修(経営関係コース)のことを聞き、応募し、研修に参加できた。

<研修体験>

OVTA(海外職業訓練協会)で研修した。ブラジル企業はアメリカの経営管理方式に傾いているが、日系研修では日本式経営方式を学ぶことができ満足した。特に日本の「ビジネス・プランの策定方法」がアメリカ方式と異なり、素晴らしいと思ったが、このことが今でも仕事のうえで非常に役立っている。また、各業界の中小企業(4社)を訪問し、それぞれの業界の問題点、経営方法を学習できた。企業訪問先は、日本酒製造、車いす製造、金魚養殖、IT企業であったが、業界は違っても「おもてなしの心」が日本のビジネスの真髄と理解した。

<研修成果はおもてなしの心を理解できたこと>

日系研修の最大の成果は、おもてなしの精神(心)を本当に理解できたことである。この心からのサービスを企業にも適用することで、新会社(Transfer Inn)は目下、まずは日系企業にターゲットを絞り、顧客を取り込む努力をしている。顧客からは、他社にはない特長があると認識されている。これは日系研修で十分に学習した成果である。

<今後のキャリアプラン等>

現在勤務している会社の配車サービスのみならず、将来は関心の強い観光事業を立ち上げ、企業展開していきたいと考えている。その際、外国人のための安全面を考慮した観光サービスの提供を計画している。

(サンパウロ)

番号：B05

氏名	Marcelo Chuei Matsudo (男・32歳)	職業	USP (サンパウロ州立大学) 博士課程の奨学生 (バイオテクの研究者)
参加コース	自然科学分野 (発酵技術)	2009年4月	5カ月

＜要旨＞バイオケミカルの研究以外には自分の進むべき道はないと思っている。その道をしっかりと与えてくれたのは、JICA 日系研修である。USP (サンパウロ州立大学) での研究活動中には獲得できなかった新しいバイオテクノロジーの方法論 (プロセス) を日系研修で学ぶことができ、現在のバイオテクノロジー分野の研究活動に非常に役立っている。また、遺伝子科学 (技術) についても日本の進んだ技術を学ぶことができたこと、日本人研究者との人間関係の広がりがあったことは何ものにも替えがたい最大の贈り物として大切にしたいと考えている。

＜現在の仕事＞

日系研修から帰国後、USP 薬学部にて在籍して Pos Doc (ポス・ドク) フェローシップの奨学金を使いながら (ブラジル博士課程の5年間支給の奨学金制度で2011年1月から受給開始して2年が経つ)、バイオテクノロジー分野の研究活動を続けている。このポス・ドク奨学金受給期間中に、いずれかの大学で教官の職を得るべく、研究活動の傍らさまざまな大学の面接試験を受けているがいまだに合格を果たせないことには焦燥感を感じ始めている。しかし、その一方で最近、いくつかの大学での面接試験ごとにくらかの手ごたえも感じ、研究が評価され始めているのではないかと希望も抱いている。

＜研修参加の動機＞

ブラジル日系研究者協会からの e-mail で日系研修のことを知り応募したが、もともと日本はバイオケミカル分野、遺伝子分野で進んだ国であることを十分に知っていたので、絶好の機会であった。

＜研修体験と成果＞

立命館大学生命学部生物工学科の今中教官から指導を仰げたことは幸運であり、深く感謝している。日本が好きで、人々も親切であり、将来できれば日本で仕事をしたいとまで思っている。

研修活動中に、休暇で沖縄に行き、沖縄出身の祖父から聞いた日本の姿が沖縄にあふれていることに気づき、自分は日本人ではなく沖縄人であることを発見した。滋賀県でみてきた人々の平均的な日々の暮らし、京都の伝統ある数々の寺院、あちこちで開催される夏祭りなどは、子どものころから祖父に聞いてきた日本の姿ではなく、そのことでも自分は沖縄県人であるとの強い意識をもった。このアイデンティティの発見も研修の大きな収穫であった。

＜今後のキャリアプラン等＞

当面、ブラジルで大学教官となり、その地位を確保すること、続いて自身の希望するバイオテクノロジー分野での研究活動で社会貢献すること、これらが目標である。

(サンパウロ)

番号：B06

氏名	Sarah Nakaoka (女・24歳)	職業	伯国三菱商事機械部勤務 (アシスタント)
参加コース	事業経営 (起業経営)	2012年10月	1カ月

<要旨>日系研修で研修したこと、特に「報連相」を毎日の会社の仕事に徹底的に生かしており、研修前と比べて、仕事の仕方、気配りが大きく変わったと上司 (伯国三菱商事機械部長、ブラジル人課長) から褒められている。できれば長く三菱商事に勤め、三菱を通じてブラジル社会に貢献したいと思っている。

<これまでの仕事と現在の仕事>

マリリア市 (サンパウロ市から400km) で高等学校、大学 (Universidade Estadual Paulista) を卒業し、村田製作所に5カ月間程勤務したが、三菱商事でのチャンスの機会が大きいと思い、2011年8月から伯国三菱商事機械部でアシスタントとして勤務を開始した。日系研修には伯国三菱商事に在職のまま参加できた。研修帰国後、元の部門で勤務を継続している。

<研修参加の動機>

母親が、文協陸上部の運動会に参加した際に、日系研修のパンフレットを持ち帰ったことから日系研修に応募した。日系研修に参加するために、三菱商事で休職手続き (Sustencao Temporaria do Trabalho) をとった。研修のために1.5カ月休むことになったが、年次休暇が1カ月あるので、半月間の休職期間で済んだ。

<研修体験と成果>

OVTAで人事管理、マーケティング、財務管理、損益分岐点分析などを研修したが、損益分岐点分析、経費管理、マーケティングが商談の際に役立っている。日系研修で勉強したこと、経験したこと、日本人のものの考え方を仕事に生かしているが、特に研修で学んだ「報連相」を毎日の業務にしっかりと生かしている。また、日本で人事管理を学んだことから、研修前にはブラジルの労働条件などには関心が薄かったのが、現在はブラジルの労働問題に関心をもつようになった。研修の成果としては、研修後、日本からの駐在員 (機械部長) もブラジル人のマネジャーも、大きく成長したことを認めてくれて評価が高まった。週末を利用して個人的に、北海道 (函館)、京都、日光へも行ったが、各地でいろいろな人の親切に感謝するとともに日本のよさを再認識した。

<今後のキャリアプラン等>

三菱商事で今後とも長く働き、日本で研修した内容をフルに活用して、ビジネスパーソンとしての能力を高め上位のポジションをねらう。今は総務的な仕事を中心であるが、チャンスがあれば日系研修で学んだ管理面での手法を十分に生かし、会社に貢献しようと考えている。それがブラジル社会のためになると信じている。

氏名	Natalia Hoshino (女・30歳)	職業	Idemitsu Lubi South America (伯国出光興産)	
参加コース	環境教育・施設管理に関するリーダー育成		2009年9月	9カ月

＜要旨＞伯国出光興産の組織規模が拡大するに従い、環境部門が設立される予定で、環境問題対策のリーダーとして、会社に貢献するとともに、ブラジル社会の環境汚染を防止する業務に携わっていく。

＜退職して日系研修、そして新しい今の仕事＞

研修帰国後の2010年5月から、出光興産のブラジル進出企業 Idemitsu Lubi South America、ロジスティクス部門に勤務し、石油製品の輸入・輸出、国内配送（工場向け潤滑油、車両用潤滑油）を担当している。日系研修参加前には、豊田通商に勤めていたが（2006年～2009年）、研修に9カ月間も不在となるため退職せざるを得なかった。

＜研修参加の動機＞

豊田通商での勤務時代に、ISO14001 関係の業務に従事し、環境問題にかかわった経験があり、当時日系研修から帰国した4人から研修のことを口コミで聞いたことが契機で、日系研修に応募した（応募当時、日本語レベル：N-3）。

＜研修体験と成果＞

研修は、山梨県清里のキープ協会で9カ月間、実施された。この協会の環境教育のプログラムは充実している。キープ協会のスタッフと一緒に環境関連の仕事をする中で、日本の文化、ものの考え方、仕事の進め方を学んだ。環境問題対策では問題発生の防止が一番重要であることを学んだ。後輩には、環境の研修は、大都会で勉強するよりも、清里のような地方で勉強する方がよいと薦めるつもりだ。

研修旅行としては、長野県の国立公園に1泊2日で行った。また、沖縄県に2泊3日でキープ協会のスタッフとともに旅行した。

帰国後、日常業務に研修で学習した事項を導入した。例えば、①組織内での日本の運営スタイルを導入、②日本の実用的な仕事のシステム（PDCA、フィードバック、カイゼンなど）の導入、③計画案の作成と④組織内連絡とネットワークの構築等。日系研修の成果を高めたのは自身の教育レベルの高さ（既に修士課程を修了していたこと）、また、実務についていて環境の基礎知識をもっていたことによるものだ。

＜今後のキャリアプラン等＞

今後伯国出光が拡大し、同社が環境問題を業務に取り入れる時期が来るものと確信し、その時実力が発揮できるように、今後とも研修で学んだ事項を継続して学習する予定である。

今、5年先を見越して、伯国出光は工場建設を計画している。

(サンパウロ)

番号：B08

氏名	Rosa Yuka Sato Chubaci (女・46歳)	職業	サンパウロ大学芸術学部准教授・看護師
参加コース	高齢者福祉専門家養成	2011年10月	1カ月

＜要旨＞現在推進中のサンパウロ州とサンパウロ大学共同事業であるサンパウロ大学東キャンパス敷地内での「デイ・サービス・モデル」プログラムには、老人学の専門家としての立場から参画。テレビ、新聞社のインタビューを受け、自身が参画しているプロジェクトがブラジル全土に報道されている。ブラジルは高齢者の介護に関しては遅れており、介護分野では先進国の日本との差は歴然としており、ブラジルでの高齢者介護は、日系研修で学んだ日本をモデルとして進めていく。

＜現在の仕事＞

2005年8月からサンパウロ大学芸術学部の准教授（専門は、老人学分野）と看護師である。同大学の教育と研究活動をしている。看護師としては、介護士を指導している。

＜研修参加の動機と契機＞

宮城県人会長から日本に研修に参加することを薦められたが、本人としては、2009年に日系研修に参加した直後であったので、老人医療専門家育成のコースには参加できないものと思っていたが幸運にも参加できた。

＜研修体験と成果＞

東北福祉大学で研修を受けた。高齢者へのサービス活動、高齢者の心理の問題・高齢者の社会問題等を研修するコースで、内容は高度であったが、優れた通訳者のおかげで研修内容をよく理解できた。

敷地内には、高齢者への質の高いサービス施設があり、モデル事業として進めている。例えば、デイケア（リハビリテーション）、ホーム・ケア、デイ・サービス（朝、サービスを受けに来て夕方には帰宅する）、グループホーム（アルツハイマー病の初期段階患者が入院する）などである。ブラジルは高齢者の介護に関してははまだ実験段階で、日本は介護分野では先進国であり、その差は歴然としている。日本をモデルとして進めなければならないと思っている。

日系研修で学んだ事項をサンパウロ州知事に報告したことが奏功し（2012年）、知事が現在進めている高齢者プログラムが改善された。すなわち、昨年（2012年）、サンパウロ大学東キャンパス内に「デイ・サービス・モデル」施設（高齢者のためのデイ・センター）がサンパウロ州当局によって認可された。このプログラムはサンパウロ大学と州政府が共同で進めているもので、サンパウロ大学老人学部の専門家（教師）が実際の運営にあたっている。自身は、老人学部専門家のコーディネーターとして、このプログラムにも参画している。

＜今後のキャリアプラン等＞

今後、サンパウロ州の日系人口の多い各地で高齢女性の健康調査をすること、また、再びJICA 日系研修で高齢者への予防医学を研究したいなどの夢をもつ。

氏名	Berenice Tomoko Tatibana (女・44歳)	職業	パラナ教育科学連邦工科大学研究者・教師
参加コース	医真菌学での国際共同研究の構築	2010年7月	1カ月

＜要旨＞日系研修を通じて日本人とブラジル人のものの考え方が全く違うことを発見した。日本の考え方はシスティマティックで素晴らしいと思い、その日本の考え方をブラジルに持ち込み現場の仕事に活用しているが、ロンドリーナ大学とのバクテリア共同研究にも生かしている。パラナ教育科学連邦工科大学（以下、「パラナ工科大学」）教育者として、指導が難しい菌学（Microbiology）をどのように教えるのがよいかをチームで研究している。今年（2013年1月）、ブラジル文部科学省がこの研究に予算をつけてくれたので全力を投入して研究するつもりである。また、保健（公衆）衛生分野での啓発活動を促進しているが、ロンドリーナ市婦人局相談役として、地域社会貢献活動を今後とも、もっと充実させる。

＜現在の仕事＞

「パラナ工科大学」で、コーディネーター（講座間、研修部門間、地域との交流）と教師（初等教育と専門学校）の任務をもつ。日系研修から帰国後、パラナ工科大学（ロンドリーナ校）には、実験室がないことからロンドリーナ大学の施設を借用し、菌についての共同研究をロンドリーナ大学の2人の日系研究者と行っている。この共同研究では当然ながら、自身が日系研修で学んだ新技術を頻繁に活用している。

＜研修参加の動機＞

ロンドリーナ大学の日系人・小林先生から日系研修を紹介され、参加できることとなった。研究者コースは自分でコース・テーマを選べるので、迷わず、千葉大学（佐野先生：ポルトガル語可能）での研修を申し出た。

＜研修体験と成果＞

日系研修の一環として、同分野の研究者たちとの交流の機会をもてたことが有効であった。また、千葉大学でのワークショップでも貴重な経験ができてその後の研究に役立った。今は大学の教育者として、難しい菌学（Microbiology）をどう指導すべきかについてのチーム研究をしている。今年（2013年1月）、ブラジル文部科学省がこの研究に予算をつけたので、全力を投入すべく準備に余念がない。自身は以前、パラナ州の伝染性新種細菌の研究をしていたこともあり、この分野を得意としている。

他方、保健衛生、公衆衛生分野での啓発活動も行っている。ロンドリーナ市婦人局相談役として、地域社会貢献活動をもっと充実させることの必要性を強く感じている。

＜今後のキャリアプラン等＞

この地域でも貧困家庭が多く、歯の磨き方、うがい・手洗いの習慣がないので、貧困層に対する公衆衛生教育を通して生活の改善を図り、地域社会貢献を実現する計画をもつ。パラナ工科大学・ロンドリーナキャンパス内において保健衛生分野での啓蒙をするグループ内での足場を固め、組織内での昇進を図り社会を変革させるような地球規模の人材育成に貢献ができるようにする。

(ロンドリーナ)

番号：B10

氏名	Vitor Tsuji (男・33歳)	職業	パティシエ (菓子製造・販売)
参加コース	食品衛生管理及び栄養管理、調理技術	2011年4月	10カ月

<要旨>日系研修での大きな成果は「もったいない」、「おもてなしの心」、「お見送りの心」を知ったことだと考えている。今年(2013年)4月には会社(菓子製造・販売)を立ち上げ、店舗運営のために日系研修で学んだ食品衛生、栄養管理、調理技法、品質管理、損益分岐点分析等の財務管理、経営管理の知識を生かすことができると楽しみにしている。日系研修の時に「食育インストラクター」の資格を取ったので、この資格証を壁に掲げて夜間に日本料理教室を開き、ブラジル人に日本料理文化を伝えていく。

<現在の仕事>

目下、今年4月に開業予定である菓子製造販売の製造所兼店舗の改装工事を進めている。設備什器類を順次購入して、内装も同時に進めている。

<研修参加の動機>

サンパウロのSENAC(調理学部)を卒業して日系のサト・マーケットのマネジャーをしていたが、父の病気療養のためにアサイに転居。そこで日本語学校(みのり学園)に通学していた際、日本語の先生から日系研修の紹介を受けた。サンパウロで、パティシエをしていたことがあることと日本料理と文化に以前から関心があったことから、参加コースのテーマを選んだ。

<研修体験と成果>

サンパウロの調理専門学校で調理学を学んだが、この経験に加えて日系研修を通じて、栄養管理、衛生管理、調理理論・技術、ストック法、経営・販売などを深く学ぶことができ、ブラジルよりも圧倒的に進んだ技術を体験できた。また店舗プランニングも日系研修での座学等が役立った。調理以外では、茶道の教室に通えたこと(5カ月間、15日おきに茶道の会に出席し、茶の湯の哲学に触れたことはまたとない機会であった)、江別町の農家から豆腐と味噌の製造法を実地で教わったこと(2日間)、黒豆の有機栽培についても基礎を学ぶことができ、豆腐屋で2週間、実習できたこと、日本料理店で実際に働いたこと、プリンスホテル内の「なだ万」で2週間働いたこと(無償)など、校外実習も非常に役立った。

これらの校外実習の体験と日系研修の座学と調理技法を合わせて、今後の仕事に生かしていきたいと考える。意識して、自ら進んで校外実習をしたことは、今後の研修生にも真似してほしいところである。茶道の会に出席していた折、初釜にも招待され、有田焼や唐津焼にも興味をもった。

<今後のキャリアプラン等>

JICA日系研修で、独立できる能力を教育してもらったこと、ロンドリーナの地域社会・ブラジル社会に日本料理・文化を普及させることができたこと等でJICAに深く感謝している。

(クリチーバ)

番号：B11

氏名	Elizete Miyazaki Ono (女・46歳)	職業	鍼灸院開業 (理学療法士)		
参加コース	鍼灸学		2009年10月	3カ月	

<要旨>日系研修に参加前(2003年)から鍼灸治療を行っていたが、研修後の成果として、ストレス患者(頭痛・腰痛等)の治療期間が5分の1の期間で済むようになった(10回の治療回数がわずか2回で完治)。なお、治療期間は短くなっているが、患者数は増えているので採算上には問題はない。

日系研修の最大の効果は技術向上であった。

<現在の仕事>

クリチーバの一等地で鍼灸院を開業している。患者は、ストレス患者(頭痛・腰痛で悩む40歳から60歳の患者が多い)への治療が一番多い。患者数は平均して、1日当たり6~7人で、1カ月には約120人となる。治療費は、1時間150レアル(約7,500円)。

<研修参加の動機>

日系研修の存在も、また、コースに鍼灸学があることも既に知っていた。2001年6月に鍼灸の資格を取り、2003年5月に開業したが、日本の鍼灸の技術が本場の中国よりもはるかに高いことを知り、日系研修に応募し、日本の技術を学ぶことにした。応募前には日本語の勉強を集中して行い、合格した。

<研修体験と成果>

日系研修では、①さまざまな診察の仕方(脈、舌、腹の様子をみる)、②肩こり、腰痛、頭痛、ストレスへの治療法、③しわ取りを主に学んだ。同じ日系研修コースには、ブラジルから Patricia Yamanishi さんとアルゼンチンから Tokuda (女性) さんが参加しており、Tokuda さんが人体図の箇所にスペイン語の単語を翻訳してくれ、これが大いに役立った。このほか同僚がしばしば言葉をたすけてくれたので座学指導、実習その他の場面で言葉の不自由さはそれほど大きな問題ではなかった。日系研修の成果は、期待していた以上で、いまもなお JICA 日系研修に参加できたことに感謝の気持ちをもち続けている。2001年6月に Acupuntura 単科大学で鍼灸治療資格を取得して以来、鍼灸治療の専門家としてブラジルで相当期間経験していたので、日系研修での座学、実習はこれまでの疑問が次々解決してすべて有益であった。研修後の成果として、ストレス患者(頭痛・腰痛等)の治療期間が平均10回から2回に極端に短縮できた。従来10回通院して回復した患者が2回の通院で済むわけで、日本の技術がいかに優れているかわかる。これには合理的な治療法と理解しつつも、今でも不思議に思っている。

<今後のキャリアプラン等>

これからも、診療技術の質の改善に努め、患者さんたちの苦痛を和らげていきたい。もちろん、助手も使い、クリニックの規模も大きくして地域社会への貢献度を増していきたい。

氏名	Rejina Hiromi Nakamoto (女・39歳)	職業	パラナ・カトリック大学付属クリチーバ・サンタ・カーザ国立病院勤務・内視鏡専門医
参加コース	早期消化器系ガンの予防と治療	2009年10月	2カ月

＜要旨＞国立サンタ・カーザ病院の6人の医師に日系研修で学んだ内視鏡検査技法の指導をして後継者の育成に努めている。良い後継者を数多く輩出すること、これがブラジルの内視鏡検査技術の向上につながり、ブラジル社会に貢献できると考えている。研修帰国後、既に4人の患者の初期腫瘍を日本で研修した技法（Pitt Pattern と Vascular Pattern）により発見し切除したが、これは研修の最も大きな成果だ。内視鏡検査技術で、ブラジルの第一人者になるべく頑張っている。

＜現在の仕事＞

現在、3つの医療機関で社会に貢献している（①クリチーバ・サンタ・カーザ国立病院、②軍警病院、③赤十字病院）。モットーは、貧しい人たちへの「愛のある治療」を施すことだ。サンタ・カーザ病院が本来の職場（勤務病院）で、ここで6人の若い医師（3人の日系人と3人の非日系人）を教育指導しているが、そのうち、2人の日系医師（サトウ・レオナルドとマツダ・ホブソン。2人とも英語ができる）が内視鏡関連の日系研修に参加したいとの強い希望をもっており、若い医師の日系研修参加希望を実現したいと応援している。

＜研修参加の動機＞

日本の文部省国費留学生として、2002年～2007年に東京医科歯科大学（杉原先生）で博士課程を修了し博士号を取得したが、その博士課程時代に昭和医大の工藤先生の講義を受けたことがある。その後、日系研修に参加するとき、迷わず世界一の水準の技術をもっている工藤先生の指導を仰ぐ決意をした。この日系研修に参加することを薦めてくれたのは、今働いている病院の日系医師のイワノ先生であった。

＜研修体験と成果＞

昭和医大横浜校での研修では、日本の国内法により患者への治療はできず内視鏡検査等器具の状況を見る、あるいは手術現場の見学等であったが、指導教授及び、関係者の懇切丁寧な指導を受け、非常に意義ある研修となった。昭和医大の内視鏡検査レベルは、ブラジルの現状からみて非常にハイレベルであった。派遣期間はサンタ・カーザ病院の勤務の関係から3カ月は不許可で2カ月に短縮されたが、期間の短縮を感じさせない充実の研修であった。

日系研修帰国後の大きな実績としては、内視鏡検査中にポリープの中にできた初期段階の癌の微小細胞を見つけてそのポリープを切除した例が4例に上ったことである。（胃：1例、腸：3例）この初期段階での腫瘍の発見と切除には日本の研修で習得した工藤先生の開発された2つの技法（Pitt Pattern と Vascular Pattern）を駆使したもので、研修なしには実施不可能な治療といえる。

＜今後のキャリアプラン等＞

内視鏡検査技術の継続的な改善向上に努め、患者の苦痛を和らげ、また、同時に貧困層への「愛」をもった医学治療を実現することである。同時に良い後継者を数多く輩出し、ブラジルの内視鏡検査技術を向上させることもめざす。

(トメアス)

番号：B13

氏名	Ivone Toshiko Ikeda Inada (女・53歳)	職業	主婦
参加コース	農村婦人リーダー	2011年10月	1カ月

<要旨>トメアス総合農業協同組合 (CAMTA) エコ・アルチのメンバー (9人中8人までが帰国研修員) の1人 (Coordinator) として、日系研修で学んだことを、トメアス総合農業協同組合 (CAMTA) 活動に応用している。例えば、トメアス地域活性化に役立てるため、Casa do Cooperado (組合員の産物の直売所) を最大限生かして、手作りのアクセサリーなどを販売するほか、観光客への土産販売の強化にも努めている。(エコ・アルチの活動は、アクセサリーを手作りすることである。)

<現在の仕事>

トメアス総合農業協同組合 (CAMTA) の中のエコ・アルチのメンバー (9人中8人までが帰国研修員) の1人 (Coordinator) として農協のクラブ的な活動をしており、このエコ・アルチの活動に日系研修での学習事項を生かしている。エコ・アルチの活動は、アクセサリーを手作りし、Casa do Cooperado (CAMTA 組合員の産物の直売所) で販売すること。これらのアクセサリーは特に観光客には人気がある。最近ではリオ・デ・ジャネイロからの観光客が大型バスでトメアスまでこのアクセサリーを求めて来ている。やはりお客が喜ぶものを作る、これが日本での重要な学習であった。

<研修参加の動機>

CAMTA の会報で日系研修のことをよく知っていたし、トメアスには周辺に日系研修参加経験者が多くいて、日系研修の評判が非常に良い。このため、いつかは参加したいと考えていた。特に帰国研修員の斉木さんが帰国報告会で「コムニテ・カフェ」(JICA 横浜の近くにある) の魅力を語るのを聞き、農業関係者としてこれを見学したいという気持ちがあった。

<研修体験と成果>

研修で特に印象に残ったのは、JA 長生 (千葉) の年輩の女性組合員から花柄模様の太巻き の作り方を習ったことで、これは帰国後トメアスで発表し、好評を博した。この他 JA 全国女性大会、家の光大会に参加し、日本の農家の女性のさまざまな意見を聞き、更に JA 横浜、JA 秦野、JA 千葉も訪問し、実際に各地の農協における女性の姿、意見交換等で、日本の農業協同組合の女性が丁寧な仕事をしている、あるいは創造的な仕事をしていることを知り感動した。コムニテ・カフェでのさまざまな人々に配慮した運営方法をみて、帰国後にはこの思想を Casa do Cooperado の運営に役立てている。研修最後の週に日本に住む姉と山形へ行く機会があり、ブラジルでも有名な最上川を眺めることができたほか、短時間ながら、山形地方の農村が見学でき、農協研修が一層印象に残るものとなった。

<今後のキャリアプラン等>

エコ・アルチの活動を今後とも継続していく。2009年にこの活動の開始時には13人のメンバーであったが、今では9人と減少している。このメンバー数を増やし活動を更に活発化させることが当面の課題である。

(トメアス)

番号：B14

氏名	Emerson Hironori Tsunoda (男・40歳)	職業	農業経営と CAMTA 職員 (マネジャー)
参加コース	日系農協中堅実務者職員	2012年6月	1カ月

<要旨> 日系研修の一環で訪れた JA 秦野の運営を、トメアス総合農業協同組合活動に取り入れ、集荷体制の大幅な効率アップにつなげている。近い将来、全組合員がコンピュータ操作を覚え、バーコードシステムを確立させることをめざす。これが実現すれば、トメアスも日本の水準に一歩近づく。

<現在の仕事>

現在3人の従業員(収穫期には日雇いで30人ぐらい)を雇う農業経営(コショウ、カカオ、アサイ、アセローラ等のアグロ・フォレストリー)の傍ら、トメアス総合農業協同組合(CAMTA)の乾物類(コショウとココア)倉庫のマネジャーをしている(従業員の采配と輸出用製品の選別が主な仕事)。

<研修参加の動機>

日系研修がCAMTAの活動に役立つことをCAMTAの関係者から聞いていたので参加した。

<研修体験と成果>

JA 秦野の組合員が産物の箱にバーコードを付けて出荷しているシステムを見て感動し、この手法をCAMTAに導入した(150人の組合員一人ひとりにバーコードを準備した)。しかし、農民の意識に問題があり、いまだ多くの組合員がコンピュータの使い方がわからず、CAMTA職員がバーコード付けをしている状態である。研修で学び、とりいれたシステムであり、可能な限り早い段階で全農民にバーコード利用の徹底を図りたい。これが徹底できれば、農協の職員を本来の業務である地域の農産物の販売促進に専念させられる。

研修で学習した「農産物への付加価値の付け方」については、当地ではどのようにするか、まだ答えが得られていない。今後の課題である。当面、付加価値の付け方を見出す視点で組合員と粘り強く話しあっていく。

<CAMTAの動向、問題と対応>

農協組合員と非組合員とでさまざまな確執がある。現在以下のような問題が起きている。

例えば非組合員がCAMTA ジュース工場にミカンを搬入すると、非組合員ゆえにミカンは安く買い叩かれる。一方組合員であれば、非組合員以上の値がつく。明らかに組合員に有利である。

また組合員であれば、無料で農業技術指導を受けられる。非組合員にはこれがない。この点も組合員の魅力である。このため、非組合員が、組合員としての加入を希望する動きがある。

しかし、農協は利益集団で、利益が出れば、組合員に分配されるが、損失が発生するとこの損失を組合員各自が応分の負担をすることになっており、この負担の覚悟がなければ、組合員の資格はない。

将来の農協の役員をめざし、非組合員に対し、こうした基本問題の処理役を果たしている。

<今後のキャリアプラン>

当面まずトメアス地域の発展に貢献すること、そして次にはCAMTAの組合員数を増やすことであると考えている。

(トメアス)

番号：B15

氏名	Francisco Wataru Sakaguchi (男・52歳)	職業	農業経営／トメアス総合農業協同組合理事長
参加コース	日系農協幹部養成	2004年7月	1カ月

<要旨> 組合幹部のリーダーシップ次第で組合が繁栄もすれば、逆に倒産することもありうることを研修で学び、常時この金言を念頭に置き、組合幹部としての活動を展開している。今では毎年少しずつではあるが、会員数が増加してきており、明らかにCAMTAがトメアス地域の発展に大きく寄与できている。1990年末頃、CAMTAは倒産寸前となったが、自身は理事長として日系研修の経験をアグロ・フォレストリーの活動に生かし、復活させた。

<現在の仕事>

アグロ・フォレストリー農業経営の傍ら、トメアス総合農業協同組合（CAMTA）の理事長として地域の発展に寄与している。

<研修参加の動機>

加入しているCAMTAにJICAから送られてきたポスターがきっかけで応募し、日系研修に参加した。CAMTA理事長として組合の運営を向上させるために、日本の農業組合制度とその活動について学びたいと考えた。

<研修体験と成果>

研修は多くの点で従来の発想を覆すものであった。

第一に、多くの2世、3世の農民は、日本語の会話ができて読解力がないので、日本で農業研修を受けることは難しいと考えていた。しかし、この研修で、読解力に関係なく日本の優れた農協組織、運営についての研修が受けられることがわかった。

第二に、日本の農協は、農業技術指導、品種改良、市場動向など農民に役に立つ技術や情報を効率よく提供する。同時に全国の消費者にもあらゆる農産物が一律価額で提供できるような工夫をし、もっとも重要な安全な農産物の生産、販売への取り組みに余念がない。研修から帰国してしばらくの年月が過ぎた。しかしまだブラジルは日本から学ぶことが多い。

<今後のキャリアプラン等>

当地ではアグロ・フォレストリーという他の地域にはないコンセプトがあり、このシステムを最大限に生かして、まずトメアス地域を繁栄させ、これと並行してブラジル社会の発展に貢献することをめざす。それを実現するためにまず人材育成が必要であり、今後とも日系研修に期待しており、当地組合員を順次派遣したい。日系研修の継続を強く望む。

(トメアス)

番号：B16

氏名	Alberto Ke-iti Oppata (男・48歳)	職業	農業経営 (パライズ農園)
参加コース	地域活性化	2011年9月	1カ月

<要旨>トメアス文化協会 (ACTA) 会長と SPR (農業者シンジケート) 理事長の公職についているが、日本研修 (地域活性化コース) で学んだコミュニケーションの方法を応用することで、これら組織内での1世代と2世、3世代以降の人間関係を日々改善し、組織の活性化につなげ、トメアス移住地の地域発展に貢献している。

<現在の仕事>

現在、パライズ農園を経営する傍ら、トメアス文化協会会長 (ACTA: 無報酬) と SPR (トメアス農業者シンジケート) 理事長の地位にある。

<研修参加の動機>

日系研修に参加することは、ベレン総領事館の楠首席領事に薦められた。

<研修体験と成果>

研修を JICA 九州で受け、多くのものを学んだ。

第一に九州を中心として、工場視察、農産物の加工場 (梅干し、ワインの作り方等) 等を視察し、現地の農業関係者と意見交換を行った。現地の材料を活用して、その地の特産品に仕上げていくには長く、また地道な努力が必要で、一朝一夕には特産品ができないことがよく理解できた。地域活性化も、簡単なことではなく、そこに住む人々が、地域の特色、産物、地域の文化をよく理解し、明確なビジョンと方針でたゆまない努力を重ねてはじめて実現する。九州各地には、こうした方針が実現している地域が多数あることを知った。

三木先生から「未来の棚づくり」の説明を受けた。地域の活性化のためにはプランニングの作り方 (短期・中期・長期)、グローバルな視点をもつこと、と同時に地域を愛する人材教育とその活用の重要性を学んだ。プランについては作成した後、誰にでも見えるように、わかるようにすることが重要なことも学んだ。

帰国後、事務所の壁に「組織活性化計画スケジュール」を掲げた。だれもが見えると同時に見る工夫を凝らしている。

横浜研修では、日本の歴史、文化を学んだ。自身にとり、初めての歴史事実が多数あり、目が覚める思いで聞いた。地域運動の原点はやはり歴史の認識から始まる。

<今後のキャリアプラン等>

トメアス9万人の人口のうち、日系人はわずか300世帯 (1,500人～2,000人) である。この日系人たちがトメアスの中で連携していくために、ACTAの後継者づくりが夢であり課題となっている。日系研修で学んだことをベースに組織運営を向上させ、リーダーとなる人材 (後継者) を育成することで、日系社会、ブラジル社会に貢献することがトメアスの日系リーダーの責務であると思っている。トメアスの日系団体である CAMTA (トメアス総合農業協同組合)、SPR (トメアス農業者シンジケート)、ACTA (トメアス文化協会) の3団体が一致協力して、日系社会、ブラジル社会に貢献していくことをリーダーが認識し、日系人を指導していく方針である。

(ベレン)

番号：B17

氏名	堤 剛太 (男・65歳)	職業	汎アマゾンニア日伯協会事務局長
参加コース	地域活性化	2007年9月	1.5カ月

<要旨>日系研修で事業プランの作成方法を学んだこと、トヨタで従業員一人ひとりが改善提案を出し経営に参加しているのを知ったことが組織（汎アマゾンニア日伯協会）の活性化につながった。汎アマゾンニア日伯協会では、日系研修で学んだ仕事の進め方、組織運営、職員との接し方などを職場活性化のために生かし、組織の全員が1つの目標に向かって進んでいるのだとの意識を共有できるようになった。勿論これにより、組織運営、事務の効率化が進んだ。

<現在の仕事>

自身は1世で、中南米に憧れブラジルに入った。現在、汎アマゾンニア日伯協会事務局長であるが間もなく引退する（2013年3月4日）。事務局長引退後は、汎アマゾンニア日伯協会55年史の編纂を中心に仕事を行うことにしている。また、日本側とのコンタクトができる人間がいないので（2世、3世は日本語がわからない）、その役を引き受けることにしている。

<研修参加の動機と契機>

出稼ぎによる日系人減少や、世代交代などで、ベレン地域の日系人社会の活動が停滞していたので、活性化をしたいと思います、そのヒントがあればとの観点から日系研修に参加した。

<研修体験と成果>

北九州市のJICAセンターを拠点にして見学視察をした。TOTO、職業訓練学校、地元の中小企業（製造会社、地場産業）を視察した。これらの中小企業の企業運営・理念を学んだことは今の仕事に生かしている。また、発電所、下水処理場などの社会インフラも視察した。研修では、事業プラン（短・中・長期）の発想の仕方を学習したが、これを汎アマゾンニア日伯協会の活動に取り入れた。また、トヨタの従業員一人ひとりがカイゼン提案を出し、経営に参加している状況は実に新鮮に映った。

トヨタを見て、ブラジルに帰国して、たとえ単純な仕事でも、その担当者は専門家であるという認識をもつようになり、物事の判断の際はすべて担当者に相談するようになった。このことによって、組織のすべての職員が一体感をもつようになった。これは研修の大きな成果である。単純ではあるが、研修前には全く気づかなかったことである。

研修を通じて、研修仲間の輪が広がった。同じコースにベネズエラのロライマから1人、サンパウロから文協の中島さんが参加していたが、中島さんとも協力してベネズエラの日本語学校設立に際しては協力することができた。

<今後のキャリアプラン等>

今後は、『汎アマゾンニア日伯協会55年史』の編纂ほかで協力する。

(ベレン)

番号：B18

氏名	Marcia Yumi Miyagawa (女・29歳)	職業	厚生ホーム(アナニンデウア市) 理学療法士
参加コース	理学療法学	2011年5月	10カ月

<要旨>日系研修から帰国後、日本で研修した技術を実地で適用し、健康状態の悪化した高齢者を元気にさせ、歩行困難な高齢者が片足立ちできるまでになった。また今年(2013年)3月下旬に、厚生ホーム敷地内に、新しいリハビリテーション・センターを開いて患者を受け入れることにしている。そのセンターの運営責任者として、日本で学んだことを応用していただけることになり、喜びは大きい。高齢者を元気づける仕事が生きがいである。

<現在の仕事>

アマゾン日伯援護協会付属厚生ホーム理学療法士として勤務中。現在建設中のリハビリテーション・センターが完成すると、彼女はその責任者となり力量を更に発揮できる。

<研修参加の動機>

日本の理学療法の技術が世界的に進んでいることを雑誌で知って、日系研修に参加を決意した。日本語能力レベルもN-2であったので臆することなく応募した。

<研修体験と成果>

札幌医大の附属病院で研修した。新生児学、特に未熟児の取り扱いについて学ぶ計画もあったが、結果的には高齢者の治療見学中心の研修であった。非常に有益で細かな気遣いが身についた。

未熟児・高齢者関係の学会、医学療法(東京、大作、宮崎、広島)の学会にも参加でき、日本の学会のレベルの高さがわかった。また民間病院(札幌5院、大阪、神戸の各1院)を見学したことで研修の幅を広げることになった。

ブラジルに帰国後、アマゾン日伯援護協会付属の厚生ホーム(アナニンデウア市)の老人療養に日本で学んだことを大いに生かしている。例えば、10カ月の研修の間に厚生ホームに居住する高齢者(アルツハイマー患者)の状態が悪化していたが、日本で研修した技術で回復させることができた。

厚生ホームの「生きがい教室」では、リハビリテーションをすることにより、歩行訓練の効果が短期間に現れたケースもまま見られる。

横浜研修所で日本文化についての座学を受けたが、究極的にはリハビリ療法の基本思想ともつながっており、役立つものであった。

<今後のキャリアプラン等>

現在、厚生ホームの敷地内に、リハビリテーションセンターを建設している。3月下旬には完成する予定だ。新センターでは1時間に3～4人の患者を受け入れられる。自身が日本で学んできたことを生かせるので、新センターの落成が待ちどおしい。

(ベレン)

番号：B19

氏名	Akiko Nara Shimokozono Takano	職業	アマゾンニア日伯援護協会付属厚生ホーム長
参加コース	高齢者福祉専門家養成	2011年10月	1カ月

<要旨>日系研修は、アマゾンニア日伯援護協会付属の厚生ホームの事業発展に大きく役立っていて、高齢者の福祉向上へ貢献している。生きがい教室への参加者が、研修帰国後、研修前の2倍になった。今後は各種イベントなど工夫し、年間行事に追加していく。日本で学んだ技術をブラジルの現場に則した形で活用し、厚生ホームを信頼される地域最高の福祉施設として拡充していく。

<現在の仕事>

アマゾンニア日伯援護協会付属の厚生ホーム長として、地域の高齢者の老後の生きがいを支援するため頑張っている。厚生ホームは高齢者用の福祉施設で定員20人。現在、90歳台の患者12人が入居している。ホーム入居者の生活の質を改善するべく知恵を出し、工夫を凝らしている。

<研修参加の動機>

JICA 日系研修については、JICA のウェブサイトで以前から知っていた。アマゾンニア日伯援護協会の太田事務局長から日系研修に参加することを薦められ応募した。

<研修体験と成果>

日系研修では、家庭の事情で長い休暇が取れないため、老人福祉研修に1カ月間だけ参加した。宮城県の東北福祉大学での研修であったが、病院、老人施設等を見学し、私立病院なども見学した。日本では高齢者への福祉が法律で守られているため、高齢者も安心できるが、ブラジルでは福祉は新しい概念で、国を挙げて高齢者を支える機運にはない。この差を日系研修で如実に感じた。

東北福祉大学のカリキュラムは非常によくできており、日本での患者へのレベルごとの対応システムがよく理解できた。

また、大学内の検査室を見て、帰国後まず自身が働く厚生ホームで改善すべき事項が何かを考えるヒントを多数発見した。

今後、厚生ホーム長として、デイ・サービスを導入するが、当面人材がいない。ブラジルの法律で理学法士は1日4時間、准看護師は1日6時間の労働と決められているため人員が絶対的に不足する。

生きがい教室の参加者は、日系研修前には15人であったが、現在では30人になった。

本田たかはるさんのダンス体操の人気が高いので、これも普及させる。

JICA 横浜センターで過ごした日々は、研修に臨む心構えを養ううえで非常に良かった。日本の経済、社会、歴史、日常生活、思想に関する状況など、日本の文化に関する一般的な知識を学べた。

<今後のキャリアプラン等>

厚生ホーム長として、「生きがい教室」「ことぶき教室」の内容を充実させていく。高齢者が元気なうちは、こうした支援が重要だ。そのために、日本で学んだ技術をブラジルにむきアレンジしていく。厚生ホームをだれからも信頼される地域最高の福祉施設として拡充することが重要だ。

(ベレン)

番号：B20

氏名	Julieta Noriko Nagaishi (女・50歳)	職業	パラード日系商工会議所事務局長
参加コース	地域活性化	2011年9月	1カ月

＜要旨＞日系研修で学んだ5S、カイゼン、報連相、ブレイクスルーの手法をパラード日系商工会議所内に導入し、仕事の効率を上げた。そのため研修前には会員数が44社であったが、研修帰国後1年数カ月で62社にまで増えた。10年先には会員数を200社にする方向で進めている。すしメン検定試験を導入して、寿司職人の質レベルを向上させ、寿司を通じた日本文化を北部ブラジル社会に普及させるべく、今後は、その実現をめざして頑張っていく。

＜現在の仕事＞

現在パラード日系商工会議所の事務局長を務めている。

＜研修参加の動機＞

汎アマゾン日伯協会の堤事務局長から日系研修を薦められ参加した。

＜研修体験と成果＞

北九州市でブラジル人6人と一緒に研修（地域活性化）を受けた。TOTO等の工場、福祉施設（ホテル並みの老人ホームに驚いた）、エコ・タウン等を視察し、日本の地方都市のさまざまな機能をつぶさに視察した。TOTOが障害者を数多く雇用していることにつき説明を受け、同社の先進性に感心した。どの分野も、日本はブラジルよりもはるかに進んでいると感じる。特に環境対策が進んでいる。

日系研修からブラジルに帰国後、ベレン美化運動を開始しようとして、他の日系団体にも支援を依頼したが、同意が得られず、失敗した。まだ時間がかかりそうである。

パラード商工会議所内では、研修帰国後、日本で研修した5S、報連相、カイゼン、ブレイクスルーの手法を毎日の活動に取り入れ組織の効率化に成功している。

日本で学んだ5Sは、企業、組織体などはもちろん、個人の家庭内でも思考方法を応用できるので、研修帰国後、自宅でも活用している。

＜今後のキャリアプラン等＞

福岡県行橋市をモデルとして経営者育成をするほか、検定試験制度を導入し認定書を発行する計画である。例えば、コンピュータの能力試験、すしメンの育成。寿司屋は、ベレン市内に100店舗以上あり、ブラジル人にも人気の日本食だ。すしメンを育成して日本料理文化を伝えることに心がける。華道についても、日本文化の代表的存在なので、検定試験の対象とすべく検討する。今後の課題として、近郊の会社に宣伝し、パラード日系商工会議所の会員数を増やしていく。

(ベレン)

番号：B21

氏名	Sandra Uesugi (女・45歳)	職業	イガラペラス市長
参加コース	地域活性化	2011年9月	1カ月

＜要旨＞人口3万6,000人のイガラペラス市長をしているが、市長在任中の2011年、1カ月の日系研修に参加し、特に一村一品運動に感銘した。この経験をモデルにした「Feira do Produto Rural」(田舎産品市場)を今年(2013年)3月9日から始める。市場には47のボックスを設け、そこに農民がそれぞれの産物を1週間に3回(土・日・月曜日)搬入する仕組み。これで産地の農民と市民とをつなぎ、市の活性化を図っていく。市とパラ州との共同支援で、農民が野菜、果物を安定的に提供し、貧困家庭にお金ではなく、実物を配布するシステムを立ち上げる計画もある。これで農民の収益向上と同時に、貧困家庭には野菜、果物を無償で届け健康面での支援を行う。この方法も日系研修からヒントを得た。日系研修がイガラペラス市の市政に大きく貢献している。

＜現在の仕事＞

イガラペラス市長2期目に入っている。第1回目の当選は2008年で、昨年の2012年、第2回目の当選を果たした。パラ州の4人の市長のなかで、女性市長は彼女1人である。

＜研修参加の動機＞

パラ日系商工会議所のJulietaさんに薦められ日系研修に参加した。Eduardo Melo副市長とは、夫人が日系人ということもあって親しく、彼の応援があって1カ月を限度に休暇の許可を得ての参加だった。

＜研修体験と成果＞

日系研修では会社見学、農家の見学等に加え、特に一村一品運動は市長としての立場から見て大いに役立った。

日本のモデルを参考にして、帰国後にまず着手したことは貧民救済制度であった。すなわち、イガラペラス市とパラ州が共同で、農民(20人)から野菜や果物を買いつけ、それをAsociacao Social(社会協会：貧困家庭を支援する団体)に配り、そこから貧しい家庭に無償で配布する制度である。1軒の貧困家庭に年間4,250レアル分(約21万2,000円)の野菜・果物を配布する。これは「一村一品運動」に直接的なヒントを得たもので、「Feira do Produto Rural」(田舎産品市場)と名づけ今年の3月9日から始める。市場には47のボックス(ブロック)があり、そこに農民がそれぞれの産物を1週間に3回(土・日・月曜日)持ち込んでくる仕組み。場所は、現在の市営市場の隣りに設置予定だ。

＜今後のキャリアプラン等＞

イガラペラス市の発展に貢献していくことが今の目標である。イガラペラス市が2012年に詳しい調査をしたところ人口は3万5,600人とわかった(2万6,000人と思われていた)。市民は農村に35%、都市部に65%が居住している。以前、貧困者は3,000人と考えられていたが調査の結果、5,200人が貧困状態にあるとして認定された。日系家族も25家族あり、約60人が貧困者としての対象となっている。

この調査結果を踏まえて、市の発展には、農業振興と健康、教育が重要と認識し、これらに重点を置く政治をめざしている。

(ベレン)

番号：B22

氏名	Yuji Magalhaes Ikuta (男・35歳)	職業	大学教授、市健康衛生局介護局長、病院医師等
参加コース	日系医学（成人病に関する健康と病気のプロセスの予防）	2011年7月	3カ月

<要旨> パラー州立大学教授、パラー連邦大学教授、私立大学（CESPA）教授、アマゾンア病院医師、ベレン市健康介護局長、救急車医師の6つを兼務している。今年5月には、ベレンで国際学会を催すが、その発起人も務める。4,000人の大学教授が海外（英国、カナダ、オランダ、ポルトガル等）から集まる見込みとのこと。学会の名称は、「Sociedade Brasileira de Medicina de Familia e Comunidade」である。家庭医学と地域医学がテーマ。自身も作業部会で日本での日系研修体験を発表する。

<現在の仕事>

仕事は、上記のとおり6つある。ベレン市健康局介護局は医師100人、看護師100人のほかに、1,000人の地域代理店を使う大規模な組織で、彼らが家庭訪問にて介護に当たる。

<研修参加の動機>

日系研修には、アマゾンア日伯援護協会会長の父から勧められて応募し、参加した。

<研修体験と成果>

東京医科歯科大学を拠点として研修をした。名古屋（1週間）では老人学を学んだ。

奈良（1日）では広瀬先生と110歳の高齢者を訪ねライフスタイル、食事内容等をヒアリングした。

京都（1日）では、京都大学で老人学を学んだ。また、一般の地域住民を受け入れることになるパラー州立大学の老人病サービスセンター設立に関する指導を受け、老年者の保険と医学に関する修士課程の最終研究内容についても指導を受けた。老人病の施設の見学など体験による学習が、教育分野のみならず、研究分野でも非常に良かった。全体に研修は大きな成果があった。

これらの知見をブラジルに帰国後、医師としての診断、治療、患者とのコンタクトの方法の面で役立っている。研修中の社会体験や、日本文化との出会いにより倫理観、価値感など、自身の人格形成のうえで役立った。

<今後のキャリアプラン等>

今年、パラー州内 JICA 研修員の OB 会会長を引き受けた。今年5月にはベレンで国際学会を催すが、その発起人にもなった。4,000人の大学教授が海外（英国、カナダ、オランダ、ポルトガル等）から集まる見込み。学会の名称は「Sociedade Brasileira de Medicina de Familia e Comunidade」。家庭医学と地域医学がテーマだ。作業部会で自身も日本での研修体験（家庭医学と老人学の側面）を発表する。自分の使命は大学教授として若い学者を育成することと同時に、研究を継続することも大きな任務だ。したがって、博士課程を修了して、大学での役割や医師としての役割を果たしながら、日本との交流を続け、いつか日本で客員教授になることをめざしていく。

(マナウス)

番号：B23

氏名	Ayako Kohata (女・47歳)	職業	日本語教師
参加コース	継承日本語教育教師 (専門)	2012年1月	3カ月

<要旨>研修帰国後、日本で学んだ種々の技法を活用して指導効果を上げている。教案作成の仕方とそれを使ってどのように授業を展開するかにも最も役立っている。研修では新しい技術、例えばパワーポイントの使い方を学んだ。これらの技法をブラジルの日本語学校の設備に合わせて使い、教育効果を上げている。

<現在の仕事>

現在、日本語教師として、2つの日本語学校で指導している。①西部アマゾン日伯協会でバイリンガルBの教師(週1回3時間:土曜日)②マナウス日本人学校で日系人に日本語の指導(月～金の午前中)、進出企業駐在員などにポルトガル語を指導している(月～金の午前中)。

<研修参加の動機>

非日系人であるが日本事情に詳しい夫の薦めがあった。日本語の教授法にはいつも新しい方法を取り入れなければと思っていたので、応募して日系研修に参加した。

<研修体験と成果>

JICA 横浜研修所で3カ月間を過ごした(クラスはブラジル人4人、アルゼンチン人1人の計5人)。研修から帰国後、研修したいろいろな技法を活用して指導効果を上げた。例えば、教案作成とそれを使ってどのように授業を展開するかが最も役に立っている。研修前は単に、授業の主な課題をノートにとっていただけであったが、研修後は授業時間を効果的に使えるようになり、授業後に問題点を改善するのに役立っている。研修では、新しい技術、例えば、パワーポイントの使い方等を学んだ。これらの技法をブラジルの日本語学校の設備に合うように使い、教育効果を上げている。

研修後、振り返ってみると、言語能力が大幅に上がっていたことに気づいた。これは研修中に文法の教授法を知ったこと、語彙の量が増えたこと(研修時、自室で毎日、3カ月間、継続して日本語の本を読んでいた)、また新技術を学んだためだと思っている。研修期間に日本の生活習慣や日本の社会状況(時間厳守、教育の方法、行き届いたサービス、街の清潔さなど)を知ることができたことは、日本語指導の際にも役立っている。研修旅行では、静岡県浜松市、三重県伊勢市に受入れ団体の案内を受けた。

<今後のキャリアプラン等>

マナウスでは、地域の特徴として工業地帯があり、日本からの進出企業の工場が多く、日系従業員の日本語教育が今後は重要な課題となる。

氏名	Renata Mayumi Onogi (女・26歳)	職業	整体セラピークリニック (Clinica Seitai) 経営
参加コース	日系医学 (整体生理学)	2009年4月	10カ月

＜要旨＞自分で開いた整体クリニックを経営している。日系研修の学習成果を全面的に活用して、研修帰国後の2011年4月に開院以来、既に2,000人以上の患者を診察した。研究分野でも、バロポドメトリー (Baropodometry) の研究を更に進め、足の踏み方で人間がどのような姿勢になるのかなどを研究することで、将来、靴メーカーとそれぞれの人に合った中敷きを作るビジネス開発の可能性を考えている。

＜現在の仕事＞

整体セラピークリニック (Clinica Seitai) のオーナーとして、リハビリ、針療法、バロポドメトリア検査 [ヒューマンストレスの測定検査 (ある環境下で、心拍数、脳波などを特殊な装置をつけて計測する)] を実施している。研修から帰国直後は、ポストラウというクリニックで働いていたが、他の人の経営するクリニックでは自分が日系研修で学んだ技術が発揮できないと思い、自分自身のクリニックを開いた。その他にアビダ大学マナウス校で鍼の実習の指導をしている (1週間1回:4時間)。整体クリニックは2011年4月にオープンし既に2,000人以上の患者を診察してきた。1日に、多い時には約20人、少ない日でも8人くらいの患者を診る。患者は、日系人、進出企業の日本人が多い。日系進出企業の人たちには、日本語が使えるので歓迎されている。日系研修で学んだそのままの技法でクリニックで診察している。

＜研修参加の動機＞

日本が自分の仕事の分野では進んでいることを知っていたので、日本に行くことにあこがれていた。たまたま日伯文化協会のポスターで日系研修を知り応募した。参加時の日本語レベルはN-2であり、日本語での会話には自信はあった。

＜研修体験と成果＞

産業技術総合研究所 (大阪府池田市) で研修 (10カ月) を受けたが、同研究所の吉野先生がストレスのレベルを数値化する研究をしており、吉野先生のもとで、脳波の研究を行った。これは、例えば、被検査者がホラー映画を観ている時に、スイッチを押す反応をして脳波がどのように変わるかを研究する分野である。換言すれば、人がストレスを感じた時、体がどのような反応をするかを研究することである。人間の行動を数値化することを日系研修で知ったが、これが日系研修での最も大きな収穫であった。これが、バロポドメトリーを研究するきっかけとなった。日系研修期間の休日を利用して、健康医療関係の整体クリニックを4～5カ所訪れ、種々の治療法について見聞を広めることができた。また、つくば研究所 (産総研) で学会に参加した。ここでいろいろな研究発表を聞くことができたことは幸運であったと考えている。

＜今後のキャリアプラン等＞

現時点では、現在のリハビリ医療を続けながら保健に関する研究を続ける考えだ。修士課程を進みたいと思っているが、将来的には総合的な医療センターを作りたい。保健分野の研究もしたい。研究分野では、日系研修で人間の行動が数値化できることを学んだが、このことがバロポドメトリーを研究するきっかけを与えてくれた。足の踏み方によって、人はどのような姿勢になるかといった研究して靴の中敷きを開発できると思っているので、この研究を続けて、将来は靴メーカーと各人に合った中敷きを作るビジネスを開発したい。

(マナウス)

番号：B25

氏名	Rie Shishido Ishizawa (女・40歳)	職業	日本企業 (川崎株) 勤務 (翻訳・通訳) + 日本語教師
参加コース	継承日本語教育 (基礎Ⅱ)	2011年12月	3カ月

<要旨> JICA 日系研修前には、自分自身の日本語能力に自信がなく、日本語指導にも自信がもてなかったが、研修を終えて帰国した後は、日本で学んだことが支えてくれていると思うので、自信をもって日本語教育に従事している。マナウスの日系進出企業の従業員に日本語を指導して、日系進出企業とブラジル人の橋渡し役育成の任務を果たし、地域社会、ブラジル社会に貢献している。

<現在の仕事>

マナウス・フリーゾーンへの日系進出企業・川崎株式会社 (オートバイ製造：従業員数 180 人 / うち駐在員 2 人) で翻訳・通訳業務を担当している。西部アマゾン日伯協会日本語講座 (月・火・水・木の夜間 3 時間) の教師もしている。民間企業と日本語教師とを両立させている。

<研修参加の動機>

日本語の能力を高めたいと思っていたところ、日本語教師の研修会で薦められ、日系研修に応募した。勤務先の川崎株も日本研修に参加することを承知してくれた。

<研修体験と成果>

日系研修は 3 カ月間、JICA 横浜で行われた。教材の作り方、指導の仕方 (授業の仕方)、新しい技法 (パワーポイントの使い方、生徒たちが楽しく学べる方法など) を研修した。授業中に会話をする場面をつくり、生徒たちに話をさせる (ロールプレイング) は勉強になった。研修旅行では、広島県 (安芸の宮島)、神戸への 3 泊 4 日の旅行があり、日本理解には役立った。研修前には想定していなかった指導の仕方を JICA 日系研修で学習できたことは非常に意義があった。

研修帰国後は、これらの新技法を取り入れた授業を行っている。特に、ロールプレイングについては新しい応用技法がわいてくるので、生徒たちがの反応も良い。自身は、研修グループの他の人たちに比べて日本語が劣っていると思ったが、研修を終える頃には日本語にも自信がもてるようになり、帰国してからは日本語教師として自信をもって教えることができるようになった。これも研修の大きな成果だ。

<今後のキャリアプラン等>

今後とも日本語の指導者を続け、マナウスの日本語教育を支える覚悟だ。特にマナウス地域は日系進出企業が目立っており、日本語のニーズは高いので充実した仕事に遭遇できる。

5-2 パラグアイにおける帰国日系研修員

地 区	帰国研修員名	参加研修分野	職業 / 活動	番号
イグアス	仙野 良子	社会福祉	デイケアサービスリーダー	P01
	井上 夏子	教育	幼稚園保育者	P02
	堤 剛史	民間セクター開発 農業・農村開発	農協副総支配人	P03
	園田 祥吾	情報通信技術	レストラン自営	P04
ピラポ	篠藤 真弓	保健医療	栄養コンサルタント	P05
	高橋 覚	農業農村開発	農協購買部主任	P06
	篠藤 春美	社会福祉	福祉ボランティア	P07
	小田 美和	農業・農村開発	日本語学校副校長 地域ボランティア	P08
ラパス	渡辺 美和	日本語教育	日本語学校教師	P09
	石川 三枝子	社会福祉	福祉ボランティア	P10
	宮里あけみ	農業・農村開発	地域ボランティア	P11
	北川 勇一	農業・農村開発	農協総務主任	P12
フラム	星 あゆみ	保健医療	歯科医	P13
エンカルナシオン	山本 由紀子	日本語教育	日本語学校教師	P14
アスンシオン	堤田 鳴美	教育	幼稚園保育者	P15
	池田 広美	保健医療	歯科技工士	P16
	山中 恵	都市開発・地域開発	建築士	P17
	八木 ヘンリー	保健医療	麻酔医	P18
	山中 渡	保健医療	外科医	P19

(イグアス)

番号：P01

氏名	仙野 良子 (女・58歳)	職業	イグアス日本人会職員 (イグアス診療所管理事務、 デイケア・サービスリーダー)
参加コース	高齢社会福祉におけるデイケアサービス	2007年6月	3カ月

＜要旨＞研修で学んだ「地域における福祉の取り組みの仕組み」からイグアス移住地で実施可能な要素を引き出し、デイケア・サービスを立ち上げ、利用者に週1回の集まりが待ち遠しいといわれるまでになった。

＜現在の仕事＞

2004年2月からイグアス日本人会立イグアス診療所の管理・受付業務に従事。非日系の患者の通訳も務める。毎週火曜日には地域ボランティアで運営されるデイケア・サービスのリーダーとして活動。朝8時半から11時過ぎまで70歳から80歳台15～20人（うち、男2人）が集まる。まず血圧と体重、時には握力も測定。皆で歌を歌い、「イキイキ体操」をし、お茶を飲みながら絵手紙、ゲーム、頭の体操などを行い、たまに外に出る。

＜日系研修への参加＞

当研修の第1回目に応募がなく、CETAPAR 所長に赴任していた発案者の JICA 職員が日本人会に働きかけ、診療所スタッフであった本帰国研修員が診療所の業務として研修に参加。高齢者は皆元気なので高齢者福祉が問題になっていたわけではないが、元気うちに介護予防の意味も込めてケアに取り組む必要性が出てくるという考えから研修に参加することとした。

石川県羽咋市での地域福祉の取り組みをつぶさに知り、それは全く初めての経験であった。社会福祉協議会と石川県立看護大学とが連携して取り組み、どのようにデイケア・サービスを立ち上げたのかを学ぶ。

＜帰国後の実践＞

帰国後、研修で学んだこと、見てきた地域でのデイケア・サービスの様子を日本人会、婦人会に話し、協力を呼びかけ、実現可能な範囲を絞り、日本人会で実践することになる。日系社会ボランティアの力も得ながら協力を呼びかけた結果、地域ボランティアが9人集まる（日会職員でリーダーの当人以外は、4人ずつ隔週）。当初は診療所の狭いサロンで開始。

定期的に通う場所ができたのは高齢者にとって元気の源である。これまでは出かけて行くところがなかった高齢者たちが、通うことで大変明るくなる。特に月1回第一火曜日の食事は楽しみに来る人が多い。イグアス移住地の高齢者福祉の柱となっている。

立ち上げから日常活動の定着までもっていくのに、日系研修で地域デイ・サービスの実際に触れたこと、その考え方や仕組みを解説してもらったことがすべてのベースになった。

＜今後の展望＞

デイケア・サービス以外でも、「アクションプラン」を立てたり、人前で発表をしたりすることが日系研修に参加したおかげでできるようになった。

日系社会の地域高齢者福祉にどう取り組むかは日本人会が中心にならざるを得ない。今後の新しい展開にも自分ができる範囲で（負担との兼ね合いを取りながら）貢献していきたい。

氏名	井上 夏子 (女・26歳)	職業	イグアス聖霊幼稚園 保育者	
参加コース	幼児教育		2010年12月	3カ月

＜要旨＞「子どもに自分で考えさせる。保育者はその結果が出るまで我慢して見守る」ことで、園児が生き生きと学んでいる様子を、日系研修で訪問した幼稚園で見て驚き感心。帰国後、自信をもっていままでの一律お膳立ての保育方式をやめ、見学・実習例を実行。園児の創造性を育てることに近づく実感を得つつある。

＜現在の仕事＞

勤務先のイグアス聖霊幼稚園は、イグアス日系社会が日本人シスター3人に依頼して40年前に設立された。カトリック教会の横にある。園児は当初は日系子弟のみであったが、現在は日系3割、5割、非日系2割。6年前から日本人会が運営している。

＜日系研修への参加＞

日系幼児の心身の発達を促すことに携わる保育者として、以前から日本の幼稚園との違いに関心をもっていたが、日本語学校校長から勧められ、この研修への参加を決めた。

研修で訪れた日本の幼稚園での、答えをすぐに与えずまずは子どもに考えさせる、という方針に非常に驚いた。パラグアイでは教員が先頭に立ってそれを真似させ、喧嘩があったらすぐ仲裁に入る。子どもが訴えてきたら相手呼び自分でどちらが悪いかが判定し注意する。見学した幼稚園では、まず子どもたちの間で解決する努力をさせていた。

＜帰国後の実践＞

帰国後、さっそく、「考えさせる」ことを目標においた。時間を与え急がせず、我慢して結果を待つ。研修前は工作等では同じものを一斉に作っていたが、なるべく園児たちの創造性を大切に、考える機会を与えるようにした。喧嘩の対応も、なるべく自分たちで解決させるように心がけている。また、子どもたちが言葉をたくさん覚えるように「絵カード」を活用したり、新しい歌を少しずつ取り入れたり、工夫をしている。

同僚にも研修で感心したことを伝えたと、早速同様のやり方を取り入れたくれた同僚もいる。パラグアイの幼稚園は（学校もそうだが）教員が良いと思うことは自分で自由に変えていけるため、研修で学んだことを実践に移しやすい。

＜今後の展望＞

今後は、「園児一人ひとりと心の糸を結べる保育者」となることをめざしている。一人ひとりの子を理解する努力を続け、どの園児の様子を聞かれても即答できるようになってはじめて保育のプロだと考えている。

氏名	堤 剛史 (男・36歳)	職業	イグアス農業協同組合副総支配人兼製粉工場 工場長
参加コース	製粉工場運営システム	2003年9月	12カ月
	日系農協中堅実務者	2009年8月	1カ月

＜要旨＞日系研修で製粉工場のあらゆる部門運営を実地に経験。それにより培ったあるべき製粉工場の全体像を頼りに、イグアス農協製粉工場の品質・生産性向上を達成。生産能力倍増も成し遂げる。今後は農協全体の運営に責任をもつ立場の一層の自覚に努めたい。

＜現在の仕事＞

多角的事業を営むイグアス農協全体の総支配人見習い中の立場にある。3カ月前までは製粉工場の工場長（現在も兼務）。2011年から生産倍増に取り組み、達成。小麦粉の販売も好調である。

＜研修の成果＞

化学工学専攻の大学生当時から製粉に関心を持ちイグアス農協製粉工場でアルバイトをしたこともある。就職を検討していたとき、同農協組合長から製粉工場運営システム研修を勧められ参加。

研修では製粉工場の現場で品質管理を皮切りに、製造、設備管理、包装・出荷とあらゆる部門を8カ月で経験し、更に4カ月、製パン・製麺子会社にも行き二次加工の現場を体験。これを通じて製粉事業の全体像をもつことができた。受入れ企業（研修実施機関）が各部署を経験できるよう入念に段取りを組んでくれたおかげで、各部署でさまざまな技術を学ぶことができた。

＜帰国後の実践・SVと取り組んだ改革＞

帰国後、予定どおりイグアス農協で働き始める。製粉工場主任として工場運営に携わることになった。品質管理から入りその後製造管理を担当。製粉は24時間稼働であるため、問題が発生すると夜中でも対応しなければならないので大変だが、やりがいに満ちた職場だった。

同農協の要請で（2006または2007年から2年間）派遣された昭和製粉工場長経験者のJICAシニアボランティア（SV）のサポートを得て、いよいよ工場運営管理の改善に着手する。研修を通じてあるべき姿を描くことはできていた。それをパラグアイ環境と製粉工場の現状を踏まえてどう適用するかを探るに当たりSVとの議論が大変役立った。たとえば、日本では3カ国から輸入した小麦をブレンドし数品種に展開しているが、こちらではパラグアイ産1品種の小麦から数品種の製品を製造する方式なので、単純に日本の管理方式を導入することで済むわけではない。試行錯誤とSVとの議論を重ね、徐々に改善を進めていった。そして長年目標としていた日産40tから80tへの生産倍増に取り組み、2011年から2012年に向け達成する。これが可能になったのも研修であるべき姿のイメージをもっていたこと、それに加えてSVから学べたことが大きい。現在でも研修で学んだ品質管理、製造管理、二次加工など、習得した製粉工場のあり方は現場で生かしている。

＜二度目の研修参加と今後の展望＞

2009年に参加した日系農協中堅実務者研修は1カ月という短期研修で物足りなさはあったが、いくつかの農協を訪問しさまざまな農協事業に触れたことで、今後の事業展開イメージを描く際の助けになっている。農協全体の事業をみる立場になったいまから、この経験が生きる局面が出てくるだろう。また、この研修で培ったポリビア、ブラジルほか南米他国の農協関係者との人脈は、大豆さび病用農薬情報の収集や相場に関する意見交換などに生きている。

今後は、イグアス農協の事業拡大・多角化、そのための人材確保を外部人材導入も含め進めていくこと、イグアス農協を大きな経済団体にしていくことを考えている。

氏名	園田 祥吾 (男・26歳)	職業	お惣菜 / お弁当製造販売・レストラン自営		
参加コース	情報処理		2006年4月	11カ月	

<要旨>参加した日系研修は情報処理コース、現在の仕事は惣菜販売・レストラン業自営。両者に必然的な関係は全くないが、天職を見つけるまでの過程で経験したもののひとつに日系研修があったといえる。

<現在の仕事>

イグアスで両親と同居し、自宅で惣菜・弁当の製造販売と予約制レストラン業を営んでいる。地元日系社会ではよく知られ、非日系のひいき客も多く抱える。その日の予想天候や地元行事などを織り込んで仕込量を決め販売するのは惣菜だけ。弁当とレストランは注文・予約制。

総菜は、月曜日に1週間の仕込みを行う。火曜から土曜日は朝6時から準備に入り、10時から昼過ぎ売り切るまで販売する。廃棄商品を残すことはない。平均30食。パラグアイ人に人気のある焼きそばデーの金曜日は平均50食を売る。予約制レストランは客単価30～100千グアラニー(600～2,000円程度)。5人から受け付け、客の要望に合わせたコース料理を提供する。メニューを考えるのも準備・調理を行うのも自分自身。45人分の注文を受けたある日のランチでは午前2時から準備に入った。

日系の運動会では170食の弁当を受注。2日間不眠で無事乗り切った。補助1人を使用し平均月商は10百万グアラニー(20万円)と、悪くない売上を確保。顧客構成は、日系60%、非日系40%。

<日系研修への参加>

2005年に大学に進学し、情報処理を専攻。2006年に休学し日系研修に参加。日本人会の回覧で知り、2年前に参加した知人からも良かったとの情報があり参加を決めた。

研修カリキュラムを組んでもらう時、提供される科目名称だけでは、内容や水準がよく理解できないため、受入れ専門校に任せてしまったものが多くなった。大学で情報処理を専攻していたので、基本的に中級で組んでもらったことが、振り返れば失敗だった。日本に来ていざ授業を受け始めると、ついていけない科目が多かった。後期は初級にしてもらいようやく理解できる内容になったが、研修は中途半端に終わってしまった。

<食の世界へ>

2007年3月大学に復学するも、将来の進路に迷いが出、結局、かねてより好きだった料理の世界に入ろうと決心し退学。日本食と飲食チェーン・システムを経験するため2008年4月から6カ月福岡の居酒屋チェーンの店舗厨房でアルバイトをする。揚げ物、串焼きなどを経験。この間、飲食店運営にも関心を持ち情報を収集。しかし、700円という低い時給では、アパート暮らしが成り立たず、群馬の親戚を頼って2008年11月から検査・梱包派遣会社に勤務。食品工場などに派遣され梱包作業に従事し少しの貯金も確保。2010年9月に帰国し、10月から惣菜を手がけていた母親を継ぎ、現在に至っている。この間、調理については知人を頼り、鹿児島で3カ月(2011年11月～2012年2月)調理学校に通ったが期間的には不十分。チャンスがあれば再度日本食調理を勉強したい。

<今後の展望>

研修成果を生かしたとはいえないのだが、ホームページの作成やセキュリティ管理の基礎は今も役立っている。日本国内外に友達をつくり、さまざまな国の文化習慣を学び視野が広がったので、専門知識は生かせなかったものの実りある研修であった。今後は、レストラン経営を本格化したいと考えている。予約のみでなく、週末に限定して開店し、様子を見ながら開店日を拡大していく。

氏名	篠藤 真弓 (女・27歳)	職業	ピラポ農協経理に勤めるかたわら栄養コンサルタント
参加コース	栄養管理学	2009年4月	10カ月

<要旨>スペイン語で栄養学を学んだ後、日系研修で日本語でも学び、日本食材・献立にも強くなったのを武器に、日系非日系両方のクライアントに対応できる本格的な栄養士の力をつけた。日本食に興味をもつ非日系人が増加するなかで今後一層の活躍が期待されている。

<現在の仕事>

現在、ピラポ農協で経理業務に携わり、オフの時間に栄養コンサルタントを務める。パラグアイでは肥満が多く、クライアントは日系人のパラグアイ人配偶者が中心。肥満を直したい人ばかりでなく、糖尿病、高血圧、憩室症などの患者が医師の処方箋をもって連絡してくれることもある。連絡を受けると自宅に来てもらうかメジャーと体組成計を抱えクライアントの家を訪ねる。体脂肪率を測定し、普段の食生活、もっている疾患、食生活を聞きだし、話し合いのうえで目標（血糖値/減量/消化機能調整、他）を設定する。これらを基に2週間の献立を提案する。決めつけのメニューではなく、クライアントに選択の幅があるよう食の組み合わせを示し、飽きない工夫を凝らす。1～2週間おきに身体計測し進捗をチェックする。ひと月を超えるとメニューを評価し次の献立を提案する。こうして目標達成に近づけていく。

<研修の成果>

パラグアイの大学で4年間栄養学を専攻したのち、2008年アスンシオンの幼稚園に保育者として勤務中、日系研修に応募し参加。帰国後、エンカルナシオンのレストランが併設する栄養相談室で栄養士として活躍。日系研修で役立ったのは、食事療法、調理実習和食献立、日本食の知識である。

大学で学んだ食事療法に加え、日系研修での調理実習で得た和食の知識を取り入れての献立作成が可能になった。非日系人の間でも「油・塩分控えめ、多種の野菜を利用する」などの理由で日本食に関心をもつ人が増えていて、その患者たちの要望にこたえやすくなった。

また、日系社会では和食の習慣が強いが、和食材を利用した献立作成ができるようになったことや、日本語でも的確な専門用語で説明ができるようになったので、日系非日系両方のクライアントの要望に応えられるようになり、大きな強みを獲得した。また、人前で話すことが苦手だったが、日系研修で調理実習での発表や学会参加などを経験し、克服できた。

<今後の展望>

専門が生かせる栄養士の仕事は順調で快適だったが、一身上の都合で離れることになり、しばらくののち、ピラポ農協に勤めることになる。現在は専門外だった経理を担当し、オフを利用して個人で栄養相談を受けるといふ形にとどまっており、栄養士として以前のように活動できていない。機会があればまた栄養士専業に戻りたいと考えている。その際には、食育や生活習慣改善のために別の職種（歯科医・小児科医・眼科医他）と一緒に、学校やさまざまな機関でオリエンテーションなどができる場があれば日系社会に限らず活動していきたいと希望する。

氏名	高橋 覚 (男・34歳)	職業	ピラポ農業協同組合購買部主任
参加コース	日系農協中堅実務者研修	2007年7月	1カ月

＜要旨＞各部署で農協経営の第一線を担う中堅実務者が、研修を受けて視野を広げ、参考にできるいくつかのモデルを持ち帰る。それは更に広い分野の責任者になった時の支えになるに違いない。そのような役割を果たしているように思われる研修への参加者のひとつの例。

＜現在の仕事＞

高校卒業後、1997年12月ピラポ農協に就職、購買部に配属され、2002年に主任に昇格。一貫して組合員のための購買業務に携わってきた。

購買部主任としての担当業務は、

- ① 農機部品、工具類の仕入・販売。販売量を予測し、在庫との兼ね合いから品目別に仕入数量を決め発注する。組合員以外への販売も少なくない。
- ② 農薬・肥料の仕入・販売。基本は組合員からの注文に基づく発注だが、在庫販売の品目もある。営農技術指導部門が組合員から相談を受け、提案したデータを受け継ぎ、商社と価格交渉し仕入れるものも多い。
- ③ 組合員からの注文に基づく農機の仕入販売。

農産物市場、肥料・農薬市場、農機具市場の知識と洞察、農機の専門的知識も要求される仕事である。また主任として農協事業全体への目配りも欠かせない。

＜研修の成果＞

2007年、文字どおり「農協中堅実務者」として職員トップの参事に勧められ、研修に参加。

参加者はパラグアイ3人、ボリビア2人の計5人。主に神奈川、東京、広島農協施設を見学。乳品工場、大田市場見学、農協中央会等全国組織訪問などが含まれていたのが記憶に残る。なかでも印象的だったのは、パラグアイでは現在も行われている遺伝子組替作物への強い抵抗を知ったこと、世界的穀物相場の構造に関する講義、各地の単位農協から中央組織に至るピラミッド型の大規模農協組織がどのように運営されているのか、農協間の横のつながりの様子等である。また、研修のさまざまな場面で、日本のきめ細かいサービス、心配りを効かせた接客・もてなし、お客さま第一主義の実践などは、想像はしていたとはいえ、これは世界一なのだろうと改めて驚いた。

この研修は、直接的に役立つ技術を提供するものではないが、意識に与えた影響は小さくない。今後中堅幹部として、組織や事業のあり方を考えていく際に、ひとつの参照すべきモデルとして、ひとつの物差しとして、役立つに違いない。他農協とのつながり、サービスのあり方、準組合員という仕組みなどは実践上も参考にしていきたい、と考えている。

＜今後の展望＞

在庫最適化の追求が課題である。現在は、1つの部品がないがために収穫が遅れることも多々ある。注文が来る前に揃えておくことが重要だが、在庫をやたら増やすのは稚拙な対応である。どの季節にどの部品が必要かには法則性があるため、季節に応じた適切な在庫を更に追求していきたいと考えている。在庫と売り上げのバランスを改善し、最適化を追求すること、柔軟に注文に応えるためにデータの整備・活用に力を注ぐことをめざしている。

氏名	篠藤 春美 (女・60歳)	職業	主婦、ピラポ日本人会福祉ボランティア
参加コース	高齢者福祉におけるデイケア・サービス	2011年6月	3カ月

＜要旨＞高齢者福祉活動を進めるうえで、研修で教わったことが全面的に活かされていて、ノウハウの移植がみごとに行われている。

1961年、小学校3年生の時に北海道から両親に連れられピラポに移住。ピラポの高齢者福祉にボランティアとして参加してきた。現在はデイケア・サービスグループ「ひまわり会」中央支部のリーダーを務めるほか、他の高齢者福祉活動の手伝いも行う。

＜ピラポの高齢者福祉活動＞

ピラポ日本人会の婦人部を中心に、日系社会青年ボランティア（日青ボ）の協力を得て、2005年にデイケアの勉強会が始まり、翌年「ひまわり会」の活動が開始された。自身も当初より参加。

「ひまわり会」のデイケアは、各支部（6地区）年4回に本部（全体）茶話会の年2回が加わり、合計年6回。中央支部の場合、3月茶話会（2:00～4:00）、6月帰国日青ボの送別会を兼ねた集い（10:00～2:00）、9月茶話会（2:00～4:00）、12月忘年会（10:00～2:00）。お昼を挟む2回の集いでは、ボランティアが昼食を準備し、参加者にはこれも大きな楽しみのひとつである。平均12～13人多いときは15人（うち、男4人）の70～80代のお年寄りが集まる。毎回、「身体計測」（血圧、体重、体脂肪率）のあと、体操、歌、ゲーム、3カ月ごとの誕生会は定番。昼食のある2回の集まりでは、更に行事が加わる。6支部全体から参加する本部茶話会は5月と11月で、ともに2:00～4:00。約50人が日会サロンに参集。身体計測はなく、歌とゲーム。

＜研修の成果＞

日系研修参加によって、「ひまわり会」の参加者が活性化し、同時に、福祉ボランティアの負担が軽減された。その要因は、全員参加型の運営方法の導入。以前は、準備も運営も何から何までボランティアが先頭に立ち、進めていた。しかし研修で、お年寄りの知識・経験を役立てると参加者が活性化することを知った。挨拶の上手な人、歌の得意な人、料理の得意な人など、お年寄りの蓄積はすごいという、当たり前のことをいままで見逃していた。「これやってくれるひと」「みなさん教えてください」。これですぐぶん楽になった。

もうひとつは、認知症に対する対処法を学んだこと。研修で、認知症の進んだお年寄りを抱える家庭を訪問した。「だれだれがいない」というお年寄りに「もう死んじゃったでしょ」ではなく「さっき出かけて行ったよ」と答えるだけで落ち着くことを知った。否定で受けず、まず相手の言うことを受け容れる大切さを知った。これは自分の家庭でも実際に役立ったし、認知症初期のメンバーがいる会の運営でも大いに役立っている。

「ひまわり会」はボランティア不足を常に抱えている。仲間を増やすには候補者への日頃の声かけが効果のあることを知った。

＜今後の展望＞

「ひまわり会」のほか、老人クラブ「寿春会」や「おたっしやクラブ」の手伝いもしている。元気な高齢者中心だがここにも認知症初期の人がいる。今後ショートステイも必要になる。現在は各家庭が介護する体制だが、介護者の負担が無視できなくなるのはそう遠くない。診療所横の機能回復センター「憩いの家」を利用すれば可能。まだ体制が整わないが、ここでは認知症対応がますます重要になるだろう。スタッフ育成が課題だが、自分自身も可能な範囲で手伝っていきたいと考えている。

氏名	小田 美和 (女・48歳)	職業	元 ピラポ日本語学校副校長、地域ボランティア
参加コース	農村婦人リーダー育成	2007年1月	1カ月

＜要旨＞ 1カ月という短い研修ではあるが、問題意識をもち積極的な姿勢で、優れた活動の実際に触れると大変大きな効果がある。それが最大限に発揮された例のひとつとして紹介できる事例。

＜現在の仕事＞

2011年末まで6年間ピラポ日本語学校で日本語教師につき副校長を務め、その間、2006年の日本人会「ひまわり会」の立ち上げ時からボランティアとしてアカカラジャ地区リーダーを務めるなど、地域活動に積極的にかかわってきた。現在は体調の関係で小休止しているが、回復すればまたボランティア活動に復帰するつもりである。

＜研修の成果＞

2007年に参加した「農村婦人リーダー研修」は大変役立った。あちこちの農村を視察しここで見聞きしたことをもとに、帰国後日本人会婦人部で、負担を分けて全員参加型で、お年寄りも子どもたちも巻き込み、地域全体で取り組む形をめざし、大いに活性化した。婦人部は全体で120～130人。うち、アカカラジャは47軒。バレー、野球、敬老会、入植祭(運動会)、孤児院慰問などの活動。成功を喜び、反省会もするようになった。記録を残すようにもなった。

それ以外に、日系研修で継承日本語教育が大切だと知った。研修で学んだ継承日本語教育の方法と移住学習を日本語学校のプログラムに取り込むことができた。生徒と一緒に将来の日系人のあり方などを考え、助言することができた。また移住学習もパラグアイ人と一緒にやっていくことを研修で勧められた。時間はかかるが、非日系のパラグアイ人と共有することの大切さを認識した。現地の人たちを使用人として使ってきた歴史もあり、差別意識が抜けない人もいるが、2世が増えるにつれ、理解してくれる人も増えてきた。活動全体を、非日系を含む地域ぐるみで行うことを増やすようになったので、日系人の役割について地域の方々と話し合い、考える機会にもなった。

＜日系社会青年ボランティアとの協同作業＞

移住学習については、日青ボと協働し、一昨年から昨年にかけて、何度も勉強会を開催した。日本語学校のなかで「地域とともに学ぶ移住学習」プログラムを完成。これに基づき、日本語学校土曜日7時限のうち、1時限を多目的に使用するようにした。文化活動、書道、絵画、折紙など。この時間を使って移住史も4年生から年6時限入れた。同時に、国語教科書を日本と同じペースで消化するのは負担が大きいので、教科書を分析し、2年間カリキュラムの見直しに取り組んだ。これら日系社会青年ボランティアとの協働作業が進んだ背景には、日系研修で学んだ内容がベースにあったことが助けになっている。

＜今後の展望＞

今後体調が整ったら、地域婦人部グループ活動活性化の新しい展開として、地域の特産物を探し、地産地消をアカカラジャで実践することについて、みんなで考えていきたいと考えている。福祉活動にも、日本語学校にも協力していきたいと意欲的である。

(ラパス)

番号：P09

氏名	渡辺 美和 (女・28歳)	職業	ラパス日本語学校教師
参加コース	日本語教育教師研修 (基礎 I)	2006年10月	5カ月

<要旨> 日本語教育研修が日本語教授法を習得させ、移住地における国語教育手法一辺倒からの脱却に大きく役立ってきたことを語る好事例。

<現在の仕事>

ラパスで生まれ、アスンシオンの教育専門学校で小学校教員免状を取得後、2006年1月からラパス日本語学校で教師を務め満6年になる。現在小1(4人全員混血)、小6(日系8人、混血2人)を担当。火曜と金曜、7:00～11:30に小1、1:00～5:00に小6を教える。これ以外に水曜日午前中は補修クラスを担当する。さまざまな言語環境に暮らす生徒が混ざるため、生徒の構成に合わせて、教え方に工夫が必要。日本語学校では伝統的に日本の「国語」教科書が用いられてきたが、全員混血である今年の1年生には難しく使えないため、JICAの「日本語ドレミ」を使用している。

土曜日は家庭教師を行っているがこれは完全に外国語としての日本語を教えている。

<研修の成果>

生徒の条件に応じて日本語の教え方を変える必要があることをはっきりと知ったのは、日系研修への参加がきっかけだった。「みんなの日本語」を使い、教え方を学ぶ。「JICAの日本語チャレンジ」を使った教授法も。週1回外国人対象の子供教室での実習。それ以外に、日本文化(茶、習字、着物、日本式工作、ひなまつり)、線画の書き方、リトミック(律動法。音楽教育手法のひとつ)などを学ぶ。

「国語」を日本以外の環境で教えるとき、「日本語教育法」を知らないと柔軟に対応できないことを学んだのは大変役に立った。日本語を日常的に使っていない子どもに教えるには、論理的であることが必要になる。日本語を普段使っていない生徒からの「なんでそう言うの?」という質問に対し、以前は「そういう言い方をするの」としか言えなかったが、研修参加により引き出しが増え、論理的に回答する自信がついた。例えば1本、2本、3本の「本」の発音の違いの教え方などである。現在、日本語を家庭で使わない子どもの補修クラスを担当しているが、この発音の違いを色分けして説明したところとてもよく覚えてくれた。6年生に、形容詞には「～い」型と「～な」型と2つのグループがあることを教えるとき、研修で習った方法が早速役立った。

ただ理解の速い子と遅い子、日系と混血や非日系の子と一緒に教えることにはやはり苦労はある。

例えば、国語教科書に出てくる日本の事物、列車、囲炉裏などの説明。以前より説明が必要な頻度が増えてきた。日系2世の父親も抽象語や専門用語はスペイン語が出るからか、子どもの抽象語に対する理解度が落ちてきているように感じている。

研修では、継承日本語教育ということで日本語の指導法だけでなく、移住史やバイリンガル教育についても学び、日系社会で教師を務めるための視野を広げることができた。

<今後の展望>

次のステップとして日本語教育基礎Ⅱに参加して技量を磨きたいと考えている。国語も日本語も教えられ、思春期の子どもたちの悩みへの対応もできる教師をめざし、現場で教育に携わっていくことを希望している。

氏名	石川 三枝子 (女・60歳)	職業	主婦、ラパス日本人会福祉ボランティア
参加コース	高齢者福祉	2007年6月	3カ月

<要旨>研修は参加者が係るデイケア・サービスの質を上げると同時に、次のステップとなる介護サービスについての心の準備を作り出していることを語る好事例。

<デイケア・センターの立ち上げ>

現在、ラパス日本人会が運営する高齢者福祉の会「ラパチョ」のボランティア。日本人会婦人部で高齢者福祉勉強会を2004年にスタート。講師は日系社会シニアボランティア。婦人部各地区から11人が参加した。勉強会が進んだところで、日青ボに同行し、訪問デイケアを始めた。

2006年、診療所横の小部屋に来てもらう形のデイケアをスタート。70代4～6人が集まることから始まった。その後、診療所にリハビリセンターができ、ここを使うようになる。メンバーは日系12人（うち、男3、車いす利用者3）、非日系4～5人（うち、男1、車いす利用者1）。非日系のお年寄り市役所を通じて参加。当初はもっと多かったが負担がとても大きいので、市役所に頼み縮小してもらった。

ボランティアの体制は6人（交代制）＋手伝い4人。2グループに分け、ボランティア3～4人、手伝い2人（日系1、非日系1）。月2回（第2第4水曜日）10:00～4:00。8時に来る人もいるし帰るのが5時の人もいる。まず診療所で健康チェック。血圧、心拍数、体重を健康ノートに記録。リハビリセンターに移り、ラジオ体操、手芸、折り紙、貼り絵など身体と指を動かす。季節に応じ、節句、お雛祭りの切り絵、貼り絵。最初は「歌なんて」「まるで幼稚園じゃないか」と抵抗が多かったが、喉を動かすのは声を保ち、飲み込む力をつけると説明。もちをのどに詰まらせヒヤッとした経験のある人も多いので、納得し、現在は皆楽しみにして参加するようになった。

<研修の成果>

日系研修で参考になったのは、石川県羽咋市のデイ・サービス「いきいきサロン」での介護と看護である。体調を崩した人に対するケアの目が必要なことを知り、以前より気をつけるようになった。指を使う折り紙がとても良いことを知った。また、お年寄りに対する接する際に、親しいのはいいが馴れ馴れしくするのは良くなく、「親しき仲にも礼儀あり」が大切なことを知った。

またデイ・サービスと家庭訪問との違いを知った。同行家庭訪問では、個人の家にごくまで入っていいのかという感じが何となくつかめるようになった。介護必要者を抱えた人たちの集まりである羽咋の「らくだの会」では、認知症の方への対応の仕方を実際に見て知った。また介護者同士の互いのアドバイスの大切さを知った。こういう会が必要なことを知り、将来のイメージが湧いた。介護サービスを実現していくためには、同じイメージをもった研修参加者が複数必要だと思った。

さまざまな集まり、福祉活動のバラエティを見聞きできた。介護予防の「いきいきサロン」「趣味の部屋」では、地域での見守りが大切なことを知った。近所の人協力し合って独居老人を見回りしている。高齢者がデイケアに行っている間に介護者の集まりを行い、息抜きしてもらいまた情報交換をしてもらうことの効果も知った。

<今後の展望>

研修後、教わったことを実行しながら、今後必要性が高まる介護についても、どのように取り組むべきかイメージが湧くようになった。

(ラパス)

番号：P11

氏名	宮里 あけみ (女・55歳)	職業	主婦、元農協婦人会部長、前日会婦人部ラパス支部長
参加コース	農村婦人リーダー研修	2011年1月	1カ月

<要旨>主婦の研修参加によって見聞を広めてもらうことが、地域社会活動の活性化や非日系社会との融和への動機づけになっている事例。

<研修参加まで>

2009年1月から2年間ラパス農協婦人会の部長、その後1年間2012年末まで同会の会計、2011年12月から1年間日会婦人部ラパス支部の会長を務めるなど、地域活動に積極的に関わってきた。このようななかで農村婦人リーダー研修に参加した。

<研修の成果>

研修は福祉が中心だった。視察で病院、デイケア・サービスを訪問。また婦人の地域活動の様子をいくつか見学した。料理や食品づくり、豆腐づくりなどを見学したが、長野県生坂村の「おやき」が最も印象的だった。小麦粉をこねた中に調味したナスなど野菜を入れ灰の中で30分ほど焼く。80歳のおばあちゃんが伝統を伝えている活動だった。女性たちがこのような活動を自立的にしているのだと認識し、目を開かれた。自分たちも梅、ビワ、イチゴで果実酒を作っている。このようなものを伝えていくことが大切であると思いついた。これを自分たちの大切な伝統にしていこうと思ひ、生坂村のお焼きの話をしたらとても説得力が増すことがわかった。

<今後の展望>

日本の農協女性部の活動を見、女性大会に参加している様子を見聞きし、規模の違いはあるものの、活動内容を知ったことがラパス農協婦人部の運営を考えるうえで刺激になった。農協婦人部では農閑期の7月、週1回集まって勉強会を行う。会員は64人だが集まるのは20人程度で、全員が活発に取り組んでいるとはいえない。非会員やパラグアイ人も入れると活性化するのではないかと考えている。以前からパラグアイ人との融和が大切だと思ってきたが、これからの日系社会にとってますます大切になる。婦人部の活動にパラグアイ人も誘ってはどうかと考えている。料理はパラグアイ人との交流にも効果的であり、パラグアイ人の間で日本食への関心も高まっており、活動のなかで料理をうまく活用していきたい。

氏名	北川 勇一 (男・37歳)	職業	ラパス農協総務主任
参加コース	日系農協中堅実務者研修	2007年6月	3カ月

<要旨>日本の農協のさまざまな活動とその方法に接することで、多彩な活動のあり方のモデルがインプットされ、日系農協の活動展開にあたっての参考として機能している。

<現在の仕事>

2000年1月ラパス農協に入ってからずっとこの分野の仕事の続け13年、現在総務責任者を務める。月1回の理事会等、すべての会議の議事録を維持し、教育委員会で決められた研修の実施を手配し、販売委員会の決定に沿って行われる穀物販売の請求等事務を管理している。

<研修の成果>

研修の一環で日本の農協の活動をつぶさに見てきたことは、現在の仕事でいろいろと役立っている。具体的には、次の点が挙げられる。

- ① 農協職員がすべて行うのではなく、組合員に参加してもらって活動にすると活性化する。例えば、試験植込みの試験成果の発表を組合員に取り組んでもらう進め方を知った。できる範囲でこの方式を取り入れるよう心がけている。
- ② 何をするにも計画が重要であることを学んだ。以前は例えば教育に関して年初に計画しても、日程を決めないため、結局実行しないということがあった。企画だけでは駄目で、具体的計画に落とすことが大切であると研修で何度も聞かされ学んだ。
- ③ 魚沼農協視察で、野菜を組合員が持ち込み、農協スーパー敷地内で農協職員がセッティングし販売する市を見た。これはラパスでも応用できると思った。いずれ実行したい。
- ④ この研修で知ったさまざまな事業モデルは今後の事業展開アイデアのもとになるに違いない。

<今後の研修ニーズ>

今後の研修ニーズとして考えられるのは、次の2点である。

第一に、営農指導ノウハウ研修。農協組合員の今後の発展には既存保有土地内で展開が可能な鶏豚牛の小規模畜産を手がけることが良いが、これを促進する経営指導ノウハウが農協にない。第二に、食品加工技術研修。各農協とも課題としている農協の川下事業展開に不可欠な技術を獲得できると考えている。

総務という立場から、組合員農家と農協事業の今後の課題を研修ニーズとしてとらえている。

(フラム)

番号：P13

氏名	星 あゆみ (女・32歳)	職業	歯科医 (開業歯科及びラパス日会診療所勤務)
参加コース	保健医療歯科補綴学	2006年4月	11カ月

<要旨> 歯科医学をパラグアイで学んだ後、日系研修に参加。その成果を生かし、地域の患者の幅広いニーズに応えられるようになった。今後も専門性を広げ地域に根差す開業歯科医としての発展をめざす。

<現在の仕事>

ラパス隣町のフラムで歯科を開業。患者は非日系90%。フラム移住のウクライナ系やポーランド系を含む非日系パラグアイ人が中心。美容目的の女性の患者が大半を占める。週1回、矯正歯科専門のブラジル人歯科医に来てもらっている。ちなみに矯正はブラジルが進んでいる。

水本土の午前中はラパス日本人会診療所の歯科に勤務する。ここではほぼ全員が日系の患者で大半は治療目的。両者を合わせ、日系40%、非日系60%。平均して1日の患者数は10人程度。

<研修参加まで>

ラパス・富士地区に生まれ、2003年12月エンカルナシオンで歯学部を卒業。3か月カルメン・デル・パラナの保健センターで見習い修行。8月から再度同保健センターで歯科医として週3回勤務したのち、2005年4月からフラムの保健センターに転職した。

<研修の成果>

2006年4月から日系研修受け入れ先の大阪大学大学院歯学研究科で補綴(ほてい)学を学ぶ。歯の欠損部を治療する技術である。研修では、美容歯科需要が多いパラグアイで大いに生かせる歯科技工・補綴学の技術を習得でき、現在の歯科診療でフルに役立っている。日本の大学では、パラグアイのように手取り足取りの指導ではなく、学生が自ら求める必要があること、その分やる気を出せばどんどん教えてもらえ、チャンスを与えてもらえると知ることができた。さまざまな施設に視察に行く機会が与えられ、老人ホームでの診療を学んだことは、高齢患者も多い日本人会診療所で役立っている。

2007年4月に日系研修終了後結婚し、日系研修時に知り合った日系ブラジル人の夫が仕事をしていた関係で三重県伊賀上野村に1年住んだのち、フラムで歯科クリニックを開業した。夫はフラムの農機販売会社に勤務している。

<今後の展望>

今後も美容歯科の技法を広げて専門性を高めていきたいと考えている。まだ自身では扱っていないさまざまな素材を使う上級補綴を学ぶためブラジル人歯科医師のもとに週2回通い、3年ほどかけ習得する予定。需要が多い矯正についても習得し、治療目的、美容目的ともに高度対応できる歯科医をめざしている。

氏名	山本 由紀子 (女・33歳)	職業	エンカルナシオン日本語学校教師
参加コース	継承日本語教育教師研修 (基礎Ⅱ)	2007年11月	4カ月

<要旨> スペイン語環境が強まる日系社会。日本語教育の現場で継承日本語教育の方法論を手探りで確立しようと奮闘している。そのきっかけは日系研修だった。

<現在の仕事>

小学1年9人 (日系6、混血3)、小学2・3年合同クラス7人 (全員混血)、中学C*6人 (混血5、非日系1) を担当している。国語教育とは異なる日本語教育の手法を必要とする生徒が多い。到達目標を設定し、生徒の日本語能力と言語環境に合わせた教案を準備し、授業に取り組んでいる。授業をもたない週2日は新人教師3人の教案作成指導にもあたる。

*：中学生のクラスはA国語教育、B日本語教育、C同・在籍年数長い生徒、の区分で編成。

<システムとして未定着の日本語教育>

パラグアイ日系社会での日本語教育は、日本の文科省検定の教科書を用い、「国語」教育として進められてきた。「国語」教育は、日本語で育った子どもが日本語のあふれる環境の中で暮らしていることを前提に行われる教育であるため、日系人家庭でもスペイン語が使われることが増えてきたここ10年、外国人に教える「日本語教育」の方法の導入が必要といわれてきた。しかし、教科書を外国人用のものに変えるだけの「日本語教育」が導入され、教授法のシステムが未熟なままにとどまっていた、成果が上がってこなかった。

<研修参加まで>

大学進学のため学費を稼ぎにエンカルナシオン日本語学校に職を求めた1999年2月に、日系子弟のための日本語教育の世界に入ることとなった。いきなり国語教科書を渡され、戸惑いながら「国語」を教える教師生活が始まり、同校で教師を務めながら、夜間、エンカルナシオンの大学の会計学科に2001年に入学し、4年後に卒業。さらに経営学科を2008年に卒業した。当初は会計事務所を開くつもりだったが、日本語教師として南米のどこでも通用するプロになる道をめざしたいと考えるようになった。

<研修の成果>

2007年11月に日系研修に参加し、初めて「日本語教育」を体系立てて学ぶ。日本での「国語教育」と、「世界で行われている日本語教育」との中間に位置する「日系社会の日本語教育」。これらの違いをはっきりと理解。中間的であるがゆえの難しさを伴う「日系社会の日本語教育」のプロをめざす道があることに気づく。これを更に追求するため、いったん日本語学校を退職し、2009年1年間日本でアルバイトをしながらJICA「日系リーダー育成奨学金」を申請、それを得て、2010年4月、早稲田大学大学院に進み「南米の継承日本語教育のあり方」を研究。2012年3月修士課程を修了し5月にエンカルナシオン日本語学校に復職した。

<今後の展望>

教え方次第で子どもたちに成果があがる手応えを知り、できなかった子ができるようになるのを見るのは喜びである。地球の裏側で日本語が継承されていくのを見るのは嬉しいが、皆が進んで合理的方法を取り入れることにはならないのが世の常である。日系青年ボランティアとやりとりをすることで孤立感を緩和できた。しばらくは、教育内容の見直しと、日系の学校ならではのカリキュラム作成をめざしたい。博士課程への進学も視野に入れたい。辛抱強く「継承日本語教育」をシステムとして定着させる努力を続けたい。新人教師育成もその機会にしてほしいと考えている。

氏名	堤田 鳴美 (女・26歳)	職業	アスンシオン日本語学校教師 (幼稚園部 保育者)	
参加コース	幼児教育		2011年12月	3カ月

<要旨> 研修で学んだ幼児教育のツールを、日本語で運営される幼稚園である利点を生かし、クラス運営 (保育) にそのまま使い、役立てている事例。

<現在の仕事>

アスンシオン日本語学校幼稚園部で働き始めて5年目になる。子どもが好きで保育士になるために保育学科に入りたかったが、通学の便が悪いため諦め、会計を専攻。2013年2月に卒業し公認会計監査士の資格を取得したばかり。夜間通学しながら日中、日本語学校で保育の仕事をしてきた。

<毎日の流れ>

火水金2時～5時に年少・年中合同クラス16人、土曜日8時～12時には年中のみ14人のクラスを担当している。訪問した時はちょうど園児を送り出す時だったが、平日1時40分から子どもの受け渡しが始まる。園児はまず教室に入り自分のタオルとノート (「つうえんブック」) を取り出し自分でハンコを押す。2時に鐘がなると全校生徒・園児が中庭に集合し並ぶ。ラジオ体操、今日の歌。終わると幼稚園児のみ中庭に残り「おゆうぎ」を歌う。終わるとトイレ、手洗い後、教室に入る。2時20分～2時30分頃、教室に揃う。2時30分水を飲みたい子が飲んだあと、出席を取る。何人来たかみんな数える。「女は何人? 男は何人?」。それから、「今日のお仕事」はこれですよ、と説明し、「お仕事」を始める。切り貼り、迷路、線書きの練習、あいうえおの練習などのプリントを使う。行事があれば、節分の豆まき、ひな祭りのお雛さまの工作などを約30分やる。3時頃、自由時間。砂場に行く子、粘土遊びをする子、おもちゃで遊ぶ子など、それぞれ自由だが、同じ子とばかり遊ぶ子に「たまにはこちらとも遊ぼうね」など声をかけることも。3時半頃、お片づけ、おやつ、歯磨き。4時頃再び自由時間。4時半頃お片づけ。帰る準備に入るしるしとして、絵本を読んであげ、歌を歌う。初めて入ってきた子は、最初しばらくリズムがとれない。年少から年長共通で「今月の歌」が決めてあり、それを歌う。ひと月の歌が4つほど決めてある。2月末から「ひな祭り」、5月初め「鯉のぼり」、6月末から「七夕」などの歌。

<研修の成果>

日系研修に参加したのは保育を始めてまもない頃であった。講義ではクラス運営のさまざまな手法を学びこれが役立っている。歌、特にわらべ歌は教室で使える。空箱やトイレットペーパーの芯など廃材で園児と作るおもちゃ工作など、研修で学んだ多くをそのまま使っている。楽しみながら覚えられるテクニックとして絵カードを使って色、動物、数字などを覚える手法、やれる子とやれない子をペアに組ませるなど、運営の工夫の仕方を学んだ。学んだことで試していないものがまだある。一方、幼稚園見学はためにはなったが、環境が大きく違うので、そのままでは使えない。見学の時間を減らし、講義をもっとして欲しかった。この幼稚園に子どもを通わせる親は日本語を覚えさせたいと思っている。日本語を覚えさせるためには子どもの自主性中心ではやりにくいように感じていて、見学した幼稚園のようにはまだやっていない。入園初期のころは「おんなのこ手をあげて」だけでは通じないので“アルセン・ラス・マノス、ラス・ニャス”とスペイン語で続けて言う。そのうち日本語だけでわかるようになる。

<今後の展望>

会計の仕事も嫌いではないが、子どもが好きなので現在の仕事を続け、今後も研修で学んだことを実際に使っていきたいと考えている。園児教育の学位取得をめざすかどうかについて現在迷っている。

(アスンション)

番号：P16

氏名	池田 広美 (女・38歳)	職業	ビジュアルバ歯科ラボ歯科技工士
参加コース	歯科技工学	2009年4月	10カ月

<要旨>いったん勤務先を退職し日系研修に参加。それによって技術を高め、帰国後同じ勤務先のより高度な職に就き、報酬も上がるという事例。返済無用の奨学金制度と同じ機能を果たしている。

<現在の仕事>

アスンションの歯科技工ラボに勤務し、セラミック義歯の仕上げ（築盛・焼成）専門部署で働いている。主にアスンション圏で働く2時～3時の歯科医から入れ歯・差し歯・矯正技工の注文を受ける大手ラボ。素材と工程によって細分化された部署が設けられているが、なかでもセラミック仕上げ工程は高付加価値部門。仕上げ工程の取り扱い歯数は1日平均10数本。日系研修参加以前は上流のワックスアップ工程で働いていたが、一旦退職し研修に参加した後復職した。

<研修参加まで>

イグアス出身で、エステの美容師学校で学んだあと、アスンションで美容師として働き、その後日本で通信教育により美容師の勉強をしたが、歯科医の妹に歯科技工士について聞き興味をもち、転職を決意。2006年アスンションの歯科技工士専門学校に入学。2008年7月卒業。在学最後期の6カ月間は助手として、有床義歯レジン填入、研磨、クラウンワックスアップ、金属床研磨など歯科工作物製作のアルバイトを行った。8月、現在勤務するラボに入社。歯科技工士として、コア、メタルコーピング、メタルクラウン、ワックスアップなどの業務に取り組む。更に技術を高めるため、審美的（美容）技術が高度な日本で、セラミック歯科技工を習得したいと希望。東京医科歯科大学歯学部附属歯科技工専門学校が目的に合うことを自分で調べ、日系研修に応募した。

<研修の成果>

10カ月の日系研修を終えて帰国した2010年3月復職し、ワックスアップ、鋳造、ポーセレンクラウン、インプラント、ラミネートベニア等を担当するようになった。パラグアイでは基本的なものを大雑把にしか学んでいなかったが、研修で一つひとつの工程を何のためにやるのか、細かくかつ理論的に教えてもらったことが役立っている。例えば入れ歯の研磨。以前は漫然と行っていたが、研修では段階を分け徐々に細かく研磨する方法を学ぶ。適合もパラグアイでは目視だけでやっていたがマイクロスコープを使用。模型を作るときは石膏の収縮率計算に基づき、混合液配合量を計算。収縮率は環境（特に温度）の影響が大きい。パラグアイでは形態にあまり気を使わないが、日本では上下の咬合と横の動きを考慮し決める、など数多くの合理的できめ細かい方法、すなわち歯科医の手間を省くと同時に患者の満足度を高める方法を学ぶことができた。コストと時間の関係で、パラグアイでは応用できない方法もあるが、本来あるべき方法を理論的に知ったことは大きな財産である。器材の使い方、歯の形態などを主に活用している。研修参加・復職後、給与は増額された。

<今後の展望>

今年も日系研修を申し込んでいる。CAD/CAMを使ってインプラントを設計製作する技術の習得と審美面でのスキルアップを図るもの。より自然に違和感のない色形の見栄えをつくるため、今ある最新技術を学び、より付加価値を高めたい。帰国後は独立ラボを開きたい。ただ最低限の設備でも一式50百万グラニー（100万円）は必要で、容易でないことは分かっている。

氏名	山中 恵 (女・31歳)	職業	建築士、建築設計事務所勤務、大学建築学部助手
参加コース	技術者 (建築設計)	2008年4月	10カ月

<要旨>研修の成果を生かし、設計事務所に勤めながらアスンシオン国立大学で都市計画最終学年の指導アシスタントを行っている。今年8月からは米国での修士課程進学が決まっており、将来的にはアスンシオン大に都市計画研究室の設立をめざす。

<研修参加まで>

高校までをイグアスで過ごした後、アスンシオン国立大建築学部を卒業、パラグアイ国内のアルゼンチン系設計事務所に就職。アルゼンチンへの派遣を経て、パラグアイ国内で JICA 無償資金協力「アスンシオン大学病院移転計画」Ⅰ期に携わる。大学卒業時に一度日系研修への参加を検討したものの実現しなかったが、JICA 事業に携わったことで再度日系研修への参加を検討し、応募に至った。

<研修内容>

早稲田大学創造理工学部建築学科渡辺仁史研究室に研究生として所属。研究生は授業登録を行えないが、担当教授の厚意による授業の聴講、ゼミ・研究発表への参加等で10カ月間学んだ。渡辺教授は“建築設計のための研究”、すなわち建築企画・人間行動・環境心理等に関する研究を行っており、例えば「病院や高齢者施設を都市の中のどのような位置におくべきか」といった内容は非常に新鮮であった。他の学生が学業に取り組む姿勢にも刺激を受け、また安藤忠雄や隈研吾といった世界的に著名な建築家の講義を聴講できることなど、大学のバックアップの強さも強く印象に残った。

<帰国後～現在の仕事>

日系研修参加後、無償資金協力「アスンシオン大学病院移転計画」Ⅱ期終了時の竣工図書作成に携わり、同計画の受注者であった徳倉建設に就職。同社よりセントルシアに1年間、更にドミニカ共和国の JICA プロジェクトに1年間派遣された。

帰国後、パラグアイの設計事務所 Gonzalez Acosta & Wood に就職。建築士として平日8時～18時に勤務しており、World Trade Center の設計プロジェクト (2010年開始、2015年完成予定) を担当。プロジェクトメンバーは、チーフデザイナー、本人、他2人の建築士、エンジニアで構成され、4棟のうち2棟を担当。施工図面を約500枚描く必要があり、既にその半分以上を描いた。助手はつかずすべて自分で手がける。

また、アスンシオン国立大建築学部の都市計画最終学年のアシスタントを月曜、木曜の18時半～20時半に務める。25人の学生に対し街のデザイン (分析→問題点の発見→設計のプロセス) を指導。

研究室で学んだ研究方法、知識・視点や柔軟な発想は、現在設計事務所での仕事に生かされるとともに、大学での授業アシスタントの際にも紹介しており、学生や他の教員からも好評を得ている。

<今後の展望>

今年8月からフルブライト奨学金によりアメリカで都市計画修士課程を学ぶ。公共交通、特にアスンシオンのバスの利便性向上につながる研究を予定。パラグアイ帰国後は日本及びアメリカでの経験を踏まえ、アスンシオン大学に建築・都市計画研究室を正式に設立し、パラグアイの研究分野を盛り立てていきたい。将来的には研究への専念を希望しているが、研究に予算がつかないパラグアイでは現実的には厳しいため、当面は建築士としての仕事との両立を続ける予定。現在のパラグアイは政府が変わるごとに都市計画が塗り替えられてしまっているが、大学が変われば、一貫した都市計画をもてるようになるのではと考えている。

(アスンシオン)

番号：P18

氏名	八木 ヘンリー (男・38歳)	職業	麻酔科当直医、厚生省救急センターほか勤務
参加コース	個別研修(長期) 医学/麻酔科	2005年4月	24カ月

<要旨>慶應義塾大学医学部における臨床で、パラグアイにはない先進的な麻酔機器や薬の使用方法を多数修得した。現勤務先である厚生省救急センター及びニェンプ病院にそれらが導入される際、研修のおかげで即活用が可能になり、周囲の麻酔科医への普及にも貢献している。

<研修参加まで>

2000年にアスンシオン大医学部卒業後、JICA補助金を活用しリオデジャネイロに留学、2年間麻酔、2年間鍼灸を学び、2005年に日系研修に参加。(更に、2008年4月～2011年3月には日本財団の支援を受け千葉大学医学部救急集中治療学を修了。)

<研修の成果>

慶應義塾大学医学部麻酔科で2年間の研修。日本での臨床修練が行えたことによってパラグアイ医師会と麻酔学会に高度専門医として認定され、またパラグアイ厚生省にも麻酔専門医として認定された*。

また、臨床を通じパラグアイでは導入されていない先進的な麻酔機器や薬の使用方法を多数修得した。それらが現在の職場にも導入され、日本で使用方法を修得したためすぐに活用でき、更に周囲の麻酔科医への普及にも貢献する、ということがよくある。例えば、日本で開発された全身麻酔薬“セボフルラン”は世界で2番目に速く効く麻酔薬といわれ投与のタイミングが極めて難しい。これが最近パラグアイにも導入され、他の麻酔科医はこわがって使えないところ、日本での臨床経験があるのですぐ使えた。日本での研修内容の3割はパラグアイでも即活用できる一方、7割は先進的過ぎてまだ活用できないものであったが、パラグアイ国内の機器・薬等の導入も進歩を見せており(特に私立病院)、ここ1～2年で研修内容の5割くらいは活用できるようになる見込みである。

*現在、パラグアイ国内にも専門医の学校があるが、以前はほとんどがパラグアイ国内の医学部卒業後、ブラジルやスペイン等に留学して専門医となるための経験を積んだ。2010年に、厚生省と医師会により、200人の専門医が認定された。

<現在の仕事>

水、金曜は厚生省ニェンプ病院、土曜は厚生省救急センターに麻酔科当直医として勤務。それ以外の日はフリーの麻酔科医として、チームワークのある外科医の依頼に応じている。平均すると、ニェンプ病院では1日5件、救急センターでは8件程度の手術を担当。パラグアイでは医師全般が不足しているが、業務がハードな麻酔科医はなかでも最も不足している。(厳しい勤務条件に対し麻酔科医が運動を起こし、2011年11月より厚生省管轄の病院の麻酔科医勤務条件が改善された。これまで24時間勤務であったところが12時間勤務になり、給料は倍になった。)

<今後の展望>

日本で学んだ臨床麻酔、ペインクリニック、集中治療でのさまざまな臨床経験から得た最新技術と知識を生かしパラグアイ医師会、麻酔科学会と厚生省の発展に貢献していく。

(アスンシオン)

番号：P19

氏名	山中 渡 (男・35歳)	職業	一般外科医、アスンシオン国立大学付属病院 ほか勤務
参加コース	日系医学・内視鏡手術	2007年月	12カ月

<要旨>名古屋大学及び関連病院での臨床経験を生かし、アスンシオン大学付属病院含む3つの病院に外科医として勤務。今後、パラグアイ内でも大腸癌の早期発見が進めば、更に研修で学んだ腹腔鏡手術の手技を生かすことが可能。

<研修参加まで>

アスンシオン大医学部卒業後、1年間のインターン、3年間のレジデント*を経て、日系研修に応募。内視鏡の手技は、他にアルゼンチン、ブラジル、イタリア、スペイン等で学ぶ人も多いが、学生時代から JICA の補助金を得ていたこと、また日系研修参加者からの勧めもあり、日本で学ぶことにした。アルゼンチンで行われた学会で面識のできた名古屋大学の教授に相談したところ、自分のところで学ぶようにと言われ、研修先を名古屋大学及び関連病院とした。

*レジデント：臨床医。学びながら患者を診る立場。メルコスール（南米南部共同市場）内の動きに合わせ、インターンの後にレジデントを経ることが、義務ではないが近年パラグアイでも必ず求められる傾向になってきている。

<研修内容>

前半6カ月は第二赤十字病院、愛知県癌センターを行き来し、癌についての学習、パラグアイに多い大腸癌の回診、手術サポート、院内カンファレンスへの参加等を経験。後半6カ月は臨床修練許可を得て、第二赤十字病院内視鏡外科（腹腔鏡科）*で胆嚢摘出、大腸癌手術等の執刀も行い、連日21時～22時までの研修であった。学会にも2度ほど参加。実地経験を積めたことは非常に意義深かった。研修応募時、後の延長も可能との前提で1年の研修を申請し、研修参加中に1年の延長を申請したが、予算がないとの事情でかなわなかった。更に実地経験を多く積みたかった。

*“内視鏡”のうちの腸を診るのが腹腔鏡、胃を診るのが胃カメラ。

<現在の仕事>

アスンシオン大学附属病院の救急当直を週1日、医学部での指導を週1日、赤十字病院の外科外来を週2日、Sanatorio Italiano の外科当直を週1日務めている。1日平均2～3件の手術。一般外科に勤めているため、内視鏡以外の開腹手術も行っているが、腹腔鏡手術を行う際には日本で学んだ内容が大いに役立っている。ただ、パラグアイは日本に比し進行癌が多く、腹腔鏡では手術できない患者も多い。近年、大腸癌の早期発見のために検便の普及が指示されているため、今後腹腔鏡手術が増えていく傾向にはある。実際、10年前に比し発見が早期になってきてはいる。

日系研修参加時の日本の友人が、日本の腹腔鏡の最新情報変更等を提供してくれることも、研修の成果として役立っている点の1つである。

<今後の展望>

アスンシオン大学病院第二外科外来の病棟チーフをめざしている。現在は当直チーフであり、レジデントやインターンの外科医たちを指導する立場にあるが、更にそのうえで指導的な立場にあるのが病棟チーフ。2年ごとの院内コンクールで認められる必要があり、8年後くらいには病棟チーフになりたい。大学で研究に進むという選択肢もあるが、臨床で進みたい。病棟チーフになれば更に日本で学んだことを普及し、生かすことができる。

付 属 資 料

1. 県別充足率等の経年推移
2. 質問票様式（和文のみ）
3. アンケート（個人用）集計結果 <ブラジル>
4. アンケート（個人用）集計結果 <パラグアイ>

1. 県別充足率等の経年推移

平成24年度日系研修 採択案件一覧

都道府県	提案団体	データ	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	総計	
北海道	酪農学園大学	提案件数			3	7	5	4	5	5	5	34	
		受入人数			6	12	8	11	11	11	13	73	
		参加者数 充足率(%)			0.0	16.7	33.3	25.0	27.3	9.1	23.1	20.5	
	北海道医療大学	提案件数			6	6	6	6	3	3	1	31	
		受入人数			6	6	6	6	4	4	4	34	
		参加者数 充足率(%)			66.7	50.0	0.0	33.3	0.0	0.0	50.0	29.4	
	桑園学園 札幌情報未来専門学校	提案件数				3	3	5	4				15
		受入人数				6	6	10	8				30
		参加者数 充足率(%)				66.7	16.7	0.0	0.0				16.7
	徳洲会 札幌東徳洲病院	提案件数				1	1	5	4		3	2	15
		受入人数				7	7	9	9		6	2	33
		参加者数 充足率(%)				0.0	0.0	22.2	22.2	33.3	0.0	0.0	18.2
	札幌医科大学	提案件数				2	2	2	2	2	2	2	12
		受入人数				2	2	2	2	2	2	2	12
		参加者数 充足率(%)				50.0	0.0	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0	25.0
	帯広畜産大学	提案件数			2	1	2	2	2	1	1	1	9
		受入人数			2	2	5	7	7	3	3	3	22
		参加者数 充足率(%)			0.0	0.0	80.0	14.3	0.0	0.0	0.0	0.0	22.7
	谷内学園 北海道文化服装専門学校	提案件数				2	2	2	2	2			8
		受入人数				6	6	4	8				24
		参加者数 充足率(%)				33.3	50.0	50.0	0.0				29.2
	北海道日建設計	提案件数			1	1	1	1	1	1	1	1	7
		受入人数			2	2	2	2	2	2	1	2	13
		参加者数 充足率(%)			50.0	100.0	50.0	0.0	100.0	100.0	100.0	100.0	69.2
	吉田学園 情報ビジネス専門学校	提案件数				1	1	1	1	1	1	1	6
		受入人数				2	3	3	3	4	4	4	19
		参加者数 充足率(%)				100.0	33.3	66.7	100.0	125.0	125.0	125.0	94.7
	天使大学	提案件数			1	1	1	1	1	1	1		6
		受入人数			2	2	2	2	2	2	2		12
		参加者数 充足率(%)			0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		0.0
	北海道教育大学	提案件数					5	1					6
受入人数						9	2					11	
参加者数 充足率(%)						11.1	0.0					9.1	
北海道大学	提案件数				1	1	1	2	1	1		6	
	受入人数				2	2	2	4	2	2		12	
	参加者数 充足率(%)				0.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0		8.3	
光塩学園 調理製菓専門学校	提案件数					1	1	1	1	1	1	5	
	受入人数					2	2	2	4	4	4	14	
	参加者数 充足率(%)					50.0	0.0	100.0	50.0	25.0	25.0	42.9	
HARP	提案件数			1	1	1	1					4	
	受入人数			2	2	2	2					8	
	参加者数 充足率(%)			0.0	0.0	0.0	50.0					12.5	
札幌理工学院	提案件数				1	1	1	1	1			4	
	受入人数				2	5	5	5				17	
	参加者数 充足率(%)				50.0	20.0	20.0	0.0				17.6	
北海道文化服装専門学校	提案件数			1						2	1	4	
	受入人数			2						8	2	12	
	参加者数 充足率(%)			50.0						25.0	50.0	33.3	
十勝農業協同組合連合会	提案件数							1	1	1		3	
	受入人数							4	4	2		10	
	参加者数 充足率(%)							0.0	0.0	0.0		0.0	
八紘学園 北海道農業専門学校	提案件数							1	1	1		3	
	受入人数							2	2	2		6	
	参加者数 充足率(%)							0.0	0.0	0.0		0.0	
北海道農業協同組合、学校	提案件数					1	1	1	1			3	
	受入人数					2	2	2	2			6	
	参加者数 充足率(%)					50.0	50.0	0.0				22.2	
オホーツク業種別協同組合等	提案件数			2								2	
	受入人数			8								8	
	参加者数 充足率(%)			0.0								0.0	
札幌ソフトウェア専門学校	提案件数			2								2	
	受入人数			4								4	
	参加者数 充足率(%)			50.0								50.0	
札幌市立大学	提案件数					1	1					2	
	受入人数					2	2					4	
	参加者数 充足率(%)					0.0	0.0					0.0	

都道府県	提案団体	データ	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	総計	
北海道	北海道大学大学院	提案件数								1	1	2	
		受入人数								2	2	4	
		参加者数 充足率(%)								0.0	50.0	25.0	
	北星学園大学	提案件数								1	1		2
		受入人数								2	2		4
		参加者数 充足率(%)								0.0	0.0		0.0
	ディー・ショット	提案件数									1		1
		受入人数									2		2
		参加者数 充足率(%)									0.0		0.0
ディー・ディー侑	提案件数								1			1	
	受入人数								2			2	
	参加者数 充足率(%)								0.0			0.0	
吉田学園 電子専門学校	提案件数			1								1	
	受入人数			2								2	
	参加者数 充足率(%)			2								2	
全国建設研修センター附属 札幌理工学院	提案件数										1	1	
	受入人数										4	4	
	参加者数 充足率(%)									0.0		0.0	
北海道大学院	提案件数						1					1	
	受入人数						2					2	
	参加者数 充足率(%)						0.0					0.0	
北方圏センター	提案件数								1			1	
	受入人数								2			2	
	参加者数 充足率(%)								0.0			0.0	
神奈川県	海外日系人協会	提案件数		10	17	17	15	21	19	18	117		
		受入人数		56	118	119	103	100	92	86	674		
		参加者数		42	58	67	74	60	55	58	414		
		充足率(%)		75.0	49.2	56.3	71.8	60.0	59.8	67.4	61.4		
	横浜国立大学	提案件数				2	2	2	2		1	9	
		受入人数				2	2	2	2		1	9	
		参加者数				1	1	1	1			2	
		充足率(%)				50.0	0.0	50.0	0.0		0.0	22.2	
	横浜国立大学大学院	提案件数					1	1	3	1	2	8	
		受入人数					2	2	8	4	7	23	
		参加者数					1	1	1	1	1	4	
		充足率(%)					50.0	0.0	12.5	25.0	14.3	17.4	
	横浜グランドインターコンチネンタルホテル	提案件数		1	1	1	1	1	1	1	1	7	
		受入人数		2	2	1	1	1	1	1	1	9	
		参加者数		1	1	1	1	1	1	1	1	5	
		充足率(%)		50.0	50.0	0.0	100.0	100.0	100.0	100.0	0.0	55.6	
	岩崎学園 情報科学専門学校	提案件数		1	1	1	1	1	1	1	1	7	
		受入人数		5	5	5	5	4	4	4	4	32	
		参加者数		2	2	2	2	1	2	2	2	11	
		充足率(%)		40.0	40.0	0.0	40.0	25.0	50.0	50.0	50.0	34.4	
横浜国立大学大学院	提案件数		2								4	6	
	受入人数		2								6	8	
	参加者数		1								3	4	
	充足率(%)		50.0								50.0	50.0	
国連総合大学高等研究所	提案件数					5	1					6	
	受入人数					10	2					12	
	参加者数					1	1					1	
	充足率(%)					10.0	0.0					8.3	
昭和大学横浜市北部病院	提案件数					1	2		2			5	
	受入人数					2	6		5			13	
	参加者数					2	1					3	
	充足率(%)					100.0	16.7		0.0			23.1	
海外日系人協会、 大学・研究所・民間企業等	提案件数			4								4	
	受入人数			20								20	
	参加者数			19								19	
	充足率(%)			95.0								95.0	
海外通信・放送コンサルティング協力	提案件数									3		3	
	受入人数									8		8	
	参加者数									1		1	
	充足率(%)									12.5		12.5	
順天堂大学	提案件数									1	1	2	
	受入人数									2	2	4	
	参加者数									1	1	2	
	充足率(%)									50.0	50.0	50.0	
海外日系人協会、 大学・研究所・医療機関など	提案件数			1								1	
	受入人数			5								5	
	参加者数			6								6	
	充足率(%)			120.0								120.0	

都道府県	提案団体	データ	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	総計	
大阪	関西医療大学	提案件数				2	2	2	2	2	2	12	
		受入人数				4	3	4	4	3	3	21	
		参加者数				2	1	3	4	3	3	16	
		充足率(%)				50.0	33.3	75.0	100.0	100.0	100.0	76.2	
	太平洋人材交流センター	提案件数			5	3	2	1					11
		受入人数			6	8	4	3					21
		参加者数			2	1	3						6
		充足率(%)			33.3	12.5	75.0	0.0					28.6
	大阪大学大学院	提案件数			1	1	2	1	2	2	2		9
		受入人数			1	1	3	2	4	3	3		14
		参加者数			2	1	1	1		1	1		5
		充足率(%)			200.0	100.0	33.3	0.0	0.0	33.3			35.7
	そうそうの社、 地域生活支援センター あ・うん	提案件数				2	2	1					5
		受入人数				2	4	2					8
		参加者数				2	2	1					3
		充足率(%)				100.0	0.0	50.0					37.5
WING-路をはこぶ	提案件数					1	1	1	1	1		4	
	受入人数					1	6	2	2	2		11	
	参加者数					1	1	1	1			3	
	充足率(%)					100.0	16.7	50.0	0.0			27.3	
そうそうの社	提案件数								1	1	1	3	
	受入人数								2	2	2	6	
	参加者数												
	充足率(%)								0.0	0.0	0.0	0.0	
大阪工業大学	提案件数								1	1	1	3	
	受入人数								2	2	2	6	
	参加者数								2	2	1	5	
	充足率(%)								100.0	100.0	50.0	83.3	
大阪福祉事業財団	提案件数								1	1	1	3	
	受入人数								2	2	2	6	
	参加者数								1	1	1	2	
	充足率(%)								50.0	0.0	50.0	33.3	
NTTネオメイト	提案件数				2							2	
	受入人数				4							4	
	参加者数				1							1	
	充足率(%)				25.0							25.0	
NTTネオメイト関西	提案件数			2								2	
	受入人数			4								4	
	参加者数												
	充足率(%)			0.0								0.0	
関西鍼灸大学	提案件数			2								2	
	受入人数			4								4	
	参加者数			3								3	
	充足率(%)			75.0								75.0	
太平洋人材交流センター、 助産婦・母子保健センター	提案件数			1								1	
	受入人数			2								2	
	参加者数			1								1	
	充足率(%)			50.0								50.0	
大阪女子短期大学	提案件数									1		1	
	受入人数									4		4	
	参加者数												
	充足率(%)									0.0		0.0	
東京	ラテンアメリカ技術交流センター	提案件数		3		2	4	4	4				17
		受入人数		8		7	7	9	9				40
		参加者数		5		5	4	1	5				20
		充足率(%)		62.5		71.4	57.1	11.1	55.6				50.0
	東京農業大学	提案件数								4	5	3	12
		受入人数								6	8	5	19
		参加者数									2	1	3
		充足率(%)								0.0	25.0	20.0	15.8
	文化学園 文化服装学院	提案件数		1		1	1	1	1	1	1	1	7
		受入人数		2		2	2	1	1	1	1	1	10
		参加者数		1		1	1	1	1	1	1	1	5
		充足率(%)		50.0		0.0	50.0	100.0	100.0	100.0	0.0	100.0	50.0
	至誠学舎立川 至誠ホーム	提案件数		1			1	1	1	1	1	1	6
		受入人数		1			1	1	1	1	1	1	6
		参加者数		1			1	1	1	1	1	1	5
		充足率(%)		100.0			100.0	100.0	0.0	100.0	100.0	100.0	83.3
国際連合工業開発機構 東京投資・技術移転促進事務所	提案件数				1	1	1	1	1			4	
	受入人数				3	3	4	4				14	
	参加者数				2	2	4					8	
	充足率(%)				66.7	66.7	100.0	0.0				57.1	
ひまわりの会、 東京都知的障害育成会等	提案件数					1						1	
	受入人数					3						3	
	参加者数					1						1	
	充足率(%)					33.3						33.3	
ひまわりの会、 なごみ福祉会、 順源会など	提案件数			1								1	
	受入人数			3								3	
	参加者数			2								2	
	充足率(%)			66.7								66.7	
東京農工大学	提案件数										1	1	
	受入人数										7	7	
	参加者数												
	充足率(%)										0.0	0.0	

都道府県	提案団体	データ	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	総計	
茨城	農民教育協会 鯉洲学園農業栄養専門学校	提案件数			4	4	3	2	5	4	3	25	
		受入人数			7	9	6	4	6	5	3	40	
		参加者数			5	2	3	1	3		2	16	
		充足率(%)			71.4	22.2	50.0	25.0	50.0	0.0	66.7	40.0	
	筑波大学	提案件数			5	4	4				1	1	15
		受入人数			16	8	9				3	3	39
		参加者数			5	4	2						11
	充足率(%)			31.3	50.0	22.2				0.0	0.0	28.2	
	筑波大学大学院	提案件数					1	1					2
		受入人数					5	6					11
参加者数					5	4						9	
充足率(%)						100.0	66.7					81.8	
ひまわりの会、 茨城県立医療大学等	提案件数					1						1	
	受入人数					3						3	
参加者数						2						2	
充足率(%)						66.7						66.7	
広島	ひろしま国際センター、 広島県立障害者リハビリテーションセンター	提案件数			4	1	1	1	5	6	6	24	
		受入人数			4	1	1	1	7	12	12	38	
		参加者数			1			1	4	2	2	10	
		充足率(%)			25.0	0.0	0.0	100.0	57.1	16.7	16.7	26.3	
	広島大学	提案件数			5	4	2	1					12
		受入人数			9	5	3	6					23
		参加者数			5	1							6
	充足率(%)			55.6	20.0	0.0	0.0					26.1	
	ひろしま国際センター、 (独)酒類総合研究所 環境保全研究室	提案件数			1								1
		受入人数			1								1
参加者数												0.0	
充足率(%)				0.0								0.0	
広島大学大学院	提案件数								1			1	
	受入人数								1			1	
参加者数												0.0	
充足率(%)									0.0			0.0	
千葉	千葉大学	提案件数				1	2	2	4	3	3	15	
		受入人数				2	6	5	6	6	5	30	
		参加者数					1	1	1		1	4	
		充足率(%)				0.0	16.7	20.0	16.7	0.0	20.0	13.3	
	海外職業訓練協会	提案件数							2	3	2	7	
		受入人数							14	18	20	52	
		参加者数							14	10	14	38	
	充足率(%)							100.0	55.6	70.0	73.1		
	八千代市	提案件数				1							1
		受入人数				2							2
参加者数				2								2	
充足率(%)				100.0								100.0	
福岡	NTTネオメイト九州	提案件数			3	4						7	
		受入人数			3	7							10
		参加者数			1	1							1
		充足率(%)			0.0	14.3							10.0
	北九州国際技術協力協会	提案件数				2	1	1	1	1	1	1	7
		受入人数				11	5	5	6	6	6	6	39
		参加者数				3	3	4	6	5	6	6	27
	充足率(%)				27.3	60.0	80.0	100.0	83.3	100.0	100.0	69.2	
	九州大学	提案件数			1	1							2
		受入人数			1	2							3
参加者数												0.0	
充足率(%)			0.0	0.0								0.0	
石川	金沢大学	提案件数			1	1	1	1	1	1	1	7	
		受入人数			2	2	2	2	2	2	2	14	
		参加者数			1	1	1	1	1	1	1	4	
		充足率(%)			50.0	50.0	50.0	50.0	0.0	0.0	0.0	28.6	
石川県立看護大学、 羽咋市社会福祉協議会	提案件数			1	1	1	1	1	1	1	1	7	
	受入人数			4	4	4	6	4	4	4	4	30	
参加者数				4	4	2	4	1	4	4	19		
充足率(%)			0.0	100.0	100.0	33.3	100.0	25.0	100.0	100.0	63.3		
群馬	群馬県	提案件数				2	1	2				5	
		受入人数				2	1	2				5	
		参加者数				1	1	1				3	
		充足率(%)				50.0	100.0	50.0					60.0
	多言語教育研究所	提案件数							2	2	1	5	
		受入人数							2	2	1	5	
	参加者数								1		1	1	
	充足率(%)							0.0	50.0	0.0	20.0		
	群馬県及び県教育委員会	提案件数			1								1
		受入人数			2								2
参加者数			1								1		
充足率(%)			50.0									50.0	
群馬県太田市教育委員会	提案件数				1							1	
	受入人数				5							5	
参加者数												0.0	
充足率(%)				0.0								0.0	
群馬県大泉町(国際政策課)	提案件数			1								1	
	受入人数			2								2	
参加者数			2									2	
充足率(%)			100.0									100.0	
宮崎	宮崎大学	提案件数			5	1		1	1	1	1	10	
		受入人数			5	5		3	3	3	2	21	
		参加者数			1	1		1				3	
		充足率(%)			20.0	20.0		33.3	0.0	0.0	0.0	14.3	

都道府県	提案団体	データ	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	総計	
山梨	キープ協会	提案件数			1	1	2	1	2	2	1	10	
		受入人数			1	2	4	2	2	2	2	14	
		参加者数 充足率(%)			100.0	0.0	25.0	50.0	50.0	0.0	100.0	35.7	
鹿児島	鹿児島大学	提案件数					2	2	1	2	2	9	
		受入人数					4	3	2	6	6	21	
		参加者数 充足率(%)					50.0	0.0	0.0	50.0	33.3	0.0	23.8
山口	山口大学	提案件数				1		1	1	4	1	8	
		受入人数				1		1	1	8	1	12	
		参加者数 充足率(%)				0.0		100.0	0.0	12.5	100.0	25.0	
兵庫	兵庫県国際交流協会	提案件数						1	2	1	1	5	
		受入人数						2	3	1	1	7	
		参加者数 充足率(%)						0.0	0.0	100.0	0.0	14.3	
	神戸海星病院	提案件数							1	1		2	
		受入人数							1	1		2	
		参加者数 充足率(%)							100.0	0.0		50.0	
富山	富山県高岡市	提案件数						1	1	1		3	
		受入人数						3	3	3		9	
		参加者数 充足率(%)						0.0	0.0	0.0		0.0	
	富山県高岡市 教育委員会	提案件数				1	1					2	
		受入人数				3	2					5	
		参加者数 充足率(%)				66.7	0.0					40.0	
	高岡市教育委員会	提案件数			1							1	
		受入人数			3							3	
		参加者数 充足率(%)			0.0							0.0	
京都	京都橘大学	提案件数							1	1		2	
		受入人数							2	2		4	
		参加者数 充足率(%)							0.0	0.0		0.0	
		提案件数				1							1
	京都コンピュータ学院、 京都情報大学院大学	受入人数				10						10	
		参加者数 充足率(%)				0.0						0.0	
		提案件数			1								1
		受入人数			2								2
	京都大学	参加者数 充足率(%)			50.0							50.0	
		提案件数							1				1
		受入人数							1				1
		参加者数 充足率(%)							0.0				0.0
沖縄	日本国際協力センター	提案件数						1	1			2	
		受入人数						6	6			12	
		参加者数 充足率(%)						0.0	0.0			0.0	
		提案件数				1							1
	沖縄県看護協会	受入人数				8						8	
		参加者数 充足率(%)				62.5						62.5	
		提案件数			1								1
		受入人数			8								8
	沖縄県看護協会、 沖縄県総合福祉センター等	参加者数 充足率(%)			62.5							62.5	
		提案件数								1			1
		受入人数								6			6
		参加者数 充足率(%)								100.0			100.0
宮城	宮城県	提案件数											
		受入人数											
		参加者数 充足率(%)											
		提案件数				1							1
	宮城県 丸森町 丸森町農業創造センター	受入人数				1						1	
		参加者数 充足率(%)				0.0						0.0	
		提案件数								1			1
		受入人数								1			1
	東北大学大学院	参加者数 充足率(%)							0.0			0.0	
		提案件数											
		受入人数								4			4
		参加者数 充足率(%)								0.0			0.0
岡山	岡山大学大学院	提案件数						2				2	
		受入人数						12				12	
		参加者数 充足率(%)						0.0				0.0	
	岡山大学	提案件数									1	1	
		受入人数									1	1	
		参加者数 充足率(%)									0.0	0.0	

都道府県	提案団体	データ	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	総計
熊本	八代市	提案件数 受入人数 参加者数 充足率(%)						1 2 2 100.0		1 2 0.0		2 4 2 50.0
	八代市と八代市医師会	提案件数 受入人数 参加者数 充足率(%)							1 2 0.0			1 2 0.0
滋賀	滋賀県放射線技師会	提案件数 受入人数 参加者数 充足率(%)							1 2 0.0	1 2 0.0	1 2 0.0	3 6 0.0
徳島	徳島大学大学院	提案件数 受入人数 参加者数 充足率(%)						1 1 0.0	1 1 100.0			2 2 1 50.0
	徳島大学	提案件数 受入人数 参加者数 充足率(%)									1 1 1 100.0	1 1 1 100.0
愛知	ソクナ総合研究所	提案件数 受入人数 参加者数 充足率(%)			1 1 1 100.0	1 1 1 100.0						2 2 2 100.0
高知	高知県 田中整形外科医院	提案件数 受入人数 参加者数 充足率(%)						1 1 1 100.0				1 1 1 100.0
	高知女子大学	提案件数 受入人数 参加者数 充足率(%)						1 6 0.0				1 6 0.0
佐賀	佐賀県玄海水産振興センター	提案件数 受入人数 参加者数 充足率(%)			1 1 1 100.0							1 1 1 100.0
山形	山形県(文化環境部)、 山形大学医学部	提案件数 受入人数 参加者数 充足率(%)				1 1 1 100.0						1 1 1 100.0
島根	島根県	提案件数 受入人数 参加者数 充足率(%)								1 1 1 100.0		1 1 1 100.0
(空白)	(空白)	提案件数 受入人数 参加者数 充足率(%)	79 124 124 100.0	80 132 132 100.0								159 256 256 100.0

2. 質問票様式（和文のみ）

日系研修に関するアンケート（個人用）

質問 1) 日系研修をご存知でしたか？

- a よく知っていた b ある程度知っていた c あまり知らなかった d 知らなかった

質問 2) 日系研修の募集要項を見ますか？

- a よく見る b 時々見る（⇒ 質問 2-1 にお答えください）
c あまり見ない d 見たことがなかった（⇒ 質問 3 にお進みください）

質問 2-1) おもにどこで見ますか？

- a 日本語新聞 b JICA ウェブサイト c 日系関連団体からの案内 d その他（_____）

質問 3) 日系研修に参加したことがありますか？

- a ある（⇒ 質問 4-A にお進みください）
b ない（⇒ 質問 4-B にお進みください）

質問 4-A) 日系研修に参加したことがある方におたずねします。

質問 4-A-1) いままで受けた日系研修について下表に記入してください。

番号	コース名	開始年月	期間	実施機関
①		年 月	カ月	
②		年 月	カ月	
③		年 月	カ月	

質問 4-A-2) 日系研修は役立ちましたか？ 複数受けられた場合は全体としてどうでしたか？

- a 大変役に立った b 役に立った c 普通 d 役に立たなかった

質問 4-B) 日系研修に参加しなかった理由は次のどれですか？（複数回答可）

- a 日系研修の存在を知らなかった
b 応募したいコースがなかった
c 応募したいコースはあったが応募時点では予定を立てられなかった
d 応募したいコースはあったが研修期間が長すぎた
e 応募したいコースはあったが時期が合わなかった
f 応募したいコースはあったが参加要件を満たせなかった
g その他：_____

質問 5) どのような研修があれば参加したいですか？または知人に参加をすすめたいですか？

分野・テーマ・内容、研修期間、申込時期、実施方法などについて要望とその理由を教えてください。（複数回答可）

5-1 該当する分野を丸で囲んでください。

- a 社会保障（福祉含む） b 保健医療 c 農業・農村開発 d 自然環境保護

e 産業技術 f 日本語教育 g その他 ()

研修テーマや内容等について具体的な要望があれば、以下ご記入ください。

5-2)テーマ・内容：
5-3)理由 ：

質問 6) 研修員の募集期間の長さについてお答えください。

a 長すぎる b 長い c ちょうどよい d 短い e 短すぎる

質問 7) より多くの方に日系研修に応募いただくためにご意見があれば教えてください。

--

最後にあなたについて教えてください。この情報は今回の調査目的以外には一切使いませんので、ご安心ください。

お名前： _____ 性別： _____ 年齢： _____

ご職業： _____

(お仕事の業種や内容が分かるよう、また、お勤めの場合は勤務先、職位を、学生の場合は大学/院名、学部・専攻をご記入ください)

最終学歴： _____

出身地： _____ (Ciudad/Cidade までで結構です)

現在の居住地： _____ (Ciudad/Cidade までで結構です)

連絡先：メールアドレス： _____

電話番号： _____

(連絡先はご回答内容を確認させていただく必要がある場合にのみ使用するものです)

ご協力ありがとうございました。

日系研修に関する補足質問（個人用）

この質問票はJICA調査団によるインタビューの対象となった帰国日系研修者の方々をお願いするものです。別にお配りしている「日系研修に関するアンケート（個人用）」にお答えになられた後、次の質問にお答えください。

お名前（確認用）： _____

質問 8) 過去 5 年間の職業と仕事の内容をご記入ください。

	勤務先	役職	期間	仕事の内容
①			年 月から 年 月まで (カ月間)	
②			年 月から 年 月まで (カ月間)	
③			年 月から 年 月まで (カ月間)	

質問 9) 日系研修で学んだ事は過去または現在の職業で役に立っていますか。

- a 大変役に立っている b まあまあ役に立っている
c あまり役に立っていない d 全く役に立っていない

a または b と答えた方は、どのように役に立っているかを具体的に教えてください。

c または d と答えた方は、なぜ役に立っていないか、その理由を教えてください。

質問 10) 日系研修に参加したことで、その他に役立ったと思われる事がありますか。

- a ある b ない

a と答えられた方は、どのような点で役に立っているか、教えてください。

質問 11)今後のご自身のキャリアプランについて、希望または展望を教えてください。

質問 12)日系研修または JICA への要望がありましたら、ご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

日系研修に関する質問票（団体用）

質問 1) 貴団体の概要について下の欄にご記入ください。

1.1 団体名		1.2 設立	西暦 年 月
1.3 団体目的			
1.4 役職員数 (学校も含む すべての団 体)	人	1.5 教員数 (学校の場合のみ)	人
		内 1.5.1 日系人	人
		1.5.2 日本からの派遣	人
1.6 会員数/加入団体・社数/生徒数		人/世帯/団体/社	備考(あれば)：
内 1.6.1 日系		人/世帯/団体/社	
内 1.6.2 日系以外		人/世帯/団体/社	
1.7 貴団体の役職員・会員・教員及びその 家族・従業員を含む日系人の総人数		人 (概数でも結構です)	
1.8 活動概要			

質問 2) 貴団体およびその関係者の動向について教えてください。

質問 2-1) 上の質問 1 で答えていただいた項目について、過去 10 年程度の変化の概略とその背景を簡単に教えて下さい。特段の変化がないものは空白でも結構です。

項目	変化の概略/傾向	背景
2.1.1 団体目的		
2.1.2 役職員数		
2.1.3 教職員数、内数 (学校の場合のみ)		
2.1.4 会員数/加入団 体・社数/生徒数、内日 系数		
2.1.5 関係日系人総数		
2.1.6 活動内容		

質問 2-2) 貴団体の会員や生徒および関係する日系人 (質問 1.7 の日系人) における最近 10 年程度社会的経済的状況の変化とその背景について教えてください (例: 会員の高齢化、世代の交代、好況や就職難、日本語能力の低下、などといった点)。上表(2-1)と重複する点がでてきますが、ここでは「社会的経済的状況の変化とその背景」に焦点を当て、やや詳細に教えてください。

質問 2-3) 貴団体や関係する日系の方々の今後想定される動向や課題について簡単にコメントしてください。

質問 2-4) 上記を踏まえて、JICA にどんなことを期待しますか？

質問 3) 日系研修についておたずねします。

質問 3-1) 日系研修と貴団体とのかかわりとその理由をごく簡単に教えてください。

3.1.1 会員や教員等関係者に研修案内をしていますか？

a 大抵している b 時々している c 殆どしない d したことがない

その理由： _____

3.1.2 適切と思われる研修がある場合、該当者に参加を勧めていますか？

a 大抵している b 時々している c 殆どしない d したことがない

その理由： _____

3.1.3 貴団体に関係する帰国研修員が貴団体の他の会員、教員など関係者に対し報告する会を設けていますか？

a 大抵している b 時々している c 殆どしない d したことがない

その理由： _____

3.1.4 その他日系研修に係る活動があれば、それは何ですか？

その理由： _____

質問 3-2) 貴団体および加入団体にとって日系研修はどのような意義がありますか？

a 極めて重要で意義深い b 重要で意義深い c 一定の重要性・意義がある d あまりない

3.2.2 その背景・理由： _____

質問 3-3) 貴団体の会員や教員等関係者が日系研修に参加されている場合、日系研修は貴団体や加入団体に役立っていますか？

a 殆どすべて大いに役立っている b バラツキはあるが概ね役立っている

c あまり役立っていない場合が結構ある d 参加していない

3.2.2 その背景・理由： _____

質問 3-4) 日系研修の成果が帰国後発揮されている場合とそうでない場合の要因について、お気づきの点があれば教えてください。

3.4.1 優良事例の要因は？ _____

3.4.2 役立っていない場合の要因は？ _____

質問 3-5) どのような研修があれば会員や教員等関係者に参加してもらいたいですか？

テーマ・内容、研修期間、申込時期、実施方法などについて要望とその理由を教えてください。

要望	理由

質問 3-6) 日系研修に応募しようとする場合、日本語ができないのであきらめる日系人がいますか？

- a けっこういる b ある程度いる
c あまりいない d ほとんどいない

質問 3-7) そのほかより多くの方に日系研修を活用してもらうためにご意見があれば教えてください。

--

質問 4) 団体の性格別におたずねします。下記分類の中で一番近いと思われる分類に応じてお答えください。

4.1 生活系（日本人会、県人会、互助会等）

4.1.1 会員/会員世帯の世代構成（おおよその推定で結構です）

1 世	2 世	3 世	4 世以降	合計
%	%	%	%	100%

4.2 農協系

4.2.1 会員農家もしくは会員農協傘下の農家で農業経営に中心的に携わっていらっしゃる方の年齢分布（おおよその推定で結構です）

～30 代	40 代	50 代	60 代	70 代～	合計
%	%	%	%	%	100%

4.3 経済系および医師会系（商工会議所、医師会等）

4.3.1 会員企業（会員医師）の業種（診療専門分野）構成の特色

国全体における構成と比較して：

4.3.1.1 多い業種（専門分野）： _____

4.3.1.2 少ない業種（専門分野）： _____

4.3.1.3 上記構成上の特色の背景： _____

4.4 日本語系（日本語学校等）

4.4.1 日系人の日本語水準向上のための課題： _____

ご回答者のご役職および氏名： _____

連絡先：（メールアドレス） _____ （電話番号）： _____

ご協力ありがとうございました。

3. アンケート（個人用）集計結果 <ブラジル>

アンケート（個人用）集計結果 <ブラジル>

1 質問票配布・回収方法・回収率、データの取り扱い

2008年から2012年に帰国した日系研修員を中心として375名に対し、JICA サンパウロ出張所から質問票を電子メールにて送信し、電子メールによる返信により243部を回収（回収率64.8%）。そのうち、締め日までにポルトガル語和訳が終了した回答計126部を集計対象とした（回収・集計率33.6%）。回答のポルトガル語は和訳。記載内容の妥当性（コース名、時期、実施機関、ほか）に関し、明白な誤記・誤字以外は修正を施さず、元記載通りに転載。なお、無回答は母数に算入せず、構成比を計算。

2 集計結果

回答者年齢 平均 39.4歳

回 答	人数	構成比 (%)
20代	36	30
30代	31	25
40代	23	19
50代	25	20
60代以上	7	6
合 計	122	100

性別	構成比 (%)
男	32
女	68

質問 1) 日系研修をご存知でしたか？

回 答	構成比 (%)
a よく知っていた	27
b ある程度知っていた	44
c あまり知らなかった	22
d 知らなかった	7
合 計	100

質問 2) 日系研修の募集要項を見ますか？

回 答	人数	構成比 (%)
a よく見る	24	19
b 時々見る	75	60
c あまり見ない	21	17
d 見たことがなかった	5	4
合 計	125	100

質問 2-1) おもにどこで見ますか？

回 答	利用数	利用比 (%)
a 日本語新聞	4	3
b JICA ウェブサイト	61	44
c 日系関連団体からの案内	39	28
d その他	34	25
合 計	138	100

質問 2-1 「d その他」の内容

インターネット、友人、加入している組合に JICA から送られてきたポスターによって、文部省、サンパウロ大学、カンピナス大学などのサイト、友人、大学の留学制度などに関係ある人々、Google、e メール、JICA サンパウロ支所、研修広報の JICA からのメール、Asebex/他の研修生 OB からの連絡。

質問 2-1 「d その他」の内容 (続き)

研修に関するお知らせメール、CAMTA の会報、イベント、講演会、祭り、インターネットの社交ネット、領事館のサイト、融資機関、領事館のサイト、日系人協会、ブログ、フェースブック、奨学金制度がある機関のサイト、Asebex のフェースブック、研修生 OB の情報、JICA が時々送ってくれるメールで研修のことを知る(特にマルガリダ様から)。メールを受け取るとすぐできるだけ多くのマツグロツ州の人々に転送し、ニッポの会館の掲示板に研修に関するお知らせを貼るようにしている、日本語センターの会報、CBLJ-日本語センター。

質問 3) 日系研修に参加したことがありますか?

回 答	構成比 (%)
a ある	96
b ない	4
合 計	100

質問 4-A-2) 日系研修は役立ちましたか?

回 答	人数	構成比 (%)
a 大変役に立った	97	82
b 役に立った	20	17
c 普通	2	2
d 役に立たなかった	0	0
合 計	119	100

質問 4-B) 日系研修に参加しなかった理由 (ブラジル)

回 答	選択数	選択率 (%)
a 日系研修の存在を知らなかった	0	0
b 応募したいコースがなかった	0	0
c 応募時点では予定を立てられなかった	2	40
d 研修期間が長すぎた	0	0
e 時期が合わなかった	3	60
f 参加要件を満たせなかった	2	40
g その他	0	0
未参加者数	5	—

質問 5-1) 参加したい研修の分野

回 答	出現比 (%)
a 社会福祉	8
b 保健医療	24
c 農業・農村開発	11
d 自然環境保護	11
e 産業技術	8
f 日本語教育	16
g その他	23
合 計	100

質問 6) 研修員の募集期間の長さ

回 答	人数	構成比 (%)
a 長すぎる	2	2
b 長い	4	3
c ちょうどよい	85	73
d 短い	21	18
e 短すぎる	5	4
合 計	117	100

(5-1, g その他の内容)

経営学、デジタル事業、広告業、経営学、食品学、数学、教育、文化、人権、老人学、国際ビジネス、イノベーション、鉱山業+地下道、料理、教育・科学、会社経営／経営学、生物情報科学、神経科学、鉱物資源並びに油田開発、人文科学の分野、衛生・環境工学に関する技術、企業経営学・ホテル経営学・人材管理、心理学－外国人への対応、日本伝統文化、日本の教育制度、調理学、日系団体の継続並びに若者の参加の重要性、音楽教育、通訳、経営分野（商業、物流システム、プロジェクト、貿易）、養殖業、国際協力、研究者並びに地域リーダーの育成、日本語、文芸、文化の学習、コンピュータ技術、オートメーション、工学、研究、教育、グラフィックデザイン－美術、国際協定、ジョイントベンチャー、デザイン、美術、ペット/人間の友となる動物。

4. アンケート（個人用）集計結果 <パラグアイ>

アンケート（個人用）集計結果 <パラグアイ>

1 質問票配布・回収方法・回収率、データの取り扱い

JICA パラグアイ事務所からパラグアイ日本人会連合会を通じ、各日本人会に電子ファイルにより配布し、各日本人会が各地の日系人に配布。そのほか、主に都市部において、JICA パラグアイ事務所担当者が知人等を通じ配布。回収はその逆の経路で実施。

回収数は119（そのうち、インタビュー対象者19）。末端配布数は把握できないため、回収率は不明。なお、重複回収が含まれていないことは点検済み。

スペイン語回答は和訳。記載内容の妥当性（コース名、時期、実施機関、ほか）に関し、明白な誤記・誤字以外は修正を施さず、元記載通りに転載。なお、無回答は母数に算入せず、構成比を計算。

2 集計結果

回答者年齢 平均 35.6 歳

回 答	人数	構成比 (%)
20 代	46	45
30 代	24	23
40 代	15	15
50 代	11	11
60 代以上	7	7
合 計	103	100

性別	構成比 (%)
男	34
女	66
合計	100

質問 1) 日系研修をご存知でしたか？

回 答	構成比 (%)
a よく知っていた	39
b ある程度知っていた	50
c あまり知らなかった	8
d 知らなかった	3
合 計	100

質問 2) 日系研修の募集要項を見ますか？

回 答	人数	構成比 (%)
a よく見る	25	21
b 時々見る	62	53
c あまり見ない	23	19
d 見たことがなかった	8	7
合 計	118	100

質問 2-1) おもにどこで見ますか？

回 答	利用数	利用比 (%)
a 日本語新聞	9	8
b JICA ウェブサイト	10	9
c 日系関連団体からの案内	81	75
d その他	8	7
合 計	108	100

質問 2-1 「d その他」の内容
メール（4）、はり紙、日本人会
の回覧。

質問 3) 日系研修に参加したことがありますか？

回 答	構成比 (%)
a ある	43
b ない	57
合 計	100

質問 4-A-2) 日系研修は役立ちましたか？

回 答	人数	構成比 (%)
a 大変役に立った	22	43
b 役に立った	28	55
c 普通	1	2
d 役に立たなかった	0	0
合 計	51	100

質問 4-B) 日系研修に参加しなかった理由 (パラグアイ)

回 答	選択数	選択率 (%)
a 日系研修の存在を知らなかった	6	9
b 応募したいコースがなかった	9	13
c 応募時点では予定を立てられなかった	28	41
d 研修期間が長すぎた	1	1
e 時期が合わなかった	6	9
f 参加要件を満たせなかった	10	15
g その他	13	19
未参加者数	68	—

(4-B : g その他の内容)

研修制度の公開情報が少なすぎるため、存在自体は知っていても特に興味が湧かなかった。必要以上に自分から情報を得ようと思わされなかった。知合いの研修経験から希望しなかった。訪日研修への関心がそれ程高くなかった。特にこれと言った理由はないが、参加しようと思いがたなかった。研修機関を知らなかった、内容も時期も合わなかった。大学の都合。論文作成の時期であった。応募したことがないから。時間がなかった。応募したが合格しなかった。自分はまだ学生だから。それほど関心が無かった。どのように応募するのか分からなかった。研修期間が短すぎた。

質問 5-1) 参加したい研修の分野

回 答	出現比 (%)
a 社会福祉	18
b 保健医療	14
c 農業・農村開発	9
d 自然環境保護	8
e 産業技術	17
f 日本語教育	17
g その他	17
合 計	100

(5-1 : g その他の内容)

国際法、システムエンジニア、会計、若者を動機づけそれを維持するマーケティング、会計、マネージメント、経済関連、商業、洋裁、経営学、マーケティング、経営系、生物化学、初等教育、工学、栄養学、料理等、情報技術、インテリアデザイン、日本の美術・芸術、グラフィックデザイン、裁縫、美容師、建築・設計、料理（和食、菓子作り）、料理、パン作り、菓子作り、美容師、ファッションデザイン、電力生産、美術関係、服飾、建築、経済関連、商業、経済関連、商業、眼鏡の商売関連、会計、商業、調理師、農村婦人リーダー研修、建築

質問 6) 研修員の募集期間の長さ

回 答	人数	構成比 (%)
a 長すぎる	0	0
b 長い	2	2
c ちょうどよい	63	61
d 短い	31	30
e 短すぎる	7	7
合 計	103	100

